茨城県教育財団文化財調査報告第36集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

細原遺跡

昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第36集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

細原（ほそはら）遺跡

昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団

細原遺跡遠景(北から)

細原遺跡遠景(北から)

序

茨城県を縦断する常磐自動車道の建設工事が，日本道路公団によって進められておりますが，この予定地内には，数多くの文化財が埋蔵されておりました。茨城県教育財団は，昭和53年度以降日本道路公団との委託契約に基づき，埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

現在までに発掘調査を終了した遺跡は，常磐自動車道建設に伴う関連開発用地内に所在したものを含めて28か所の多くを数え，その調査の成果につきましては，逐次報告書にまとめて刊行してまいりました。

本書は，昭和59年度に発掘調査を実施した，北茨城市に所在する細原遺跡の調査成果を集録したものであります。細原遺跡は，先土器時代の遺跡として注目を集めております。本書が，研究の資料としてはもとより，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望してやみません。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である日本道路公団から寄せられました御協力に対し，深く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会，北茨城市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜わりましたことに対し，衷心より謝意を表します。

昭和61年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，日本道路公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和59年度に発掘調査を実施した。北茨城市中郷町日棚に所在する細原遺跡の発掘調査報告書である。

2　細原遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内藤男	
副理事長		川又友三郎	
常務理事		綿引一夫	～昭和60年3月
		萩原藤之助	昭和60年4月～
事務局長		小林洋	～昭和60年3月
		堀井昭生	昭和60年4月～
調査課長		青木義夫	昭和59年4月～
企画管理班	班長	市毛洋一	昭和59年4月～昭和60年3月
	〃	北畠健	昭和60年3月～
	主任調査員	加藤雅美	
	主事	鈴木三郎	～昭和60年3月
	〃	田所多住男	昭和60年4月～
	〃	海老沢一夫	～昭和60年3月
	〃	大曽根徹	
	〃	山崎初雄	昭和60年4月～
調査第三班	班長	石井毅	昭和59年度
	主任調査員	沼田文夫	昭和59年度調査
	調査員	小山映一	昭和59年度調査
整理班	整理班長	渡辺千秋	昭和59年度
	〃	石井毅	昭和60年度
	主任調査員	沼田文夫	昭和59・60年度整理・執筆
	調査員	小山映一	昭和59年度整理・執筆

3　本書は，沼田文夫・小山映一が整理・執筆し，沼田文夫が総括編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，石器の石質鑑定を茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏に依頼し，御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第4章第1節2の項を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して，御指導・御協力を賜った関係諸機関及び各位に対し感謝の意を表します。

目　　次

序
例　言

第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……3
第２章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
第３章　調査方法……9
　第１節　地区設定……9
　第２節　基本層序の検討……10
　第３節　遺構確認……13
　第４節　遺構調査……13
第４章　遺構と遺物……14
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……14
　　１　遺跡の概要……14
　　２　遺構・遺物の記載方法……14
　第２節　先土器時代……18
　　１　ユニット……18
　　２　石器……21
　第３節　縄文時代……33
　　１　土坑……33
　　２　遺物……41
第５章　まとめ……52
　第１節　先土器時代……52
　　１　石器について……52
　　２　細原遺跡の編年……53
　　３　焼土粒子・炭化粒子の広がり……54

第２節　縄文時代……59
1　土坑について……59
2　遺物について……61
終章　むすび……65
写真図版

挿図目次

第 1 図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図……2
第 2 図　細原遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図……7
第 3 図　細原遺跡大調査区名称図……9
第 4 図　細原遺跡小調査区名称図……9
第 5 図　C3b₄グリッド土層柱状図……10
第 6 図　細原遺跡全体図……11
第 7 図　先土器ユニット遺物分布図……19
第 8 図　Aユニット出土遺物実測図(1)……27
第 9 図　Aユニット出土遺物実測図(2)……28
第 10 図　Bユニット出土遺物実測図……29
第 11 図　Cユニット出土遺物実測図(1)……30
第 12 図　Cユニット出土遺物実測図(2)……31
第 13 図　Dユニット出土遺物実測図……32
第 14 図　土坑実測図(1)……36
第 15 図　土坑実測図(2)……37
第 16 図　土坑実測図(3)……38
第 17 図　土坑出土遺物実測図・拓影図……40
第 18 図　グリッド出土遺物拓影図(1)……46
第 19 図　グリッド出土遺物拓影図(2)……47
第 20 図　グリッド出土遺物拓影図(3)……48
第 21 図　縄文時代石器実測図(1)……49
第 22 図　縄文時代石器実測図(2)……50
第 23 図　縄文時代石器実測図(3)……51
第 24 図　茨城県における先土器時代の石器群の出土層位と時期区分……54
第 25 図　焼土粒子・炭化粒子の分布状態（第一次面）……55
第 26 図　焼土粒子・炭化粒子の分布状態（第二次面）……57
第 27 図　土坑配置図……60
第 28 図　集石土坑形態分類図……61
第 29 図　土器平面分布図……62
第 30 図　石器平面分布図……63

表目次

表 1　先土器時代石器観察表……24
表 2　土坑一覧表……35
表 3　土坑出土土器観察表……39
表 4　縄文時代石器観察表……44
表 5　拓影土器台帳番号対照表……45
表 6　茨城県における先土器時代石器群の時期区分……53
表 7　土坑形態分類表……60

写真図版目次

中表紙　細原遺跡遠景（北から）

PL　1　遺跡遠景（北から），遺跡南側土層断面図

PL　2　作業風景（土物除去），C3b$_4$区テストピット

PL　3　第4－A号土坑，第4－B号集石土坑，第4－B号集石土坑

PL　4　第5号土坑遺物出土状況，第5号土坑，第9号集石土坑

PL　5　第9号土坑，第12号土坑遺物出土状況，第12号土坑

PL　6　第13号土坑，第15号土坑土層断面図，第17号土坑

PL　7　第18号集石土坑，第18号集石土坑土層断面図

PL　8　第19号土坑遺物出土状況，第19号土坑，第21号土坑

PL　9　第23号集石土坑，B4b$_2$区遺物出土状況，C3e$_0$区遺物出土状況

PL　10　炭化粒子・焼土粒子確認状況

PL　11　水洗用土壌サンプル採集，南東部先土器調査状況・調査後全景

PL　12　A2i$_4$区遺物出土状況，B3b$_2$区遺物出土状況，B3b$_0$区遺物出土状況

PL　13　B3b$_8$区遺物出土状況，B3f$_0$区遺物出土状況

PL　14　B3j$_0$区遺物出土状況，B4d$_2$区遺物出土状況

PL　15　C3a$_0$区遺物出土状況

PL　16　C3a$_0$区遺物出土状況，C3b$_8$区遺物出土状況

PL　17　C4b$_1$区遺物出土状況，C4b$_2$区遺物出土状況，C4c$_1$区遺物出土状況

PL　18　C4c$_1$区遺物出土状況

PL　19　先土器時代石器，ナイフ形土器，掻器，尖頭器，削器，石刃

PL　20　先土器時代石器，石刃，石刃状剥片，剥片石器，剥片

PL　21　先土器時代石器，剥片，打面調整剥片，石核

PL　22　先土器時代石器，石核，敲石，台石

PL　23　縄文時代石器，石鏃，石錐，掻器，尖頭器

PL　24　縄文時代石器，削器，打製石斧，磨製石斧，敲石，磨石

第1章　調査経緯

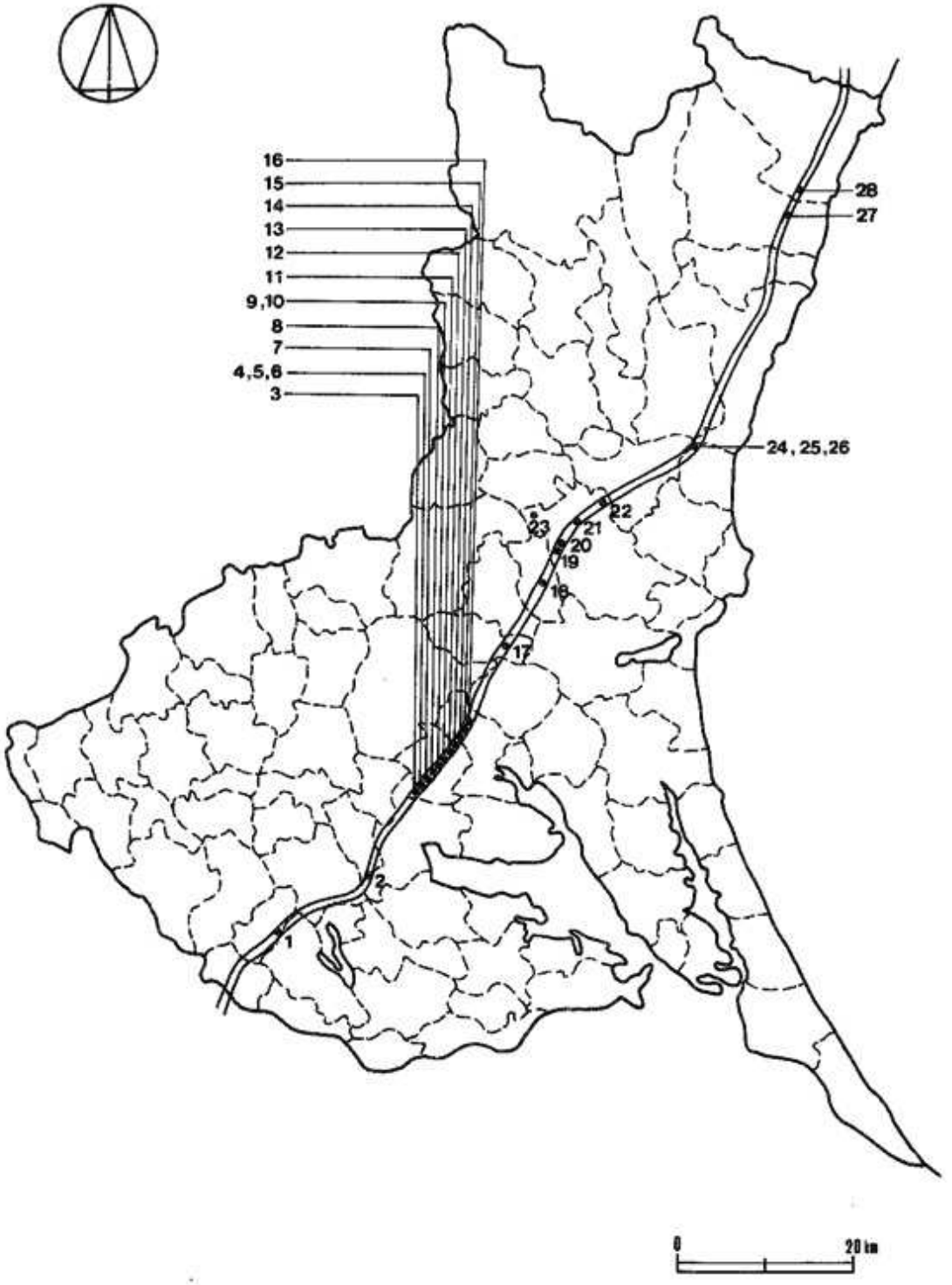
第1節　調査に至る経過

常磐自動車道の建設が昭和41年に計画されたことに伴い，ルート内の埋蔵文化財の分布調査が茨城県教育委員会によって実施された。これに基づき昭和52年，茨城県教育委員会は文化財保護の立場から，常磐自動車道のルート内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果，現状保存が困難な遺跡について記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，昭和53年4月1日付けで日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し，同年筑波郡谷和原村東福戸古墳の発掘調査を開始し，逐次ルートに沿って北上しながら発掘調査を実施してきた。北茨城市中郷町細原遺跡については，昭和47年に宅地造成のため山林部分を削平したおり，その造成地内から先土器時代から奈良，平安時代にかけての遺物が発見され遺跡として確認されていたが，遺跡の東端部が道路建設のため削平されることになった。従って，細原遺跡は，現状保存が困難なため，茨城県教育委員会の紹介により，茨城県教育財団が日本道路公団と委託契約を結び，昭和59年4月から同9月にかけて発掘調査を実施することになった。

昭和53年以降59年度までに，当財団が常磐自動車道関係で調査した遺跡は，下記のとおりである。

No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東福戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	17	塚原古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年
4	上稲吉西原A遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湯気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
5	上稲吉西原B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安	昭和54・55年
6	上稲吉西原C遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
7	中佐谷十石遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	21	南原古墳群(2基)	墓・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	窯跡	奈良・平安	昭和56・58年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	昭和57年
11	大塚古墳群(15基)	古墳	古墳	昭和53・54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
12	松延古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	27	小場遺跡	集落跡・祭祀跡	縄文	昭和59年
14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年	28	細原遺跡	集落跡	先土器・縄文	昭和59年



第１図　常磐自動車道関連用地内遺跡分布図

第2節　調査経過

細原遺跡の調査対象面積は4,003㎡で，昭和59年4月から調査を開始し9月4日をもって全調査を終了した。以下発掘調査の経過について，その概要を記述する。

4月前半　9日の調査区域の確認を手始めに，現場事務所設置場所を選定し，調査計画を作成した。その結果，現場事務所は，高萩市小場遺跡に設置し，細原遺跡の遺構確認調査は，小場遺跡の遺構確認調査終了後に実施することにした。

4月後半　現場事務所，プレハブ倉庫の設置や発掘器材の搬入などの発掘準備の作業を進めた。また，23・25日の2日にわたって北茨城市・高萩市の両教育委員会，高萩市上手綱の地区委員に対し作業員雇用の説明会を実施し，作業員募集と発掘調査に対して協力を依頼した。

5月前半　10日に細原遺跡，小場遺跡の合同の鍬入れ式を小場遺跡において実施した。その後，細原遺跡の調査を始めるまで，小場遺跡の遺構確認調査を実施した。

5月後半　小場遺跡の確認調査と並行して，細原遺跡の上物除去と四メートル四方のグリッド設定を実施した。

6月前半　遺構・遺物の確認作業を4分の1のグリッド発掘によって実施した。その結果，土坑5基，先土器のユニット2ヶ所を確認して，細原遺跡のグリッド発掘による確認作業を終了した。

6月後半　20日に細原遺跡の今後の調査方法について検討をした。その結果，土坑や先土器ユニットを検出した調査区域南半分の表土を，全面的に除去して調査を進めることにした。

7月前半　2日に細原遺跡・小場遺跡の発掘調査の期間延長について，日本道路公団・茨城県教育委員会・茨城県教育財団の三者による現地協議会を行った。

7月後半　18日に日本道路公団と茨城県教育財団との協議の結果，細原・小場遺跡の調査期間を12月末日までに延長することになった。

細原遺跡の調査区南半分の表土除去を重機によって実施した。

8月前半　小場遺跡の調査を一時中止し，1日から細原遺跡の調査を再開した。遺構確認調査を実施したところ新たに18基の土坑を確認し，遺構調査を進めた。調査区域の南半分全域から炭化粒子・焼土粒子が検出されたので，ジョレンで10cmづつ掘り下げて焼土粒子・炭化粒子の密度の広がりを記録していく方法で調査を進めることにした。

10日に，東京都埋蔵文化財センターの館野孝氏を招き，細原遺跡の性格・調査上の留意点等について指導を受けた。

8月後半　調査区域南東部に先土器ユニットを新たに2か所確認し調査を実施した。また，28日

に細原遺跡の航空写真を撮影した。

9月前半　4日に遺跡全景写真を撮影し，細原遺跡の調査を終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

細原遺跡は，茨城県北茨城市中郷町日棚2.017－１番地ほか４筆に所在する。

当遺跡の所在する北茨城市は，茨城県の北東部に位置し，東側は太平洋，南側は高萩市，北側は福島県いわき市，西側は同県東白河郡塙町，鮫川町とそれぞれ接している。市域総面積は，186.39㎢で，東西24km，南北22kmである。人口は，50,262人（昭和60年１月現在）を有している。当市の東部には，海岸線に沿って，国鉄常磐線と国道６号線が走っており，それらは，関東地方と東北地方を結ぶ，経済活動の動脈として重要な位置を占めている。最近は磯原工業団地の造成や，中郷ニュータウンの建設が進んでいる。

北茨城市の地形はその形状から，阿武隈高地と海岸地域に，さらに海岸地域は，丘陵・平地・川・海岸に分けることができる。市域の東側は標高５ｍ内外の砂質低地が太平洋に面し，北部および南部の一部には丘陵性の台地がみられる。北西側には阿武隈高地からの支脈がみられ，丘陵は市域の約７割を占めている。阿武隈高地の和尚山・花園山・高幅山などを水源として，大北川・花園川・里根川・塩田川などの河川が東流し，太平洋に流れこんでいる。これらの河川の流域には肥沃な沖積地が形成され，そのほとんどが水田を主とした農耕地として利用されたり，磯原や大津などの市街地として利用されている。太平洋に面する海岸線は，全長17kmあり，その内，南部の小野矢指から大津までの12kmは，平坦な砂浜海岸で，それより北側の大津岬から平潟までは，岩浜海岸が突出している。砂浜は北東からの卓越風によって砂丘の発達が著しく，足洗・下桜井・神岡・仁井田などは砂丘の上に発達した集落である。岩浜海岸は，海岸近くまでせまった丘陵が，太平洋の荒波に浸食されてできたもので，岡倉天心ゆかりの五浦海岸・天然の良港である平潟港，岬を利用した大津港など観光や水産業と重要な関係がある。

当遺跡は，常磐線南中郷駅から西へ約３kmの距離にある。塩田川[1]北岸の阿武隈高地の支脈から東に細長く張り出した標高50～54ｍほどの舌状台地上に位置している。細原の台地縁辺部は，急傾斜を示し周囲は東流する塩田川及びその支流によって，沖積地が形成されている。台地と沖積地との比高は約30ｍほどである。台地上は，ほぼ平坦であるが，各縁辺部に向って緩やかに傾斜し，さらに，台地中央部から南東方向に緩やかな傾斜を示している。

細原遺跡の東方約500ｍには，塩田川沿いに日棚地区の集落が発達しており，また西方300ｍの細原台地北の低地には，石炭産業全盛時に栄えた常磐炭鉱中郷鉱の廃鉱が残っている。

今回の調査区域は，常磐自動車道建設用地にかかる台地の東端部で，調査対象面積は4,003㎡であり，現況は山林である。

第2節　歴史的環境

原始・古代における北茨城市は，生活環境としての地形に恵まれ，阿武隈高地を開析して東流する各河川の両岸に張り出した台地上には多くの遺跡が点在している。

北茨城市の原始・古代の遺跡は，『茨城県遺跡地図』によると，縄文時代26遺跡，弥生時代13遺跡，古墳時代56遺跡，奈良・平安時代13遺跡が確認[2]されている。この他に先土器時代の遺跡として細原遺跡（1）の一部が，昭和55年に調査され，報告されている。当遺跡は，先土器時代の石器や剥片類のほかに，縄文時代早期から晩期にわたる土器片，弥生時代後期の土器片，土師器，須恵器なども採集され長期間にわたって居住地として利用されていた遺跡であると考えられる。

細原遺跡周辺の遺跡としては，まず塩田川流域の遺跡として，当遺跡をはじめ[3]金子沢B遺跡（5）・姫宮遺跡（7）・日棚小学校遺跡（8）・小野遺跡（2）・縑塚遺跡（9）・輪台遺跡（3）などがあげられる。これらの遺跡は，ほとんどが縄文時代から奈良，平安時代にかけての複合遺跡であり，縑塚遺跡・輪台遺跡は一部で古墳群と複合している。さらに，塩田川河口右岸には，砂地上に構築された矢指塚古墳群（4）がある。万作山（現在の中郷ニュータウン）の北側の足洗には，茨城県の弥生時代中期の標準遺跡としての足洗遺跡（14）があり，平行沈線文を主体とする土器群による合口甕棺6基，壺棺4基が出土している。足洗遺跡の西側の松井台地上にも遺跡が点在し，縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である花地遺跡（11）や松井台遺跡（10）が知られている。特に松井台遺跡は，縄文時代から奈良，平安時代の遺物のほか，鉄滓も出土しており，たたら跡の存在が考えられる。

古墳時代になると，階級社会が確立[4]し，豪族は支配者として大きな権力を持ち，各地に高塚や墳墓を築造するようになった。北茨城市における最大の古墳は，関本町大塚古墳で，全長100mの前方後円墳である。『常陸多賀郡史』によれば，この古墳は多賀国造の墳墓といわれている。そのほか，前方後円墳は中郷町南塚古墳群[5]（15）・矢指塚古墳群・天王塚古墳群（13）などにみられる。南塚古墳群からは人物埴輪，円筒埴輪が出土し，天王塚古墳からは太刀類が出土したことが，『松岡地理志』に記されている。

中世においては，後城山城跡・車城跡・館山城跡・山小屋城跡・湯之網城跡・島崎城跡（12）・石岡城跡・菅俣城跡（17）・椎塊山館跡などの城館跡が数多く存在している。

茨城県の北東部に位置する北茨城市は，このように原始・古代から各時代にわたって，人々の生活が営まれてきたことがうかがえる。

第２図　細原遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

1　細原遺跡
2　小野遺跡
3　輪台遺跡
4　矢指塚古墳群
5　金子沢Ｂ遺跡
6　金子沢Ａ遺跡
7　姫宮遺跡
8　日棚小学校遺跡
9　糠塚遺跡（糠塚古墳群と複合）
10　松井台遺跡
11　花地遺跡
12　島崎遺跡（島崎城跡と複合）
13　天王塚古墳群
14　足洗遺跡
15　南塚古墳群
16　台畑遺跡（台畑古墳群と複合）
17　菅俣城跡

参考文献

(1) 『図説北茨城市史』 北茨城市史編さん委員会 1983年

(2) 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 1977年

(3)(4)『細原遺跡』 北茨城市史編さん委員会 1982年

(5) 『常陸多賀郡史』 常陸書房 1979年

第3章　調査方法

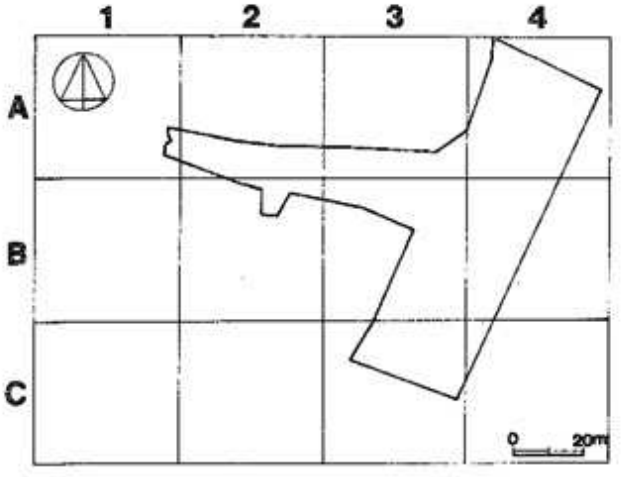
第1節　地区設定

細原遺跡の調査対象面積は，4,003m²であり，現況は山林である。遺跡のほぼ中央から南半分は平坦な台地であり，北半分は急傾斜をなしている。

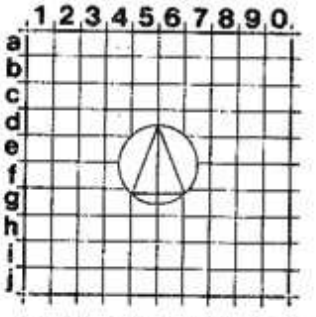
遺跡の位置を明確にし，正確な調査を期すため，日本平面直角座標第Ⅸ系X座標（南北）＋84,760m，Y座標（東西）＋77,580mを基準点とし，その基準点を中心に座標北で40m方眼を設定し大調査区とした。（基準点は，標高（TP）51,227m，磁北偏差6度40分である。）さらに，大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち，40m四方の大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区は，基準点から北方へ80m，西方へ120mの点を起点とし，南へ「A」・「B」・「C」とし，東へ大文字で「1」～「4」とし，A1区・B2区等と表記した。小調査区は，南へ「a」・「b」～「i」・「j」とし，東へ小文字で「1」～「9」・「0」と表わした。各調査区の名称は，大調査区と小調査区を合わせて「A1a₁」・「B2b₂」のように表記した。この小調査区をグリッドと呼称した。

なお，基準点の測量杭打ちは社団法人茨城県建設コンサルタントに委託した。



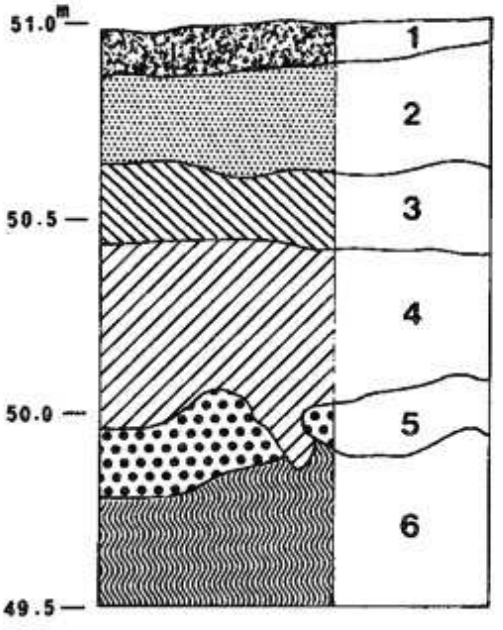
第3図　細原遺跡大調査区名称図



第4図　細原遺跡小調査区名称図

第2節　基本層序の検討

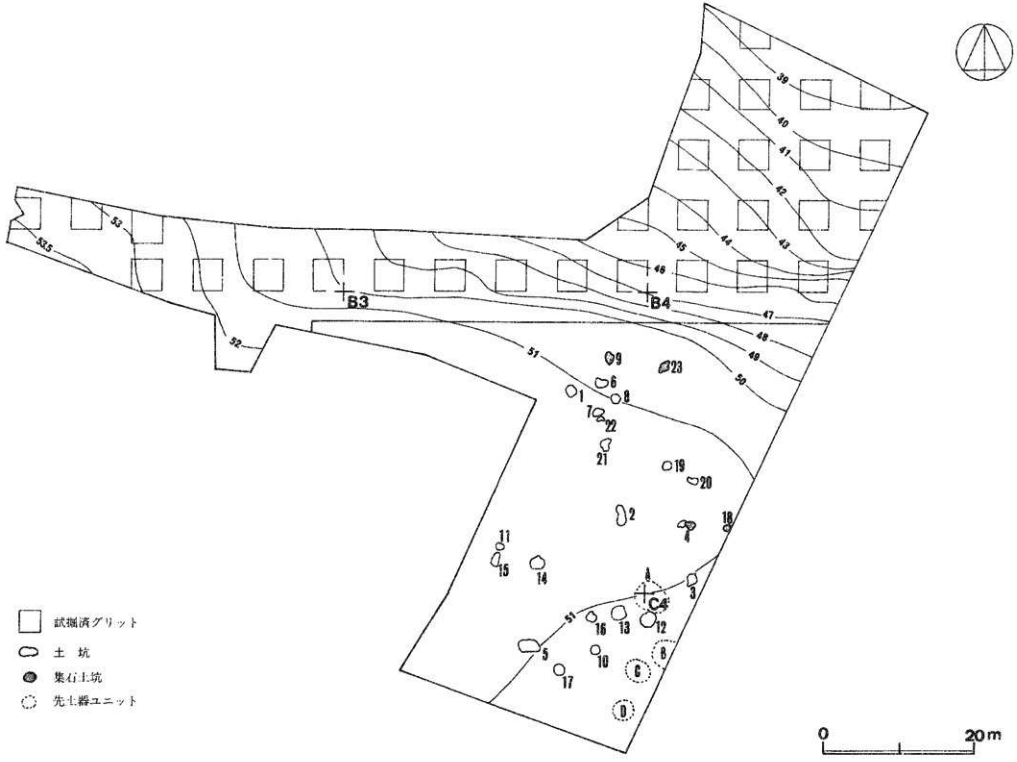
調査区南西部のC3b₄グリッドにテストピットを掘り，土層を詳しく観察したものが，第5図である。1層は黒褐色を呈する本来の表土層で，10cmほどの厚さを有し，土質は軟らかい。2層は暗褐色を呈しており，1層から3層への漸移層と考えられる。20～30cmほどの厚さを有しており，1層よりも粘性をおびている。3層は，黄色の色調の強い明褐色を呈し2層よりも粘性が強く軟らかい。2mm～5mmほどの炭化粒子，焼土粒子を含んでいる。20～30cmほどの厚さを有し，2層との境界は波状を呈しており，木の根の撹乱もみられる。この層は，先土器時代の遺物包含層である。4層は，3層と同じく明褐色を呈しており，粘性は強くなり硬さも増すが，反面削るとパサパサしている。この層からの遺物の出土はみられない。5層は黄褐色を呈するパミス層である。10～15cmほどの厚さを有しているが，ところどころこの層が切れている部分がみられる。6層は明褐色を呈する粘土層で，いずれの層よりも堅く，微細な小礫を含んでいる。近接する切通しの断面観察によると，6層の40～50cm下位は礫層に達している。



土層解説

1	Hue	7.5YR	3/2	黒褐色	表土層
2	Hue	7.5YR	3/4	暗褐色	表土からローム層への漸移層
3	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ソフトローム層
4	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	ハードローム層
5	Hue	10 YR	5/8	黄褐色	パミス層
6	Hue	7.5YR	5/6	明褐色	粘土層

第5図　C3b₄グリッド土層柱状図


B3
B4
C4
53.5
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
試掘済グリット
土　坑
集石土坑
先土器ユニット
0
20m

第6図　細原遺跡全体図

第3節　遺構確認

当遺跡の遺構確認は，次のような方法で実施した。最初に全調査区の4分の1の割合でグリッド発掘による表土除去を実施し，遺構，遺物の確認調査を行う方法をとった。次に遺構，遺物の分布状況に応じて，周辺の小調査区を拡張していく方法で確認調査を進めた。その結果，調査区の南側半分には先土器の遺物，炭化粒子，焼土粒子が分布していることが確認され，また，表土にはほとんど遺物が含まれていないことが判明したので，重機によって，南側半分の表土を20～25cm全面除去し，確認調査を進めた。その後，炭化粒子，焼土粒子の分布状況を調査するために，ソフトローム層を10cmずつ掘り下げて調査を進めた。さらに，調査区南東部の先土器ユニットを確認した部分は，4層のハードロームをグリッドの2分の1の割合で，5層のパミス層直上まで掘り下げ遺物がないことを確認した。

第4節　遺構調査

土坑の調査は，長径で1区・2区に分割して掘り込む二分割法を用いた。

土層については，色相，各種粒子の含有状態，粘性，硬度，締まり，吸水性，混入物等を観察して分類の基準とした。遺物の取り上げについては，土坑の各区名と，遺物番号，出土位置，レベル等を記録し収納した。平面実測については，小調査区設定の基準線をもとにした水糸方眼地張測量で行った。また，土層断面，遺構断面の実測は，標高を用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準として実測した。焼土粒子，炭化粒子の平面的な分布状態の調査については，水糸を1m四方に張り，その中の炭化粒子は白い串，焼土粒子は赤い串を立てて，それぞれの本数を数えて記録した。先土器ユニットの調査については，グリッドごとに遺物番号，出土位置，レベル等を記録し収納した。さらに，ユニット周辺の土を水洗いして剥片を採集した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。

図面や写真等に記録できない事項に関しては，遺構カードや調査日誌に記録した。

第４章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１　遺跡の概要

細原遺跡は，阿武隈高地から東に細長く張り出した舌状台地の先端部に位置する遺跡である。

調査の結果，先土器のユニット，縄文時代の土坑が検出された。先土器のユニットは，台地の平坦部から南東方向へ緩やかに傾斜する大調査区C3・C4地区から検出された。遺物は，ナイフ形石器，掻器，削器，石核，剥片等が出土し，それらは，４か所のユニットとしてとらえることができる。また，調査区南半分の全面にわたって，焼土粒子，炭化粒子を検出した。

縄文時代の遺構としては，土坑が20基，集石土坑が４基検出された。ほとんどの土坑が，数片の縄文土器片しか出土しなかったが，第５号土坑からは，187片の土器片が出土している。石器は，石鏃，打製石斧，磨製石斧，掻器，削器，磨石，石皿等が出土しているが，いずれも数点で，そのほとんどは遺構外からの出土である。

先土器時代，縄文時代の遺物以外には，弥生時代の土器片が少量出土しているが，弥生時代に伴う遺構は検出できなかった。

２　遺構・遺物の記載方法

細原遺跡における遺構・遺物の記載方法は，下記の要領で統一し記載した。なお，集石を伴う土坑については，集石土坑と呼称した。

(1)　使用記号

土坑はSKの略号をもって表記した。

(2)　土層の分類記号

細原遺跡の調査による土層観察は，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行）を使用し，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって記載した。

番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物
1	褐色	Hue 7.5YR	5/3・5/4・5/6	a ローム粒子を含む。
2	にぶい褐色	Hue 7.5YR	5/4	b ローム小ブロックを含む。
3	明褐色	Hue 7.5YR	5/6・5/8	c ロームブロックを含む。
4	暗褐色	Hue 7.5YR	3/3・3/4	d ローム・焼土・炭化粒子を含む。
5	橙色	Hue 7.5YR	5/6	e 焼土・炭化粒子を含む。
6	黒色	Hue 7.5YR	2/1	f 焼土粒子を含む。
7	黒褐色	Hue 7.5YR	3/1・3/2	g 炭化粒子を含む。
8	灰褐色	Hue 7.5YR	5/2	h 炭化物を含む。（木炭）
9	黒色	Hue 5 YR	5/1	i 焼土ブロックを含む。
10	黒褐色	Hue 5 YR	3/1	j パミスを含む。
11	赤褐色	Hue 5 YR	5/6・5/8	k 砂粒
12	暗赤褐色	Hue 5 YR	3/3	l 礫層
13	赤褐色	Hue 2.5YR	5/8	
14	暗赤褐色	Hue 2.5YR	3/3・3/4	

※「小ブロック」は直径5㎜未満のものとした。

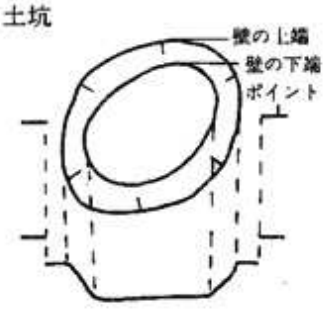
「中ブロック」は直径5～20㎜のものとした。

上記以外のものは「ロームブロック」とした。

※含有物の量については，少量検出されたものを基準とし，やや多くみられるものについては，「・」を，さらに多く認められるものは「‥」を付加して表示した。

(3) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

土坑



① 土坑は，縮尺1/20の原図をトレースして版組みし，それをさらに1/3に縮少して掲載した。

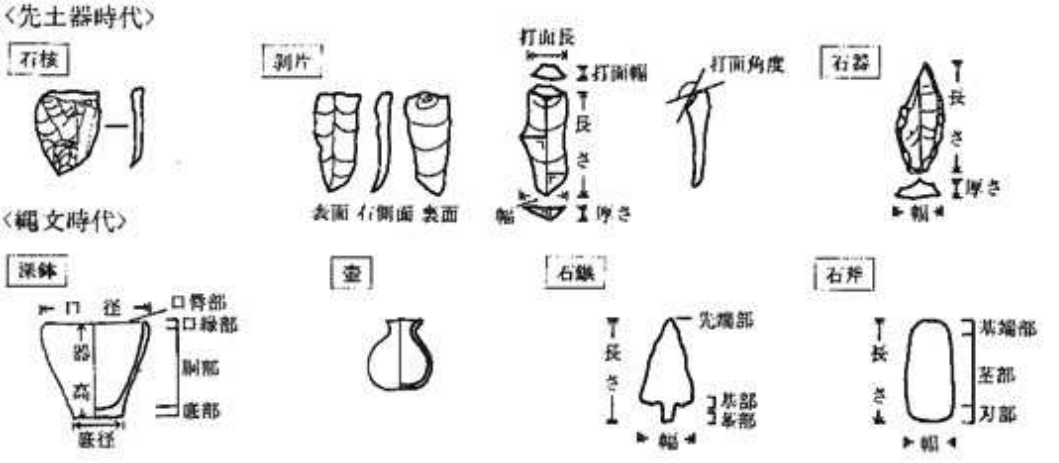
② 土坑実測図の掲載については，遺構番号順に掲載した。

③ 焼土粒子，炭化粒子の分布状況図は，2m四方の区画の中の炭化粒子，焼土粒子の数をドットで表示した。

(4) 遺物の記載方法と遺物実測図の見方

本報告書では，先土器時代の遺物と縄文時代の遺物に分けて掲載した。先土器時代の遺物については，石器，石核，使用痕のある剥片と認められるものはすべて掲載した。単なる剥片類は，大形のもののみ掲載した。縄文時代の遺物については，遺構から出土した遺物が少ないため，遺構内出土の遺物と遺構外出土の遺物をまとめて掲載した。

① 各部位の名称と法量表現のための名称



② 土器実測図は，4分割法を用い，中心線を挟んで左側に外面，右側に内面及び断面を記録した。

③ 拓影図は，断面図を右側に掲載した。なお，胎土に繊維を含むものは，▒で表した。

④ 土器の色調は，土層と同じ土色帖を用いて判別した。

⑤ 石器の実測は，三角図法を用い，左側面を軸に反転し作図した。

⑥ 石器に観察される磨りの範囲は，|←o o→|(‾‾)で表し，敲きの範囲は，|←o o→|(‾‾)で表し，凹みの範囲は，(‾‾)で表した。

⑦ 遺物記載図版類の縮尺は，土器，土製品については⅓，石器については¼，⅕，½，⅓とした。

(5) 一覧表の見方について

ア 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(m)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号

① 位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

② 長径方向は，座標北と長径のなす角度で示し，平面形が円形を呈するものは空欄とした。

③ 平面形は，掘り込み上面の形状を表した。

④ 規模の長径×短径は，上面の計測値（m）を表した。

⑤ 壁面は，底面からの立ち上がり状態によって次のとおり表した。

○ およそ80°～90°の傾き―垂直　○ およそ60°以内の傾き―緩やかに立ち上がる。

○ およそ60°～80°の傾き―外傾　○ 開口部が括れている―袋状

⑥ 底面は次のとおり分類した。

平坦，皿状，凹凸，ゆるい起伏，

⑦ 覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」とした。

⑧ 出土遺物は，代表的な出土遺物名と，時期判定の可能な範囲で土器型式を記した。

イ 先土器時代石器観察表

図版番号	台帳番号	器　種	ユニット出土地	長さ・幅・厚さ・重さ	石　質	備　考

① 図版番号は，本報告書に掲載した実測図の番号である。

② 台帳番号は，遺物台帳に記載されている番号である。

③ 出土地は，遺物が出土した小調査区名で表した。

④ 長さ，幅，厚さは，前述の「遺物記載方法の各部位の名称と法量表現，先土器時代の石器」に従ったが，打点を欠損している剥片については，最大長を長さとし，それに直交する最大長を幅とした。

⑤ 備考は，使用痕や特徴等を表した。

ウ 縄文時代石器観察表

図版番号	台帳番号	器　種	出　土　地	長さ・幅・厚さ・重さ	石　質	備　考

① 図版番号，台帳番号，石質については，先土器時代石器観察表に同じである。

② 器種は，同一器種別にまとめて掲載した。

③ 出土地は，その石器が出土した遺構や小調査区名で表した。

④ 長さ・幅・厚さは，「各部位の名称と法量表現のための名称」に従った。

⑤ 備考は，器種を細分類した名称や特徴等を表した。

第2節　先土器時代

1　ユニット

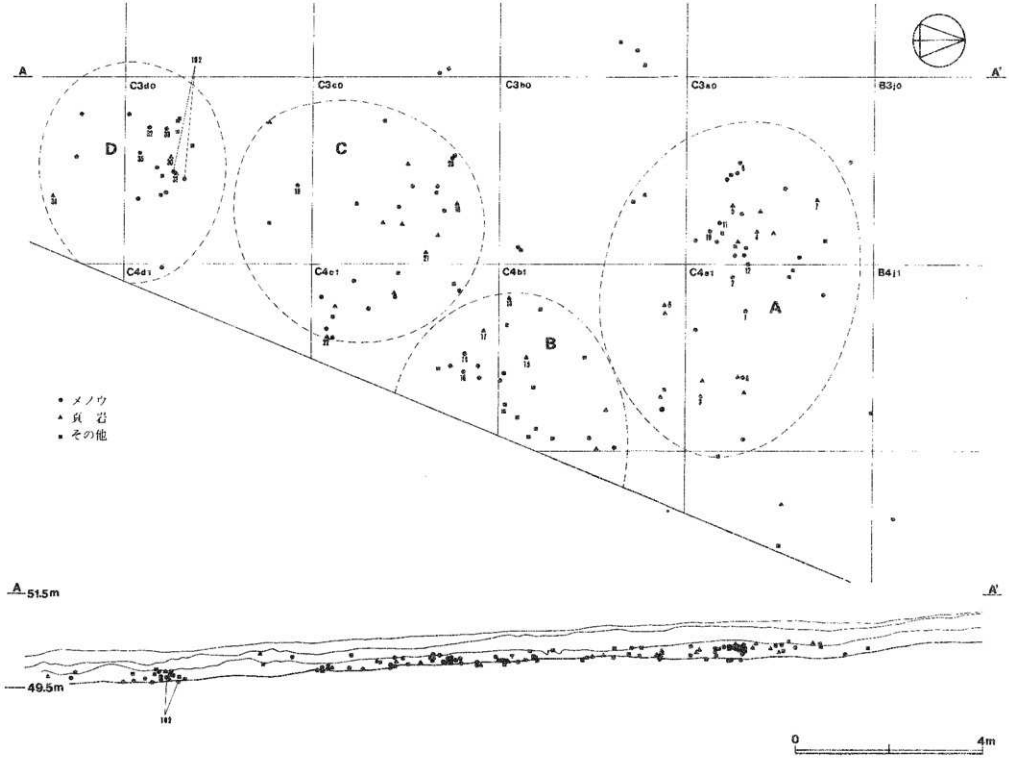
先土器時代の石器は，遺跡南東部の台地縁辺部から出土した。この地域は，台地が南東側に緩やかな傾斜を始める所に位置している。出土層位は，第三層ソフトローム下部であり，第四層のハードロームには及んでいない。出土範囲は，南北18m，東西7mの帯状を呈し，その中に4か所の石器集中地区を有していた。これらの石器集中地区をそれぞれ1つのユニットとしてとらえ北からA・B・C・Dと記号付けして調査を行った。

Aユニットは，長軸7m，短軸4mほどのほぼ楕円形を呈している。4か所のユニットの中では，面積が最も広く，石器の出土量も最も多かった。ナイフ形石器2点，掻器1点，削器1点，石刃2点，尖頭器1点，めのうの石核3点のほか多量の剥片，細片が出土し，出土総数は78点であった。ユニットの中心部に，縄文時代後期初頭の12号土坑が検出された。ナイフ形石器は2点とも，この12号土坑覆土から出土しており，Aユニットは，主要部に攪乱を受けているものと思われる。石質は，めのうが約70%で，頁岩が約18%をしめている。なお，ユニット内の土を水洗し，40点の小剥片と細片を採集した。これらの石質は，ほとんどがめのうで，他に頁岩，チャートの細片が少量混っていた。

Bユニットは，遺構の半分以上が調査区域外にのびており，全容を明らかにすることはできなかったが，直径5mほどの円形を呈するものと思われる。掻器1点，石刃1点，剥片石器1点が出土しているが，4か所のユニットの中では，石器の出土数が最も少なかった。剥片の数も8点と少なかった。石質は，めのう36%，頁岩16%，チャート48%で，チャートの割合が多いが，チャートは，すべて細片であった。

Cユニットは，直径5mほどのほぼ円形を呈している。削器1点，石刃3点，石刃状剥片1点敲石2点，打面調整剥片1点，石核1点，台石1点と多種の石器が出土しており，石器の総数も多かった。他ユニットに比較して，敲石，打面調整剥片，石核，台石など石器製作にかかわる遺物が多く出土している。石質は，めのう48%，頁岩27%で，めのうを主体としているが，削器石刃など主な石器には，頁岩が使用されていた。その他，敲石に流紋岩が，台石に花崗岩が使用されている。チャートは，20%を占めているが，すべて細片であった。

Dユニットは，直径約4mの円形を呈する小規模なものである。ナイフ形石器1点，石刃1点敲石1点，石核1点が出土しているが，総出土数は，4か所のユニットの中で最も少なかった。剥片の接合を試みた結果，4か所のユニットの中で，本ユニットのめのうの剥片2点のみが接合できた。石質は，めのう50%，頁岩15%で，めのうを主体としているが，めのうは剥片だけであ



第7図　先土器ユニット遺物分布図

った。その他，蔵石に流紋岩が使用されている。チャートは，33%を占めているがすべて細片であった。

これら，4か所のユニットは，互いにわずかながらの距離をおいて形成されているが，石器，剥片に使用されているめのうの含有物，色調を観察すると，2ユニットにまたがって同一石材から剥離されたと思われるものが出土している。特に，AユニットとCユニット，CユニットとDユニットに同一石材が検出されている例が多い。このことから，各ユニットは，互いに関連するものと思われる。

2　石　器

A　ナイフ形石器（第8図1・2・第13図31）

1は，中央に一条の稜を有し，断面が三角形を呈する縦長剥片を素材としている。左側縁基部は石質が悪く不整形である。調整は，その部分を裏側に向って数回行っているだけであり，全体として粗雑な作りである。主な刃部は，先端から右側縁にかけてであり，特に先端部は著しく磨滅している。なお右側縁には微細な刃こぼれが観察できる。石質は，めのうである。2は，小形の縦長剥片を素材としている。打点側を基部として左右の側縁から表面に向ってていねいな刃潰し加工を行っている。この調整により，稜線・打面は消失している。刃部は，先端と左側縁であり，特に先端に使用痕が残されている。石質は，めのうである。31は，二本の稜を有し断面が台形を呈する縦長剥片を素材としている。風化が激しく，剥離方向の観察は不可能である。左側縁と右側縁基部に刃潰し加工が行われている。刃部は，右側縁であるが，刃は鈍角で，先端部は尖っている。使用痕の観察は，表面が風化しているため不可能である。石質は頁岩である。

B　尖頭器（第9図7）

7は，厚手の縦長剥片を素材とした尖頭器の先端部である。側縁より表裏に向って調整を行い尖頭部を作出している。器の大部分を欠損しており全体の形状は明らかではないが，細身の木葉形尖頭器であると思われる。石質は，頁岩である。

C　掻器（第8図3・第10図14）

3は，断面がかまぼこ状をした厚手の縦長剥片を素材としている。刃部は，肥厚した打点側に作出されている。刃部の一部は欠損しているが，本来はゆるやかな弧状であったと思われる。石器の右側縁にも使用痕が残り，削器として二次的な利用がなされたものと思われる。石質は，頁岩である。14は，方形の剥片を素材とし，各側縁に調整を加えて刃部を作出している。右側縁は，かなり鈍角に調整が加えられており，刃潰し加工である可能性が高い。石質は，めのうである。

D　削器（第８図４・第12図24）

４は，中央に一条の稜を有し，先端が尖った縦長剥片を素材としている。右側縁は，自然面であり，左側縁にのみ，細かい調整が行われている。調整方向には，統一性がなく，打点近くは表側に，先端近くは裏側に向って剥離調整が行われている。石質は，頁岩である。24は，二条の稜を有する縦長剥片を素材としている。両端を欠損し，風化も激しいので石器か否かの判別は困難であったが，右側縁からの調整により刃が付されているので削器とした。左側縁には，調整痕は認められず，かなり純角で刃部としての機能を持たない。石質は，頁岩である。

E　石刃（第８図５・６，第10図15，第11図18・21・22，第13図34）

中央に両側縁と平行する一条の稜を有する縦長剥片で，断面は，いずれも三角形である。石質は，15が硬質の安山岩である外は，すべて風化の激しい頁岩である。６，15，34は，調整痕も使用痕も認められない。18は，左側縁部から大きな剥離が行われ，打点側はかなり薄くなっている。ナイフ形石器の未製品とも思われる。５，21，22は，基部に調整痕を有するものである。特に21は，基部が調整された部分に使用痕を有している。使用痕から掻器的な使用がなされたものと思われる。

F　石刃状剥片（第10図16・17，第11図20）

16，17は，中央に一条の稜を有し側縁は先端に向って広がっている。17は，先端部が磨耗し使用痕を残している。20の側縁は先端に向ってすぼまり，先端は鋭く尖っている。右側縁に刃こぼれ状の使用痕が残る。石質は，いずれも頁岩である。

G　剥片石器（第10図13）

13は，平行する側縁と二条の稜を有する方形の剥片である。左側縁には刃潰しとも思える大まかな調整が加えられており，先端部と右側縁部には明らかな使用痕が残っている。定形的な石器ではないが，削器や掻器の機能を合せ持つ多目的な使用がされたものと思われる。石質は頁岩である。

H　打面調整剥片（第11図19）

19は，円盤状の剥片で周囲に巾1.0～2.5cmほどの剥離面を残している。石質はめのうであるが，同質の石材は，Ａ，Ｃユニットの小剥片に見られた。

I　剥片（第９図11・12，第11図19・23，第12図26～29，第13図32・33）

11，12，23，29，32，33は，不整形の剥片で，石核整形時に得られる調整剥片と思われる。石質は，29が頁岩，その他は，すべてめのうであった。26，27，28は，片面に調整痕を持ち断面が三角形を呈するものである。彫器の彫刀面作出時に生じる削片と思われるが，当遺跡からは，対応する石器は１点も出土していない。石質は，めのうである。

J　石核（第９図８～10，第13図30）

８は，裏面に平坦な自然面を有する。石核の周囲には，自然面からの剥離によって６枚の打面が作出されている。打面には，５か所の打点を有し巾２cmほどの剥片が剥離されている。９は，断面が三角形を呈する石核である。側面図に表された１枚の剥離面を打面とし，５か所に打点を有している。10は，滑らかな自然面を打面として剥離が行われている。最終的には，２か所の打点を有し，長さ4.2cmほどの縦長剥片が剥離されている。30は，実測図上端を打点とし，剥離が行われたものと思われる。風化が激しく，打点，剥離面などの観察は困難であるが，長さ5.5cm，巾2.5cmの剥離面が１枚残存する。石質は，８，９，10がめのう，30は頁岩である。

K　敲石，台石（第12図25・第13図35・ＰＬ22－33）

25，35は，流紋岩製の敲石である。25は，平面形が三角形を呈するもので各角に激しい敲打痕を有する。35は，先端部に重心を持つ細長いもので，先端及び右側縁の稜に敲打痕を有している。ＰＬ22－33は，2.2cmから2.8cmの厚さを持つ平らな花崗岩で形態から台石とした。上端と左側縁を欠損している。表面には，３か所のごく浅い凹部を有している。欠損部を除く器面は，全体に赤変しており，欠損以前に火を受けたものと思われる。

表1　先土器時代石器観察表

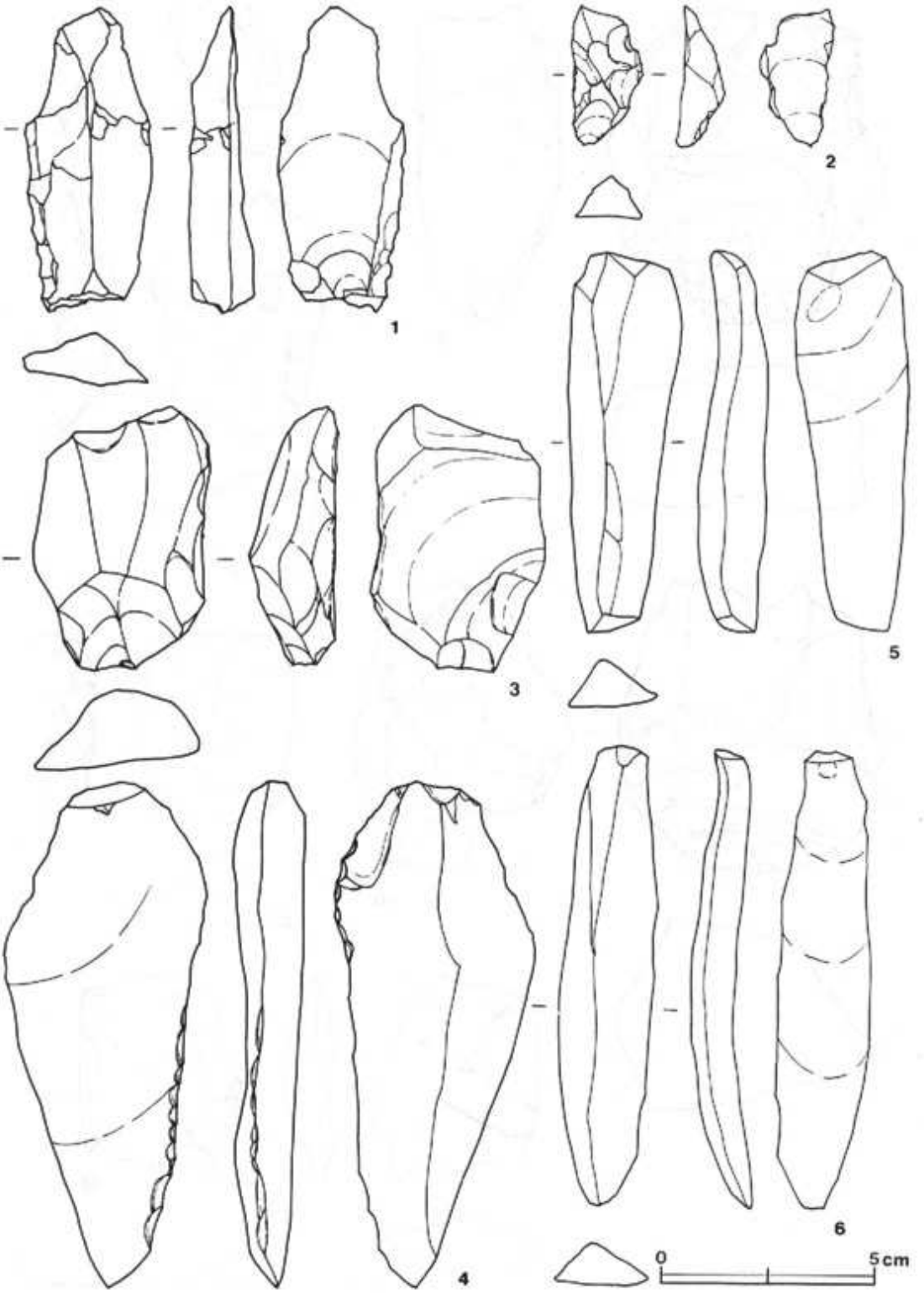
(1)

図版番号	台帳番号	器種	ユニット	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	形態特徴
第8図 1	9	ナイフ形石器	A	C4a₁	7.1	2.9	1.5	22.0	メノウ	
2	10	ナイフ形石器	A	C4a₁	3.3	1.7	1.1	3.0	メノウ	
3	14	掻器	A	C4a₁	6.0	4.2	1.8	41.0	頁岩	刃部欠損
4	8	削器	A	C3a₁	11.2	4.7	1.7	62.0	頁岩	
5	7	石刃	A	C3a₀	9.0	2.7	1.6	25.0	頁岩	基部調整
6	37	石刃	A	C4b₁	10.7	1.7	1.1	20.0	頁岩	
第9図 7	80	尖頭器	A	C3a₀	2.45	1.65	0.5	1.0	頁岩	尖頭部のみ残存
8	4	石核	A	C3a₀	7.3	5.6	3.4	190.0	メノウ	
9	12	石核	A	C4a₁	5.7	4.1	3.0	49.0	メノウ	
10	1	石核	A	C3a₀	6.8	6.2	5.2	184.0	メノウ	
11	6	剥片	A	C3a₀	4.4	3.7	1.9	26.0	メノウ	左側縁に使用痕
12	2	剥片	A	C3a₀	4.7	1.9	1.3	21.0	メノウ	調整剥片
	3	剥片	A	C3a₀	3.2	2.0	1.2	4.0	メノウ	
	5	剥片	A	C3a₀	3.8	2.7	1.6	12.0	メノウ	
	11	剥片	A	C4a₁	3.9	2.9	1.3	14.5	メノウ	
	13	剥片	A	C4a₁	7.7	3.55	2.5	41.0	頁岩	
	15	剥片	A	C4a₁	4.6	2.1	0.8	0.6	頁岩	
	16	剥片	A	C4a₁	6.9	4.9	1.1	27.0	頁岩	
	17	剥片	A	C4a₂	8.4	2.9	0.6	8.0	頁岩	
	81	剥片	A	C4b₁	5.1	2.9	0.9	15.0	メノウ	
	85	剥片	A	C3a₀	2.95	1.9	0.2	1.1	メノウ	
	86	剥片	A	C3a₀	3.1	2.1	0.2	1.5	メノウ	
	87	剥片	A	C3a₀	3.2	1.2	0.4	2.5	メノウ	
	89	剥片	A	C3a₀	2.6	2.0	0.4	1.8	メノウ	
	90	剥片	A	C3a₀	2.3	1.6	0.2	1.4	メノウ	
	91	剥片	A	C3a₀	2.3	0.9	0.3	0.8	メノウ	
	93	剥片	A	C3b₀	3.6	2.6	0.8	6.8	メノウ	
	107	剥片	A	C4a₁	1.9	1.5	0.25	0.8	メノウ	
	108	剥片	A	C4a₁	3.8	2.9	1.2	10.0	メノウ	
	120	剥片	A	C4b₁	9.7	4.7	1.3	50.0	頁岩	
	121	剥片	A	C4b₁	5.7	3.4	0.6	12.5	頁岩	
	123	剥片	A	C3a₀	2.7	2.5	1.0	5.5	頁岩	

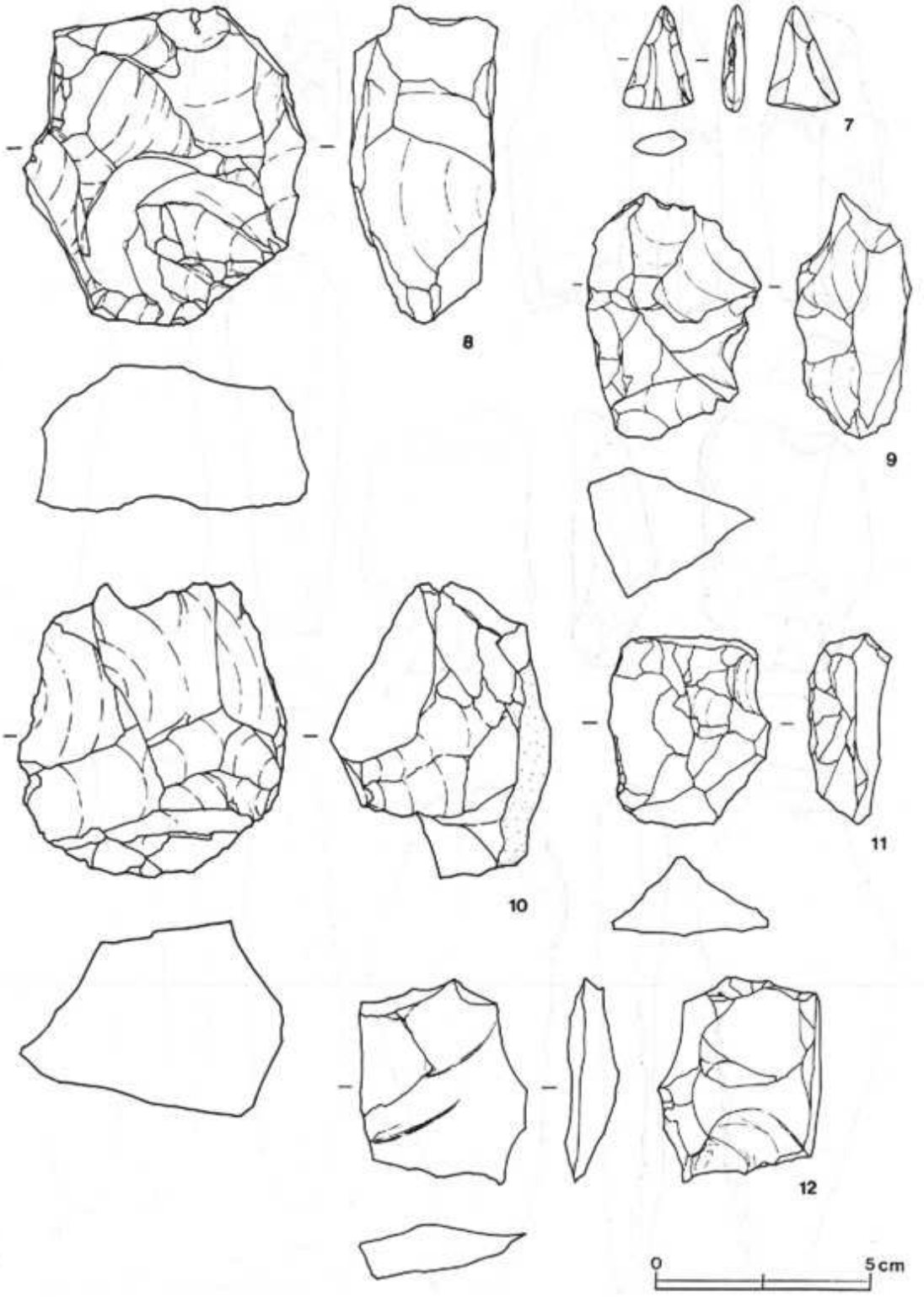
図版番号	台帳番号	器種	ユニット	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	形態特徴
	124	剥片	A	C3a₀	4.8	4.1	1.7	22.0	頁岩	
	125	剥片	A	C3a₀	2.9	1.4	0.6	1.8	頁岩	
	138	剥片	A	C3a₀	5.9	2.2	1.4	18.0	メノウ	
	139 a	剥片	A	C3a₀	2.2	1.5	0.3	1.0	メノウ	
	146	剥片	A	C4a₁	5.4	3.2	1.3	23.0	メノウ	
第10図 13	147	剥片石器	B	C4b₁	7.8	6.1	1.8	89.0	頁岩	先端，右側縁に著しい使用痕
14	26	掻器	B	C4c₁	3.8	3.9	1.6	20.0	メノウ	
15	148	石刃	B	C4c₁	8.0	2.7	1.2	29.5	安山岩	
16	122	剥片	B	C4b₁	7.2	4.1	1.3	29.5	頁岩	縦長
17	29	剥片	B	C4c₁	5.2	2.4	1.0	9.0	頁岩	先端部に擦痕
	113	剥片	B	C4c₁	4.2	2.4	0.8	7.5	メノウ	
	116	剥片	B	C4c₁	3.0	1.9	0.9	6.5	メノウ	
	117	剥片	B	C4c₁	3.6	2.2	1.4	8.0	メノウ	
	118	剥片	B	C4c₁	2.8	2.5	1.2	6.7	メノウ	
	144	剥片	B	C4c₁	3.6	3.0	0.7	7.4	頁岩	
第11図 18	22	石刃	C	C3c₀	11.2	3.15	1.2	45.0	頁岩	基部調整，右側縁に使用痕
19	30	打面調整剥片	C	C3d₀	4.5	4.6	1.4	28.0	メノウ	
20	149	石刃状剥片	C	C4c₁	6.7	2.6	1.1	10.5	頁岩	右側縁に使用痕
21	20	石刃	C	C3c₀	7.5	2.6	1.3	18.0	頁岩	基部調整　基部に使用痕
22	27	石刃	C	C4c₁	8.5	2.6	0.7	14.0	頁岩	基部調整
23	18	剥片	C	C3c₀	6.8	4.2	1.9	36.0	メノウ	調整剥片
第12図 24	21	削器	C	C3c₀	5.1	2.5	1.15	14.5	頁岩	先端部欠損
25	23	敲石	C	C3c₀	6.2	4.8	2.8	103.0	流紋岩	敲痕
26	24	剥片	C	C4c₁	3.1	1.5	1.3	5.0	メノウ	側縁に調整痕
27	25	剥片	C	C4c₁	3.5	2.1	1.3	6.0	メノウ	側縁に調整痕
28	19	剥片	C	C3c₀	5.3	2.1	1.8	11.0	メノウ	
29	28	剥片	C	C4c₁	10.3	5.5	2.4	110.0	頁岩	調整剥片
	94	剥片	C	C3c₀	3.1	1.7	0.6	2.4	メノウ	
	95	剥片	C	C3c₀	3.3	2.6	0.5	6.0	メノウ	
	96	剥片	C	C3c₀	3.2	2.1	0.3	3.0	メノウ	
	97	剥片	C	C3c₀	2.7	2.2	0.4	1.0	メノウ	
	98	剥片	C	C3c₀	1.8	2.2	0.3	1.9	メノウ	

図版番号	台帳番号	器種	ユニット	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	形態特徴
	110	剥片	C	C4c₁	5.0	2.8	0.6	11.5	メノウ	
	111	剥片	C	C4c₁	5.6	2.9	1.5	39.0	メノウ	
	112	石核	C	C4c₁	3.8	3.4	2.2	24.5	メノウ	
	114	剥片	C	C4c₁	3.1	2.3	0.6	4.5	メノウ	
	115	剥片	C	C4c₁	1.3	1.6	0.6	2.0	メノウ	
	126	剥片	C	C3c₉	5.6	3.2	0.9	11.5	頁岩	
	127	剥片	C	C3c₉	3.5	2.5	0.8	7.0	頁岩	
	128	剥片	C	C3c₀	4.1	2.0	0.5	6.9	頁岩	石刃断片
	129	敲石	C	C3c₉	7.7	6.6	4.1	275.0	メノウ	
	130	台石	C	C3c₉	14.3	11.4	2.7	79.0	花崗岩	
	131	剥片	C	C3d₀	9.6	3.4	1.0	43.3	頁岩	
	132	剥片	C	C4c₁	1.9	1.8	0.3	1.4	頁岩	
	143 a	剥片	C	C3c₀	2.3	2.7	0.8	6.5	メノウ	
第13図 30	35	石核	D	C3d₀	5.8	4.2	3.1	86.0	頁岩	
31	34	ナイフ形石器	D	C3d₉	5.9	1.4	0.6	5.0	頁岩	左側縁と基部に調整痕
32	31	剥片	D	C3d₈	3.7	5.2	1.5	21.0	メノウ	
33	32	剥片	D	C3d₈	4.8	3.9	1.6	20.5	メノウ	
34	36	石刃	D	C3e₉	8.0	2.5	0.7	16.0	頁岩	
35	33	敲石	D	C3d₈	13.4	5.3	4.4	431.0	流紋岩	敲痕
	32	剥片	D	C3d₉	3.7	5.2	1.5	21.0	メノウ	
	100	剥片	D	C3e₈	3.3	4.8	0.8	12.0	メノウ	
	101	剥片	D	C3e₈	4.0	1.2	0.8	5.5	メノウ	
	102	剥片	D	C3d₉	4.1	3.3	0.8	14.3	メノウ	No.103は102と接合
	104	剥片	D	C3d₉	3.3	2.5	1.1	9.3	メノウ	
	105	剥片	D	C3d₈	2.6	1.5	0.4	2.0	メノウ	
	106	剥片	D	C3d₀	2.4	1.7	0.3	1.6	メノウ	
	119	剥片	D	C4d₁	3.1	2.8	1.0	9.0	メノウ	

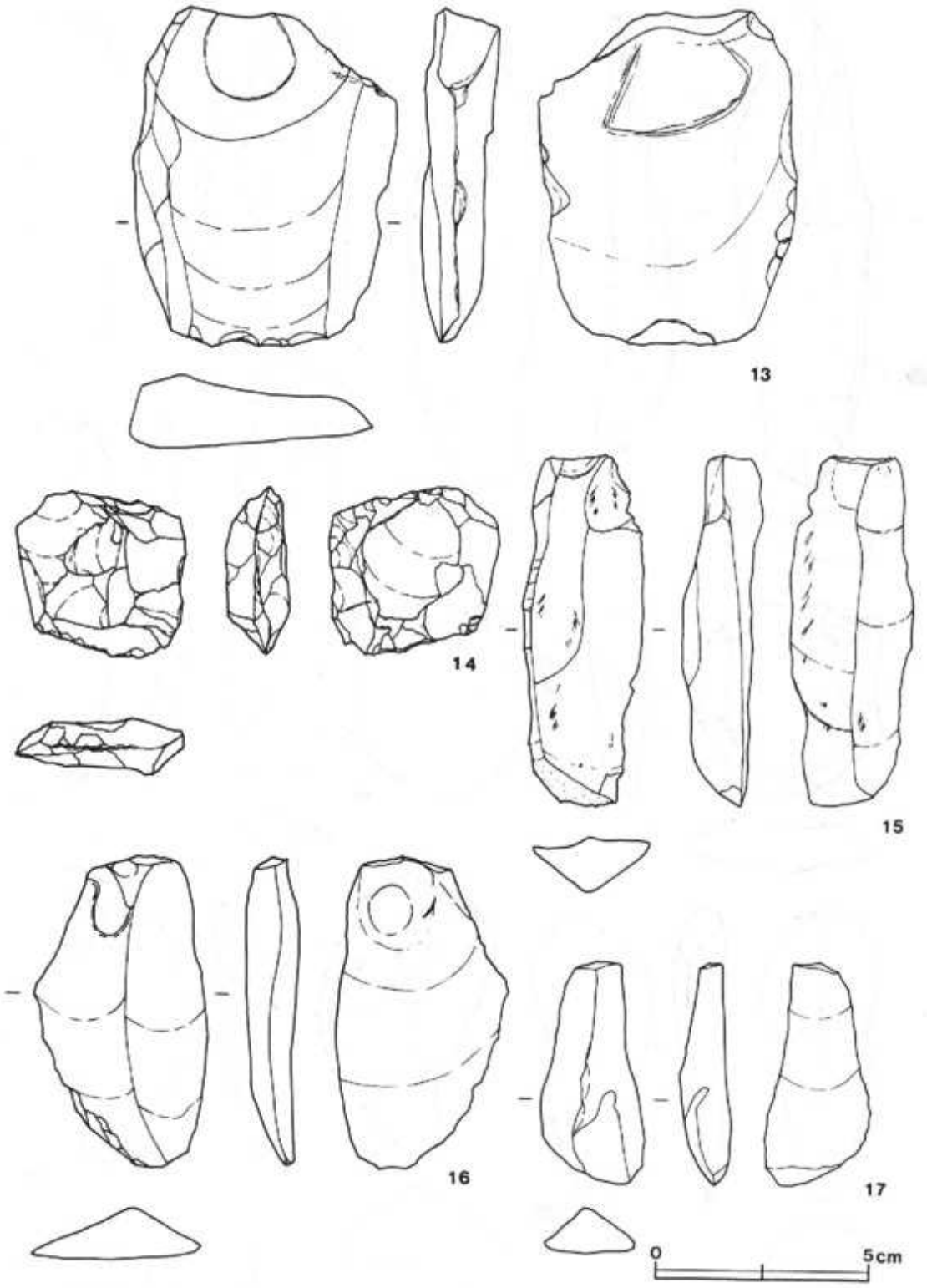
その他，Aユニットから39点，Bユニットから15点，Cユニットから10点，Dユニットから7点の細片が出土している。（長さが1.5cm以下の打点が明確でない小石片を細片とした。）



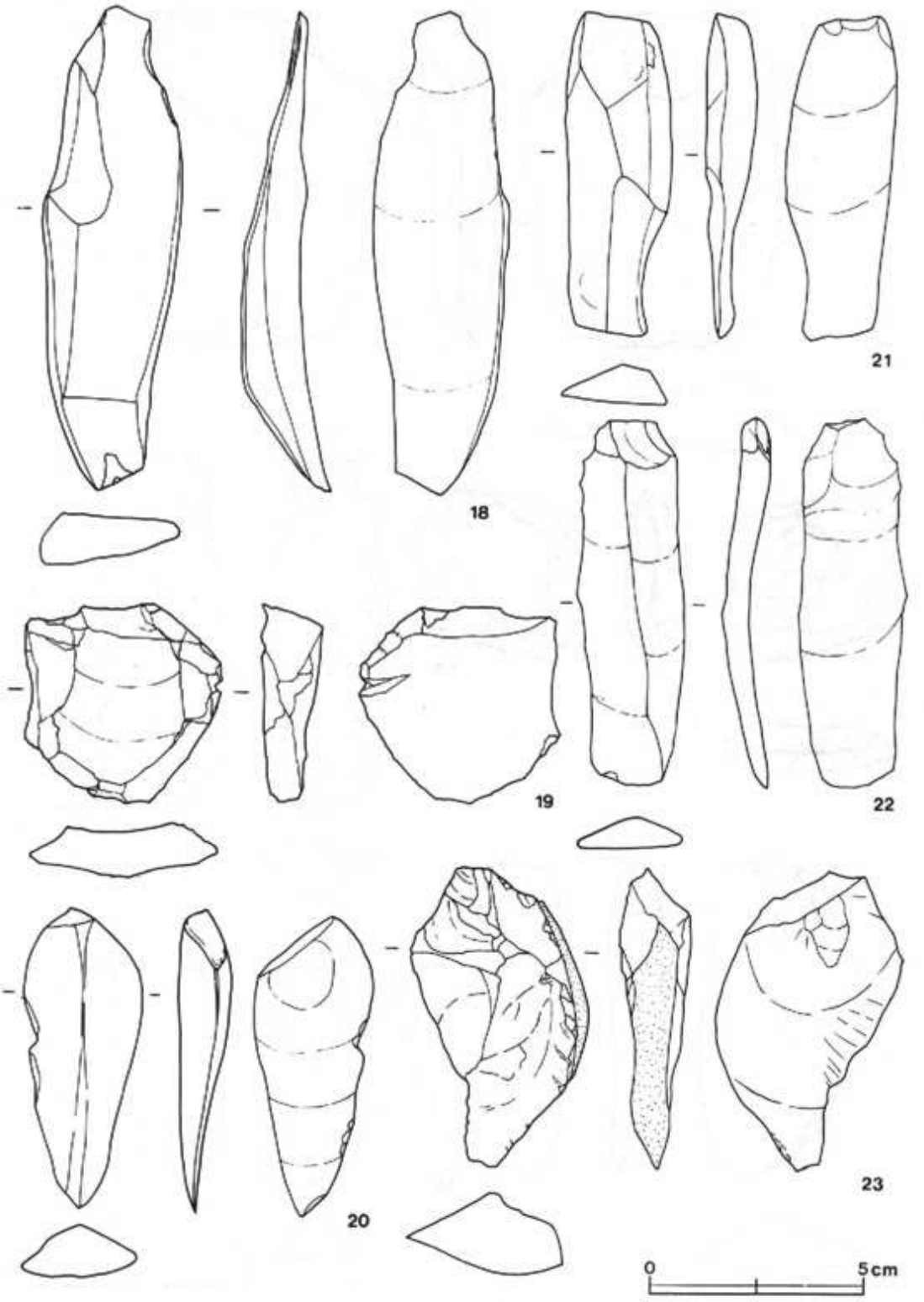
第8図　Aユニット出土遺物実測図（1）



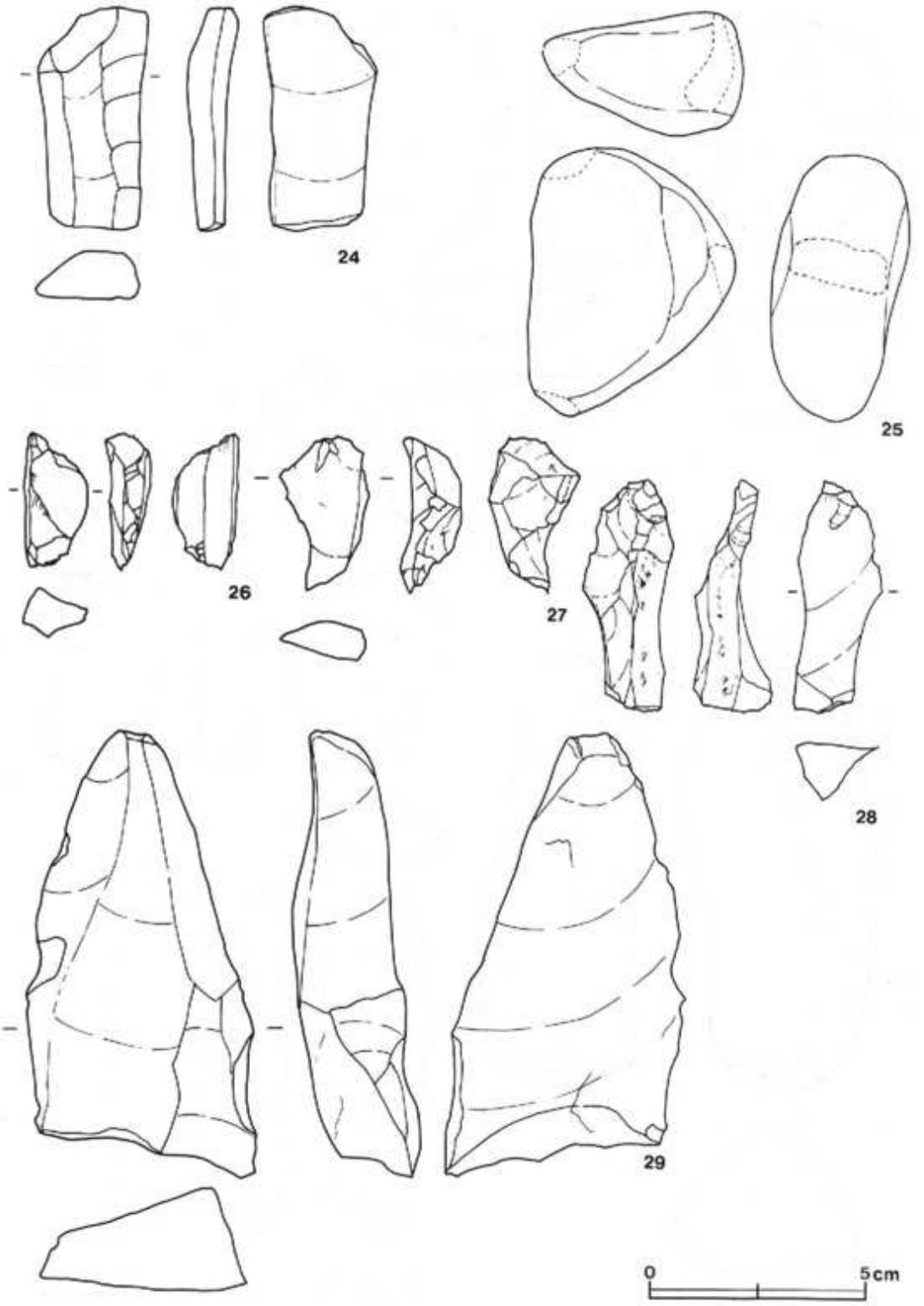
第9図　Aユニット出土遺物実測図（2）



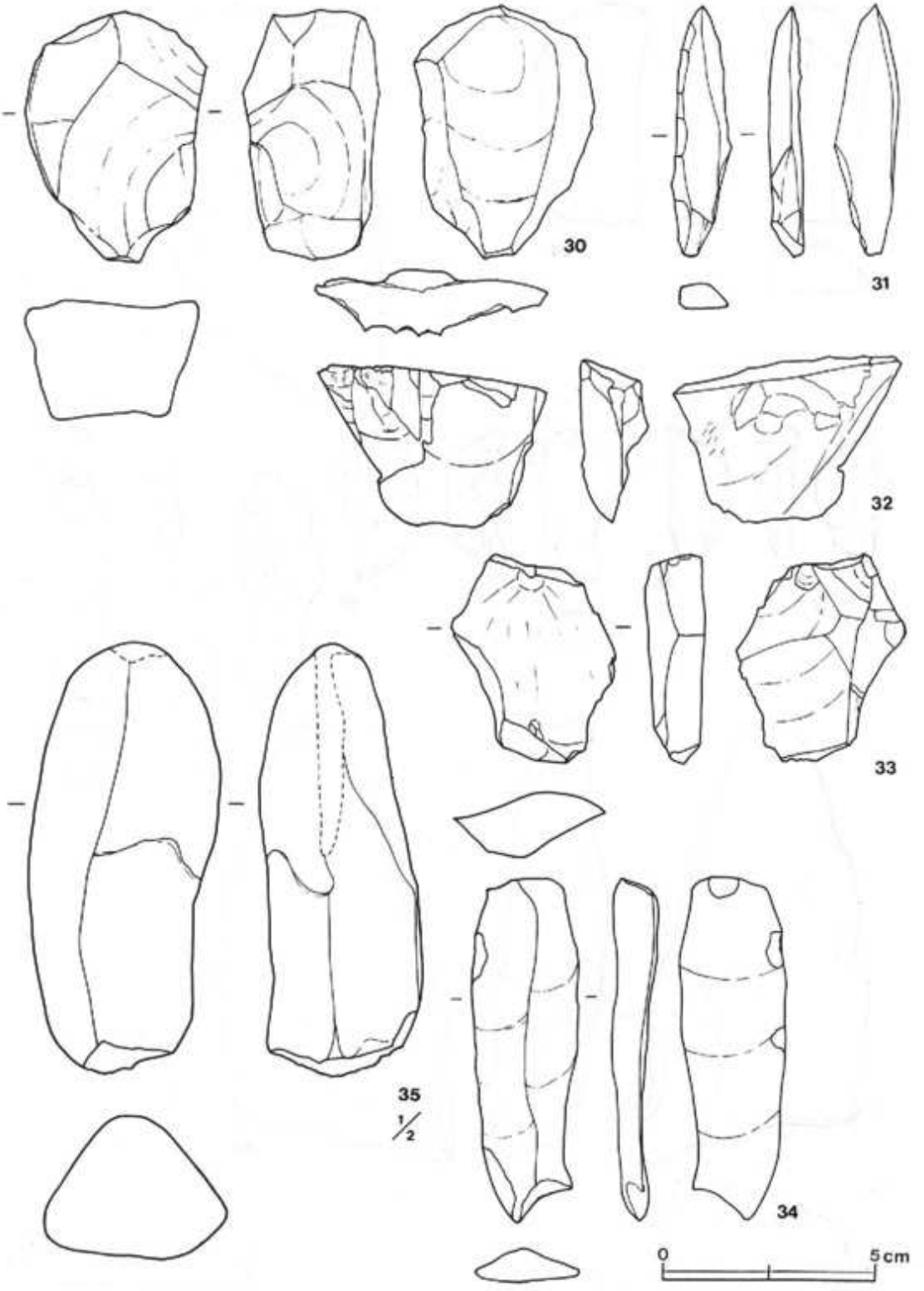
第10図　Bユニット出土遺物実測図



第11図　Cユニット出土遺物実測図 (1)



第12図　Cユニット出土遺物実測図 (2)



第13図　Dユニット出土遺物実測図

第3節　縄文時代

1　土坑

第4－B号土坑（集石土坑）（第14図）

本跡は，当遺跡東側の調査区B4h_2に確認され，4－A号土坑の東側に接して位置している。

平面形は，長径1.74m・短形0.95mの不定形を呈し，長径方向はN－65°－Eを指している。壁は，ロームブロック状で硬く，外傾して立ち上がっている。壁高は西側が15cmほどで浅く，北側は30cmほどで深い。底面は，凹凸がはげしく硬い。覆土は全体的に褐色土であるが，上層には炭化粒子を含む黒色土が堆積している。その上部には，数cmから子供の頭大の石45個を，円形状に並べて，さらにその上に積み重ねた状態で集石してあった。石は，火を受けて赤茶色であった。

遺物は，覆土から茅山式土器が1片だけ出土した。

第5号土坑（第14図）

本跡は，当遺跡南西側の調査区C3b_7を中心に確認された。

平面形は，長径2.62m・短径1.80mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－57°－Wを指している。壁は軟らかいロームであるが，明確であり，外傾してゆるやかに立ち上がっている。壁高は16～26cmで北壁から西壁にかけて高い。底面はロームで締まりがあり，ゆるやかに起伏している。北東側壁際に長径22cm，短径15cm，深さ23cmほどのピットが1か所検出された。覆土は全体的に軟らかく，上部に焼土粒子を多量に含む褐色土を中心に自然堆積の状態を呈している。

遺物は，底面からいくらか浮いた状態で，縄文時代早期の茅山式土器片を中心に，石器や石器片等が146点出土した。本跡は，当遺跡24基の土坑の中では特に土器片の出土の多い土坑である。

第9号土坑（集石土坑）（第15図）

本跡は，当遺跡中央部の調査区B3c_9を中心に確認され，当遺跡南側の平坦部から北側の底地部に向って傾斜している北斜面部に位置している。

平面形は，長径1.58m・短径1.27mの楕円形を呈し，長径方向はN－5°－Eを指している。壁は，硬いロームで，南壁が垂直，北壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，傾斜地のために，南壁が54cmと高く，北壁が25cmほどで低い。底面はロームブロック状で硬く，ゆるやかに起伏している。覆土は，焼土粒子を少量含む明褐色土が埋め戻された状態で堆積しており，確認面から10cm位掘り下げた位置に，卵大から人頭大の礫が398個入っていたが，底面近くには少なかった。石は，火を受けて赤茶色に焼けているものも数個あった。

遺物は，覆土から縄文時代早期の茅山式土器片が10片出土した。

第18号土坑（集石土坑）（第16図）

本跡は，当遺跡東側の調査区B4h_3に確認され，4－B号集石土坑の6mほど東側に位置している。

平面形は，長径1.05m・短径0.95mのほぼ円形を呈している。壁はロームで硬く締まっており，東壁は外傾，西壁はゆるやかに立ち上がっている。底面は皿状で硬く，ゆるやかに起伏している。覆土は，多量の炭化粒子と，少量の焼土粒子を含む暗褐色土を主に，自然堆積の状態で堆積している。覆土の上部には，卵大から子供の頭大の石が56個集石してあった。石の平坦面を上に向けて集石してあり，4－B号集石土坑と同じように石は，焼けて赤茶色になっていた。

遺物は，覆土から縄文時代早期の茅山式土器片が5片と磨石1点が出土した。

第19号土坑（第16図）

本跡は，当遺跡中央部の調査区B4f_1に確認され，平坦部に位置している。

平面形は，長径1.47m・短径1.23mのほぼ円形を呈している。壁は，ロームブロック状で硬く，外傾して立ち上がっている。壁高は，30～40cmであるが，中央部分は約56cmの深さである。底面は皿状で硬く締まっている。覆土は，炭化粒子を少量含む黒褐色土を中心に，暗褐色土，褐色土が人為的に埋め戻された状態で堆積している。

遺物は，覆土中から縄文時代早期の土器片が6片と，底面から尖底土器の尖底部分と，手づくねの土製品が出土した。尖底土器は，田戸下層式土器と確認できることから，本跡は，当遺跡の土坑の中では最古の土坑と考えられる。

第23号土坑（集石土坑）（第16図）

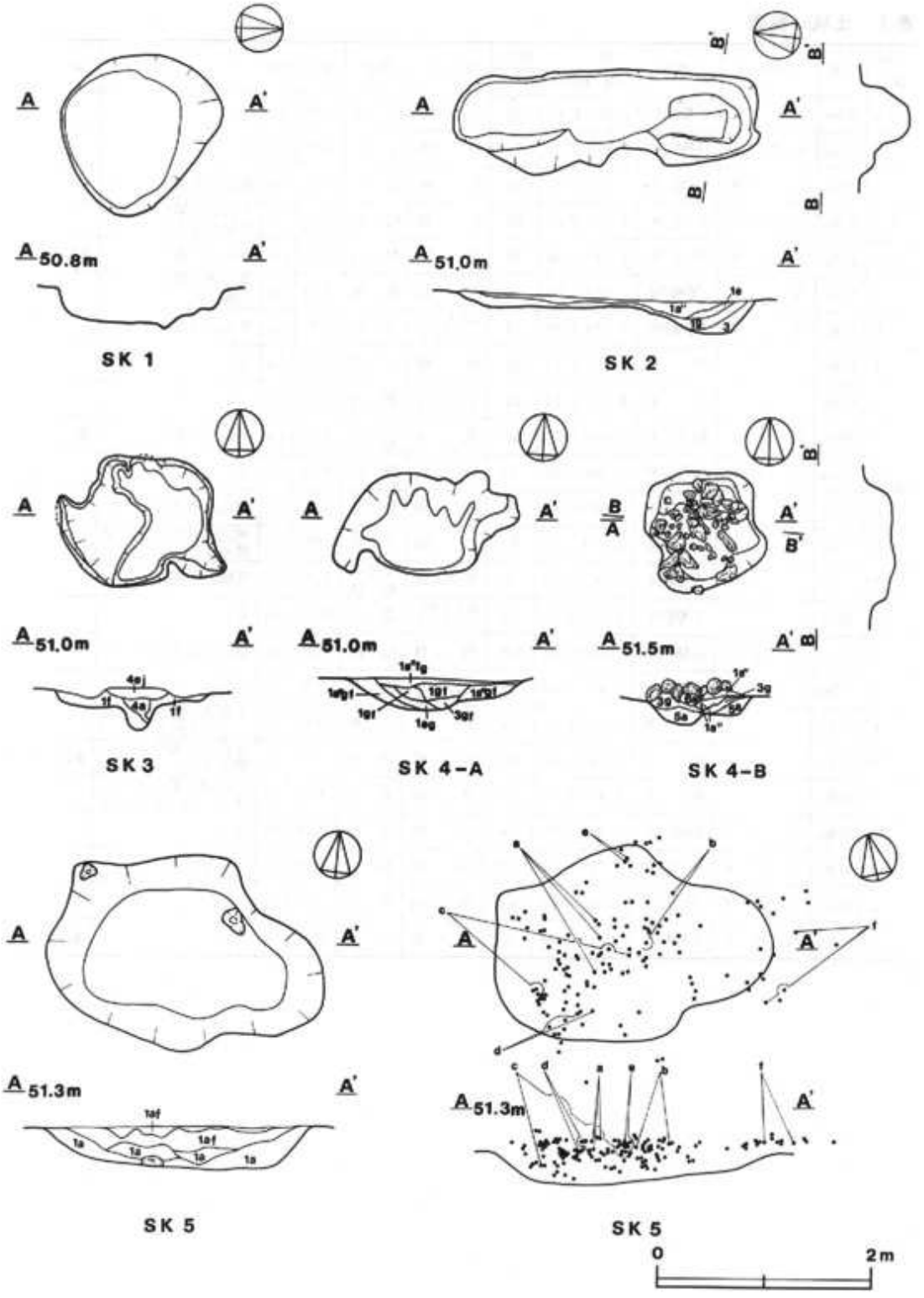
本跡は，当遺跡中央部の調査区B4c_1に確認され，当遺跡南部の平坦部から北側の低地部に向って傾斜している北斜面部に位置している。

平面形は，長径1.91m・短径1.18mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－48°－Eを指している。壁は，軟らかいロームで，南壁が外傾，北壁がゆるやかに立ち上がっている。壁高は，傾斜地のために，南壁が25cmで高く，北壁が10cmで低い。底面はロームブロック状で硬く，凹凸である。覆土は，炭化粒子を少量含む褐色土が自然堆積の状態で堆積している。覆土の上面に350個ほどの卵大の礫が集石してあり，覆土からも650個ほどの礫が出土した。

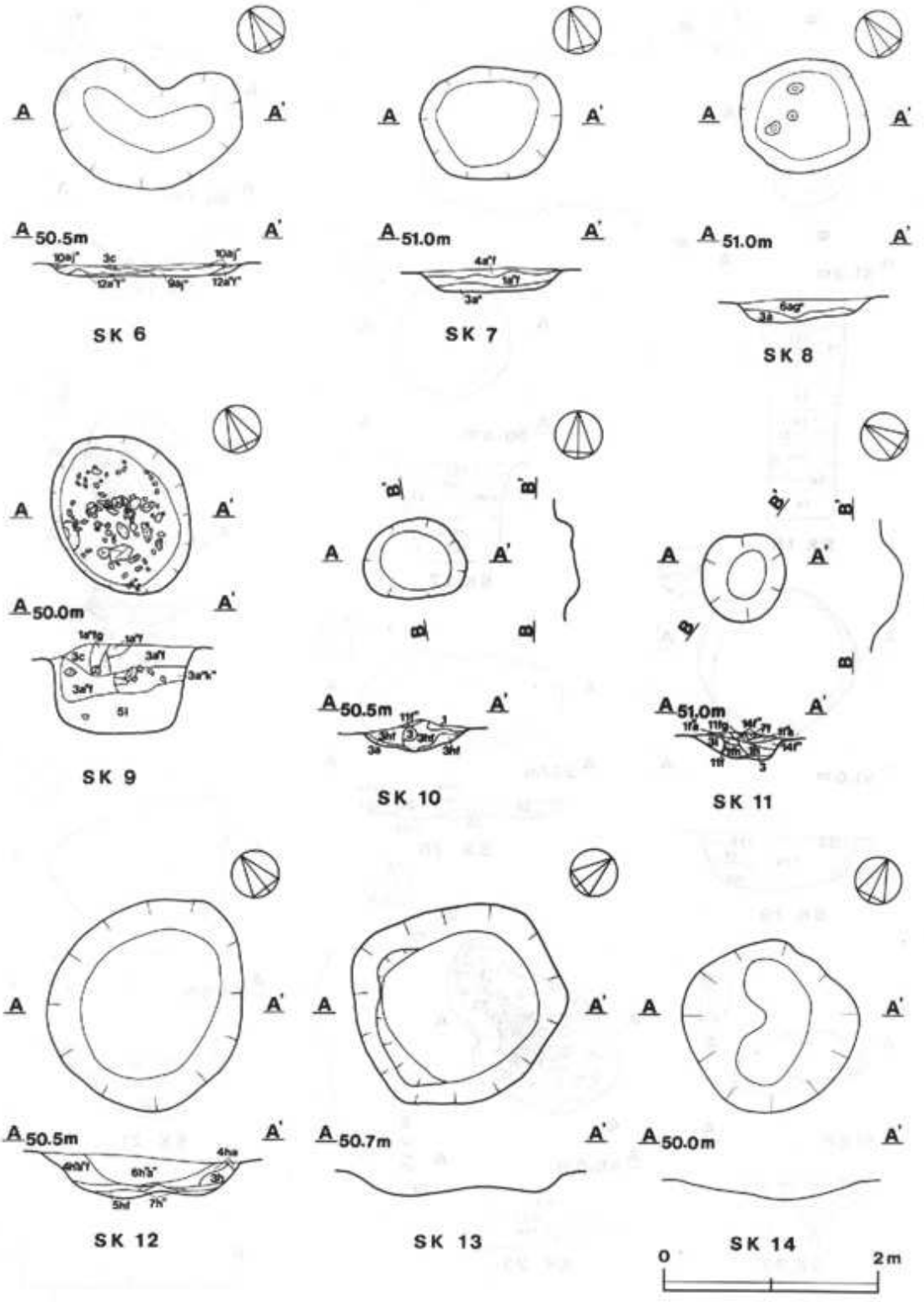
遺物は，礫以外のものは出土しなかった。

表 2　土坑一覧表

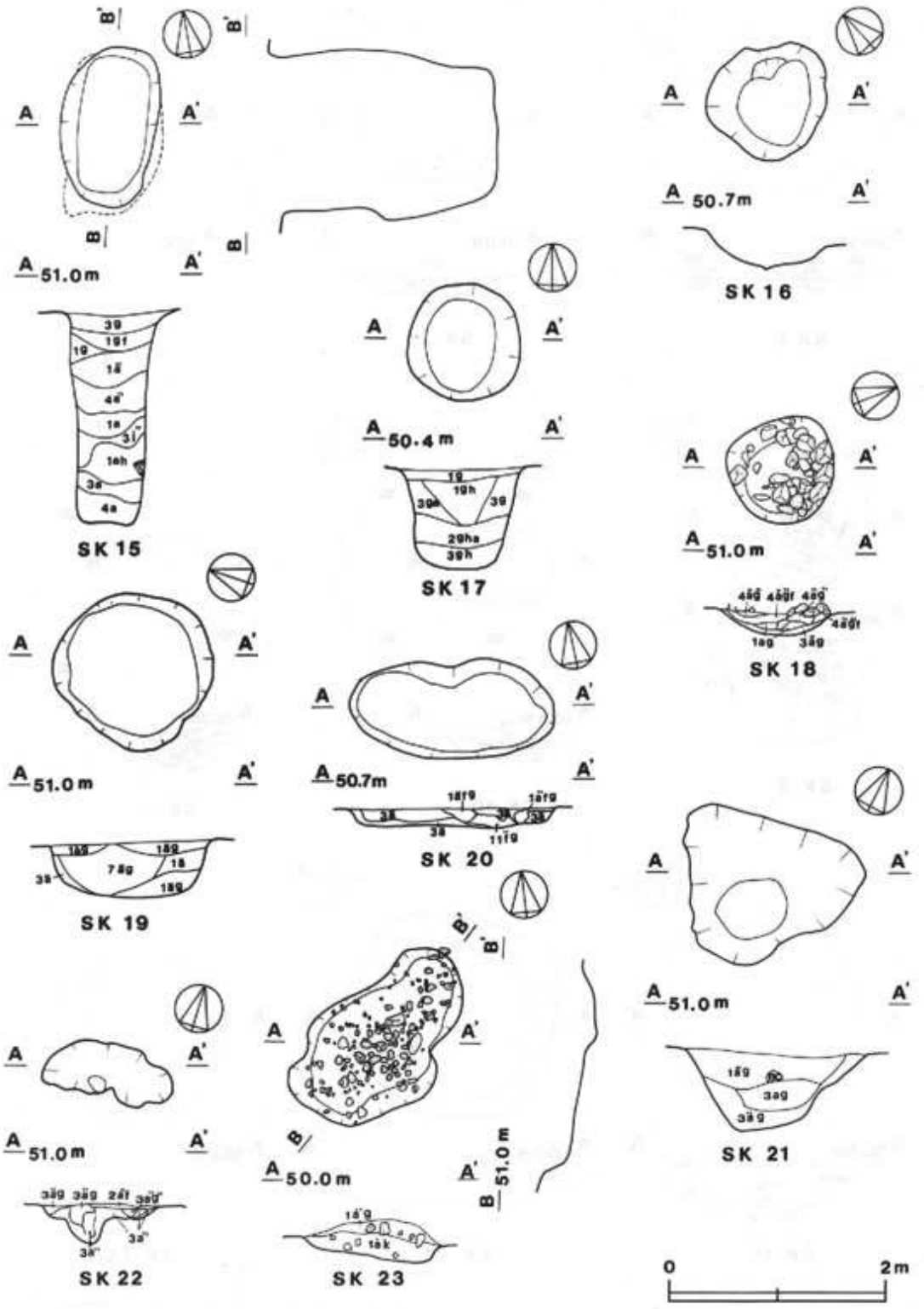
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(m)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK 1	B3d$_8$		不整円形	1.52×1.40	32	外傾	凹凸	自然	Aa	なし		14
2	B3h$_0$	N－17°－W	長楕円形	2.86×0.96	44	外傾	平坦	自然	Ba	なし		14
3	B4j$_2$	N－23°－W	不定形	1.72×1.21	28	外傾	凹凸	人為	Ca	堀之内式土器片4片		14
4-A	B4h$_2$	N－65°－E	不定形	1.74×0.95	28	外傾	凹凸	人為	Ca	茅山式土器片30片 打製石斧1点		14
4-B	B4h$_2$	N－65°－W	不定形	1.24×1.01	30	外傾	凹凸	人為	Da	茅山式土器片1片	集石土坑	14
5	C3b$_7$	N－57°－W	不整楕円形	2.62×1.80	30	外傾	皿状	人為	Ba	茅山式土器片146片 石鏃4点		14
6	B3d$_5$	N－62°－W	不整楕円形	1.76×1.06	14	ゆるやかに立ち上がる	平坦	自然	Ba	茅山式土器片1片		15
7	B3e$_5$		円形	1.30×1.14	20	外傾	平坦	自然	Aa	なし		15
8	B3d$_9$		円形	1.27×1.13	24	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	Aa	なし		15
9	B3c$_9$	N－5°－E	楕円形	1.58×1.27	50	垂直	ゆるい起伏	人為	Da	茅山式土器片10片	集石土坑	15
10	C3b$_9$	N－74°－W	楕円形	0.96×0.76	20	外傾	凹凸	人為	Ba	なし		15
11	B3i$_8$		円形	0.86×0.81	24	外傾	皿状	人為	Aa	堀之内式土器片5片		15
12	C4b$_1$		円形	1.97×1.70	36	外傾	平坦	自然	Aa	堀之内式土器片19片 磨石1点		15
13	C3a$_6$		不整円形	2.06×1.83	18	外傾	ゆるい起伏	自然	Aa	花積式土器片4片		15
14	B3j$_7$		不整円形	1.67×1.60	15	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	Aa	なし		15
15	B3i$_8$	N－12°－E	長楕円形	1.46×0.89	200	袋状	凹凸	人為	Bb	堀之内式土器片19片		16
16	C3a$_6$		不整円形	1.16×1.05	25	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	Aa	なし		16
17	C3c$_8$		円形	1.13×1.10	94	垂直	平坦	自然	Ab	土器片2片（極小のため形式不明）		16
18	B4h$_3$		円形	1.05×0.95	20	外傾	皿状	自然	Da	茅山式土器片5片 磨石1点	集石土坑	16
19	B4f$_1$		円形	1.47×1.23	56	外傾	皿状	人為	Ab	田戸式土器片6片 手づくね土製品1点		16
20	B4g$_2$	N－75°－W	長楕円形	1.90×0.83	24	外傾	平坦	人為	Ba	なし		16
21	B3f$_9$	N－35°－E	不定形	1.71×1.17	74	外傾	皿状	人為	Cb	茅山式土器片13片		16
22	B3e$_9$	N－80°－E	不定形	1.22×0.65	44	外傾	凹凸	人為	Ca	なし		16
23	B4c$_1$	N－48°－E	不整楕円形	1.91×1.18	20	外傾	凹凸	自然	Da	なし	集石土坑	16


A
A'
A 50.8m
SK 1
A 51.0m
SK 2
A 51.0m
SK 3
A 51.0m
SK 4-A
B
A
B'
A 51.5m
SK 4-B
A 51.3m
SK 5
A 51.3m
SK 5
0
2m

第14図　土坑実測図 (1)


A
A'
A 50.5m A'
SK 6
A 51.0m A'
SK 7
A 51.0m A'
SK 8
A
A'
A 50.0m A'
SK 9
B
B'
A
A'
A 50.5m A'
SK 10
B
B'
A
A'
A 51.0m A'
SK 11
A
A'
A 50.5m A'
SK 12
A
A'
A 50.7m A'
SK 13
A
A'
A 50.0m A'
SK 14
0
2m

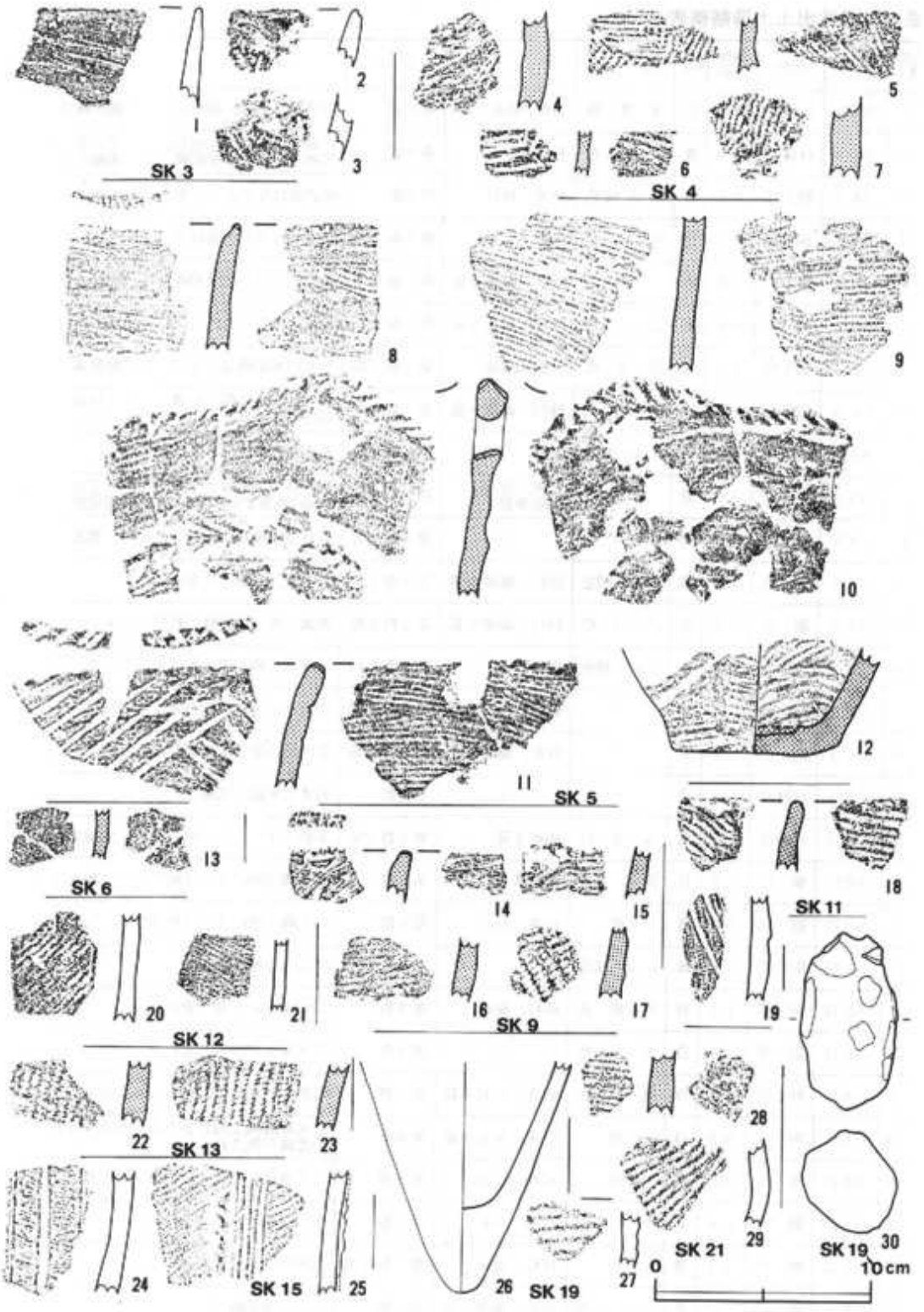
第15図　土坑実測図 (2)


A
A'
B
B'
A 51.0m
A 50.7m
SK 16
A 50.4m
SK 15
SK 17
A 51.0m
SK 18
A 51.0m
A 50.7m
SK 20
SK 19
A 51.0m
A 51.0m
SK 21
A 50.0m
B 51.0m
SK 22
SK 23
0
2m

第16図　土坑実測図 (3)

表3　土坑出土土器観察表

図版番号	遺構	部位	器厚(cm)	焼成	色調	胎土	分類	備考
1	SK3	口縁部	0.7	良	浅黄橙	細かい砂粒	第6群	口縁部は平坦，器面に短い沈線が横位に施文。
2	SK3	口縁部	0.8	普	明赤褐色	石英，長石	第6群	口唇部は両面より削られ尖っている。表面一部剥れ，L.Rの単節縄文地に沈線が垂下。
3	SK3	胴下部	0.8	普	明赤褐色	石英，長石	第6群	器表面はなめらかに整形され沈線が施される。
4	SK4	胴部	1.3	劣	暗褐色	繊維	第3群4類	器内外に斜位の条痕文が施される。
5	SK4	胴上部	0.8	普	橙	砂粒，繊維少量	第3群5類	条痕上にRLの単節縄文，内面は条痕のみ。
6	SK4	胴部	0.5	劣	にぶい橙	砂粒，繊維少量	第3群4類	器表に沈線，器内に条痕が施される。
7	SK4	胴下部	1.2	劣	浅黄橙	砂粒，繊維	第3群5類	LRの単節縄文，器内外の調整粗雑。
8	SK5	口縁部	1.0	良	明褐色	砂粒，繊維少量	第3群4類	口縁の内側は削られ薄くなる。口唇にきざみ器内外に条痕文。
9	SK5	胴部	0.9	良	にぶい褐色	繊維	第3群4類	器内外に条痕文。
10	SK5	口縁部	1.0	普	〃	石英，長石 繊維多量	第3群4類	器内外の条痕はナデ整形によって消される。口縁部両面より羽状に刺突，円窓周囲にきざみ。
11	SK5	口縁部	0.9	普	にぶい橙	〃	第3群4類	口唇部は棒状工具により押圧，器表に沈線文。
12	SK5	底部	1.0	普	にぶい褐色	砂粒，繊維多量	第3群4類	器内外とも横位の条痕文。
13	SK6	胴部	0.6	劣	にぶい橙	砂粒，繊維少量	第3群4類	磨滅が激しく文様の観察できず。
14	SK9	口縁部	0.8	良	にぶい褐色	繊維	第3群4類	口唇部に細く深いきざみを有する。
15	SK9	胴部	0.9	劣	〃	繊維，長石，石英	第3群4類	器内外に浅い条痕が施される。
16	SK9	胴部	0.8	良	〃	砂粒，繊維	第3群4類	器内外の条痕文は調整により消される。
17	SK9	口縁部	1.0	普	〃	〃	第4群	器表に単節羽状縄文。
18	SK11	口縁部	0.7	劣	浅黄橙	繊維多量	第3群5類	条痕文上にLRの単節縄文，内面は条痕文。
19	SK11	胴部	0.8	良	黄橙	砂粒多量	第6群	RL縄文地に平行沈線を施す。胎土は黒色。
20	SK12	胴部	0.8	普	橙	石英，長石	第6群	RL縄文地に浅い沈線を施す。
21	SK12	胴部	0.6	普	にぶい褐色	砂粒	第7群	撚糸文が施される。
22	SK13	胴部	1.1	良	明褐色	砂粒，繊維	第4群	羽状縄文になると思われる。
23	SK13	胴部	0.8	良	黄橙	〃	第4群	羽状縄文になると思われる。
24	SK15	胴部	1.0	良	暗褐色	石英，長石多量	第6群	反撚りの縄文地に縦位の平行沈線を施す。
25	SK15	胴部	0.9	良	橙	石英，長石多量	第6群	LR単節縄文地にきざみを有する隆線と三本の沈線が施される。
26	SK19	底部	0.7	良	橙	砂粒，長石	第2群	二次熱成を受ける。器面に煤が付着する。
27	SK19	胴部	0.8	劣	明橙	石英，長石	第2群	太い沈線が横位に施される。
28	SK21	胴部	1.1	普	橙	砂粒，繊維	第3群4類	器内外に条痕文。
29	SK21	胴部	0.8	普	にぶい橙	砂粒，繊維少量	第4群	LRの単節縄文。



第17図　土坑出土遺物実測図・拓影図

2　遺物

当遺跡は，検出遺構数が少ないこともあり，遺構内から出土した遺物は，遺構外から出土した遺物に比べきわめて少量であった。したがって，本報告書では，遺構出土遺物と，遺構外出土遺物を一括して解説した。

(1)　土器

出土総数2,298点であるが，すべて小破片で，一個体に復元できるものは１点もなかった。ここでは，時期を中心として８群に分類して解説する。

第１群　縄文時代早期前葉の土器

第２群　縄文時代早期中葉の土器

第３群　縄文時代早期後葉から末葉にかけての土器

第４群　縄文時代前期初頭の土器

第５群　縄文時代中期後葉の土器

第６群　縄文時代後期前葉の土器

第７群　縄文時代晩期後葉の土器

第８群　弥生時代後期の土器

第１群（第18図１）

早期前葉の無文土器を本群とした。押形文土器に後続するもので，当遺跡では，最も古手の土器であるが，１点だけしか出土しなかった。横位の擦痕を持つ口縁部資料である。色調は，浅黄橙色で，胎土には，粒のそろった細かい長石，石英粒子を含み，焼成は良好である。

第２群（第17図26，27　第17図２，３）

早期中葉の沈線文系の土器を本群とした。第17図26，27は，19号土坑の底部から出土したもので，田戸下層式に比定されるものである。第18図２，３は，集合沈線や，縦位の簾状刺突が数段にわたって施文されているもので，田戸上層式に比定される。胎土には，細かい長石，石英粒を含み，色調は，鈍い橙，又は黄橙色をしており，焼成は良好である。

第３群

早期後葉から末葉にかけての，胎土に繊維を含む条痕文系の土器を本群とした。

１類（第18図４）

微隆起線による文様を有するもので，野島式土器に比定されるものである。当遺跡からの出土量は少なく，他に10点ほど出土しているだけであった。薄手の土器で，胎土には繊維のほか細かい長石，石英粒子を含んでいる。色調は，鈍い黄橙色を呈し，焼成は普通である。

2類（第18図5，6，7，8，9）

交点に円形刺突文を施した沈線区画が連続し，その区画内を太めの沈線や竹管による刺突文で埋める文様帯を有するもので，鵜ヶ島台式土器に比定されるものを本類とした。口唇部には，丸棒状工具による押圧や，口唇外縁に浅いきざみを施すものが多い。胎土には繊維のほか少量の砂粒を含んでいる。色調は，赤褐色又は橙色を呈し，焼成は良好である。

3類（第18図10）

2類の文様構成を引き継ぐが，沈線による区画の意識が薄れ，交点の円形刺突文を失っているものを本類とした。出土量は少なかったが，これらは茅山下層式に比定されるものと思われる。胎土には，繊維を含み，色調は明褐色で，焼成は良好である。

4類（第17図4，6，8，9，10，11，12，13，14，15，16，28　第18図11，12，13，14，15，16，17，18，19
第19図20，21，22，23）

条痕を文様の主体とするもので，茅山上層式土器及びそれ以降の土器を本類とした。口唇部には，縦又は斜めのきざみを持つものが多い。口縁部以下は，横又は斜めに条痕が施されるのみである。まれに，口唇部に羽状に刺突がなされたり，口縁部に，羽状刺突帯や，刺突を施した隆帯でかざられたものがある。第16図10は，波頂部直下には，まわりにきざみを有する円窓が穿たれているものである。本類の胎土には繊維のほか長石や石英粒を含み，色調は，明褐色又は，鈍い褐色で，焼成は劣っている。

5類（第17図5，7，18　第19図24，25，26，27，28，29，30，31，33）

条痕文上に撚糸文を施し，さらに沈線によって文様付けがなされているものを本類とした。大畑G式土器に比定されるものと思われる。口唇部には，斜めのきざみが施されている。胎土には，繊維を含み，色調は鈍い橙又は黄橙色を呈している。焼成は劣るものが多い。第19図26，27は，条痕の地文上に縄文が施されただけのもので，器内面の一部にも縄文が施される類例の少ないものである。大畑G式土器よりは後出のものと思われるが，出土数が2点と少ないため本類であつかった。

第4群（第17図17，22，23，29　第19図32，34，35，36，37，38）

前期初頭の縄文原体側面圧痕による文様帯と，羽状縄文を施した胴部を持つ土器を本群とした。

花積下層式土器に比定されるものと思われる。第19図37，38は，口縁部に文様帯を持たず，器面全体に羽状縄文を施しただけのものであるが，器内面がナデ整形される点や，胎土に繊維のほ

か，やや大きめの長石，石英粒を含む点などは，文様帯を持つものと同様である。色調は，鈍い橙色を呈し，焼成は普通である。

第5群（第20図39，40）

中期後葉の土器で，口縁部に隆起線による渦巻文を持つものを本群とした。加曽利E式土器に比定されるものと思われる。本跡からは，この時期の土器は，11点出土しただけであった。胎土には大粒の長石，石英粒が含まれる。色調は褐色で，焼成は劣っている。

第6群（第17図19，20，24，25　第20図41，42，43，44，45，46，47）

後期前葉の土器で，縄文地に垂下する数条の平行沈線や，きざみを持つ紐線文が施されるものを本群とした。堀之内式土器に比定されるものと思われる。この時期のものは出土土器の約10%をしめる。胎土は，長石や石英粒を多量に含む。色調は橙又は暗褐色を呈し，焼成は良好で堅緻である。

第7群（第17図21　第19図）

晩期後半の土器を本群とした。浮線網状文や口縁部に沈線を羽状に施した文様帯を有する精製土器と，撚糸文や網状文，あるいは櫛歯文だけを器全体に施した粗製土器とがある。当遺跡からは，北西部を中心に出土量は比較的多かった。胎土には少量の砂粒を含み，色調は黒褐色，橙，灰白色と様々であり，焼成は普通かやや劣るものが多かった。

第8群（第20図48，49）

弥生時代中・後期の土器を本群とした。撚糸文を施した十王台式土器に比定される土器が最も多く，一条附加縄文や平行沈線による弧文が波状に連続して施される例は，きわめて少なかった。胎土には長石，石英粒を含んでいる。色調は撚糸文を有するものは浅黄橙，附加縄文を有するものは褐色，平行沈線による弧文を有するものは鈍い黄褐色を呈し，焼成は，すべて良好であった。

(2)　土製品（第17図30）

魂状土製品1点が出土した。形状は，ほぼ紡錘形で断面は円形を呈している。法量は，長径8.2cm，短径4.5cm，重さ145.0gで，表面には指圧痕を残す粗末な作りである。19号土坑の底部より，尖底土器の底部と伴出したもので，尖底土器の底部から推定して，縄文時代早期中葉の遺物と思われる。

(3) 石器

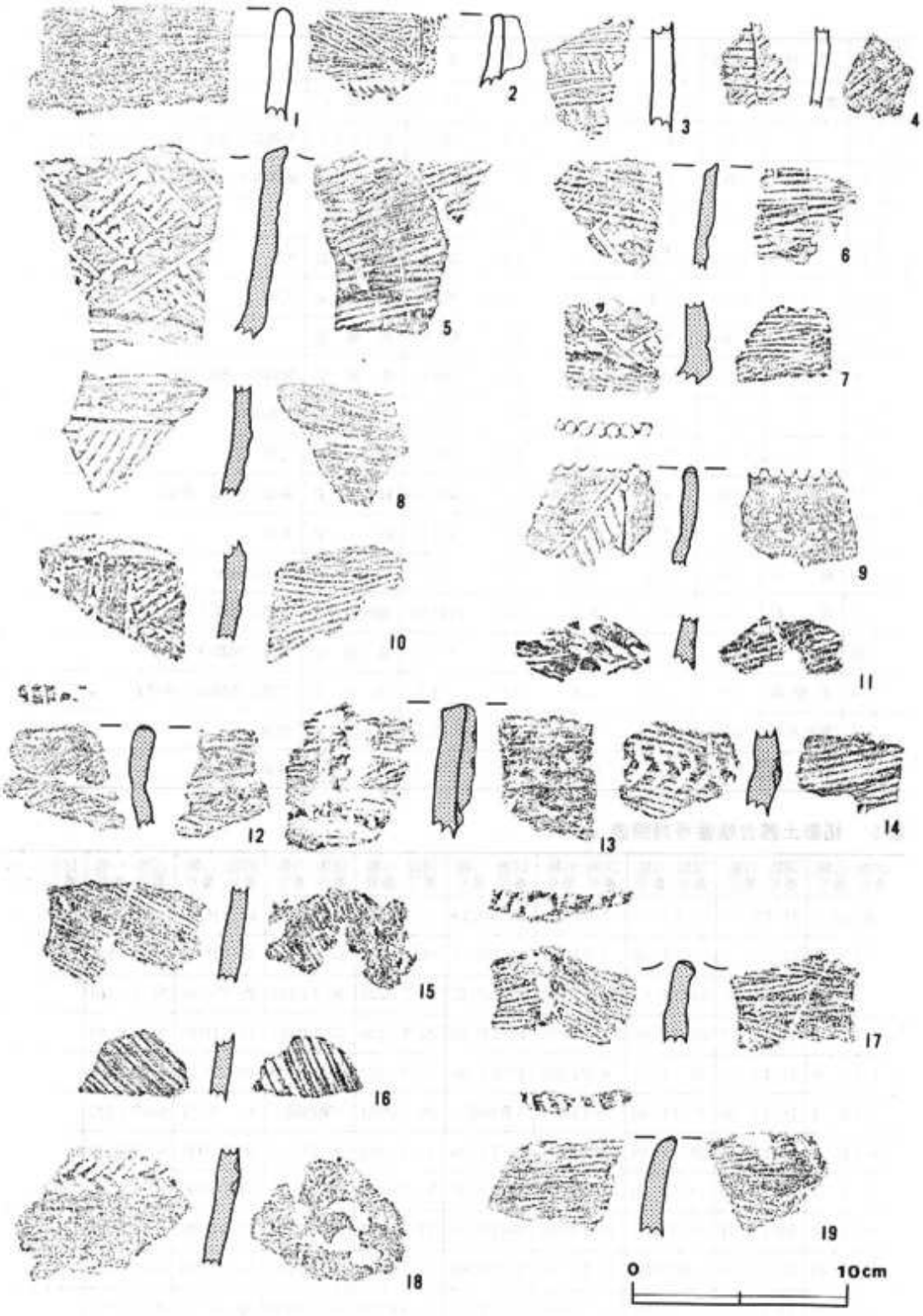
表 4　縄文時代石器観察表　(1)

図版番号	台帳番号	器種	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	形態特徴
第21図 1	48	石鏃	B3b$_{10}$	2.4	2.0	0.4	1.0	チャート	無茎凹基，尖頭部欠損
2	71	〃	SK−5	2.5	2.2	0.5	1.8	チャート	無茎凹基，頭部欠損
3	51	〃	B3c$_9$	3.1	(1.6)	0.6	(1.6)	頁岩	有茎凹基，片脚及び尖頭部欠損
4	70	〃	SK−5	(1.9)	(1.4)	0.5	(0.9)	流紋岩	無茎凹基，尖頭部欠損
5	62	〃	B4d$_4$	(2.2)	(1.3)	0.5	(0.9)	チャート	無茎凹基，片脚部欠損
	44	〃	B3b$_2$	(1.5)	(1.1)	(0.2)	(0.4)	チャート	先端部のみ残存
	56	〃	B3j$_8$	(1.5)	1.7	0.5	(1.0)	チャート	先端部欠損
	67	〃	SK−5	(1.7)	2.3	0.5	(1.6)	チャート	無茎凹基，頭部欠損
	68	〃	SK−5	(2.2)	(1.4)	(0.5)	(0.9)	頁岩	基部欠損
第21図 6	78	石錐	表採	(2.1)	1.2	0.5	(1.0)	チャート	先端部磨滅
7	49	掻器	B3b$_5$	(2.7)	3.2	0.9	(6.5)	チャート	欠損
8	43	〃	A4c$_3$	4.4	3.8	1.7	23.0	チャート	片面に自然面を残す 両側縁に刃つぶし加工
第22図 9	45	削器	B3h$_2$	7.6	3.6	2.0	40.0	砂岩	
10	77	打製石斧	C3c$_1$	(5.2)	6.0	2.3	(70.0)	砂岩	片面に自然面を残す
11	55	〃	B3j$_6$	(8.7)	5.7	2.4	(95.0)	砂岩	欠損
12	69	〃	C3b$_7$	14.4	6.8	5.2	450.0	砂岩	
13	38	〃	SK−4	11.1	6.9	2.7	239.0	頁岩	
14	53	〃	B3i$_{10}$	8.4	(10.2)	4.7	(375.0)	砂岩	刃部欠損
	154	〃	C4a$_2$	8.4	6.0	2.7	156.0	緑泥片岩	片面に自然面を残す。欠損
	155	〃	C4a$_2$	(6.1)	6.7	3.3	(155.0)	砂岩	両面加工，一部自然面を残す。欠損
15	152	磨製石斧	C3d$_0$	8.1	7.25	4.4	262.0	頁岩	刃部潰れる
16	59	磨製石斧	B4d$_1$	(7.5)	5.6	2.0	(100.0)	緑泥片岩	剥離痕を残す。基部より上を欠損
17	60	〃	B4d$_2$	(4.7)	4.3	1.9	(50.0)	砂岩	基部欠損
18	76	〃	C3c$_6$	(6.3)	6.5	2.5	(160.0)	閃緑岩	基部，基端部欠損，円刃で蛤刃
第23図 19	72	〃	C3c$_0$	18.9	8.1	3.9	765.0	閃緑岩	着装痕，直刃の蛤刃，刃右縁磨滅
20	156	〃	C4a$_3$	(2.95)	2.5	1.5	(13.0)	砂岩	定角磨製石斧，欠損
21	61	〃	B4d$_3$	(4.9)	3.2	2.4	(60.0)	閃緑岩	刃部，基端部欠損
	153	〃	C3e$_9$	(6.7)	6.1	2.4	(150.5)	閃緑岩	全体を研磨，欠損
22	47	磨石	B3b$_6$	9.2	8.1	4.6	435.0	砂岩	
23	57	〃	B3j$_7$	15.9	11.3	6.4	140.0	花崗岩	両面に凹部を有する。

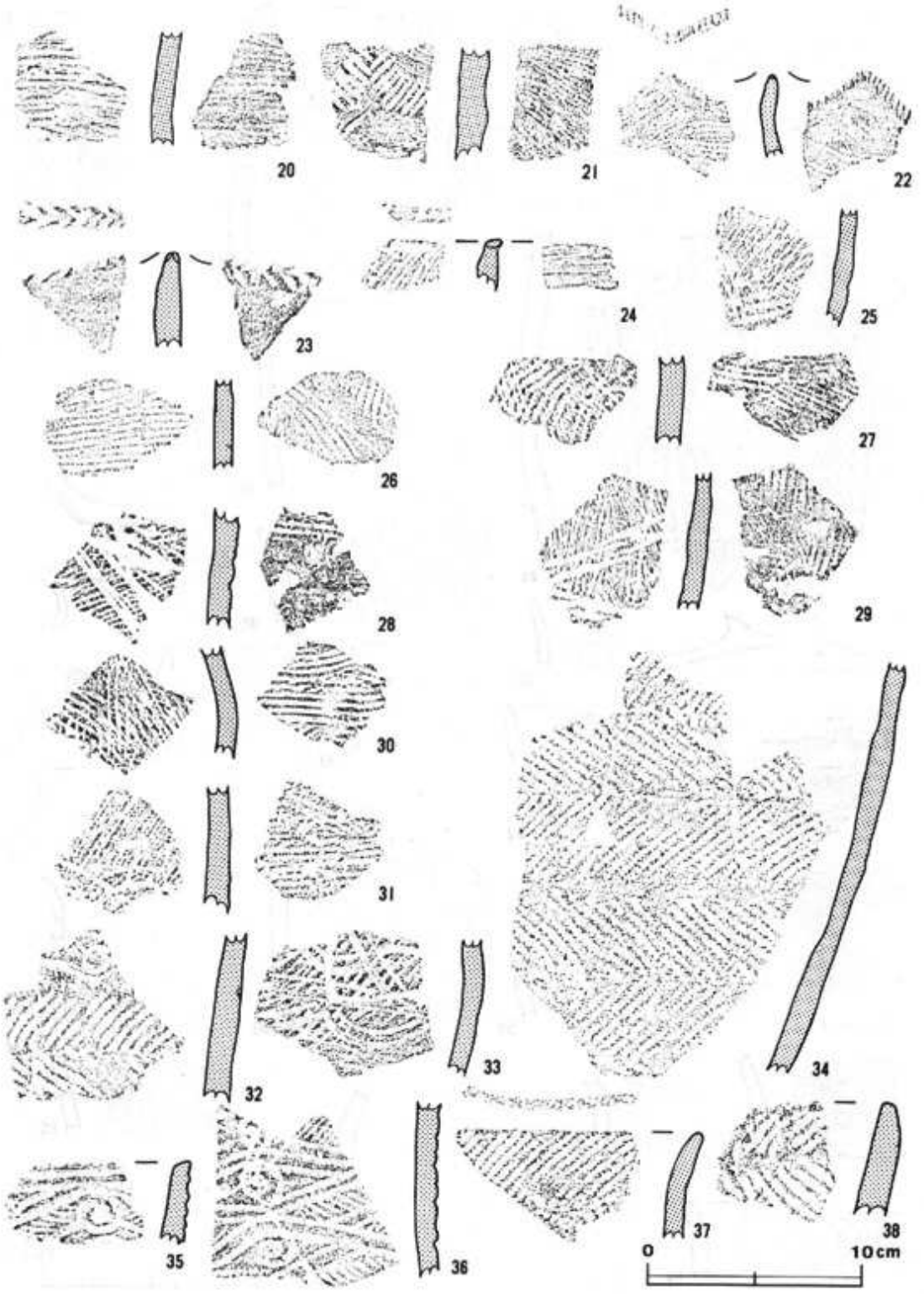
図版番号	台帳番号	器種	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	形態特徴
第23図 24	74	磨石	B3d7	8.6	7.0	4.5	360.0	花崗岩	
25	64	〃	B4h2	9.1	6.7	4.1	330.0	アプライト	先端部に敲痕を持つ，焼けている
26	41	〃	A2h4	8.4	5.3	5.2	526.0	花崗岩	側縁部の一部に敲痕を有する
	39	〃	SK－12	8.2	8.1	4.8	398.0	花崗岩	
	40	〃	SK－18	(5.8)	(9.3)	3.3	(239.0)	斑糲岩	欠損
	50	〃	B3c8	(5.1)	10.2	5.3	(369.0)	花崗岩	欠損
	52	〃	B3g9	9.5	8.2	4.7	470.0	花崗岩	
	58	〃	B4b1	(10.5)	9.3	4.6	(650.0)	花崗岩	側縁の一部に敲痕，欠損
	63	〃	B4d4	(6.7)	8.0	4.1	(260.5)	アプライト	欠損
	66	〃	C3b7	(7.6)	6.4	4.5	(336.0)	砂岩	欠損
	73	〃	B4d2	(8.5)	7.4	4.7	(400.5)	砂岩	両面に凹部，火受け
	75	〃	B3c7	(7.5)	(10.65)	5.7	(472.0)	砂岩	欠損
27	151	敲石	B4i2	7.6	2.95	2.0	62.0	雲母片岩	上下に敲痕
	42	凹石	A3j8	(11.6)	6.2	3.8	(446.0)	凝灰質砂岩	欠損，凹数1
	46	〃	B3b4	(13.0)	(16.6)	10.3	(1,750.0)	花崗岩	欠損，凹数3
	54	尖頭器	B3i0	(2.3)	2.8	0.6	(4.5)	流紋岩	欠損，先頭部のみ残存
	65	剥片石器	B3b2	(2.7)	(1.0)	0.6	(1.5)	メノウ	欠損
	79	石皿	B4f2	36.8	32.75	24.0	25,500.0	花崗岩	裏面は凹石

表5　拓影土器台帳番号対照表

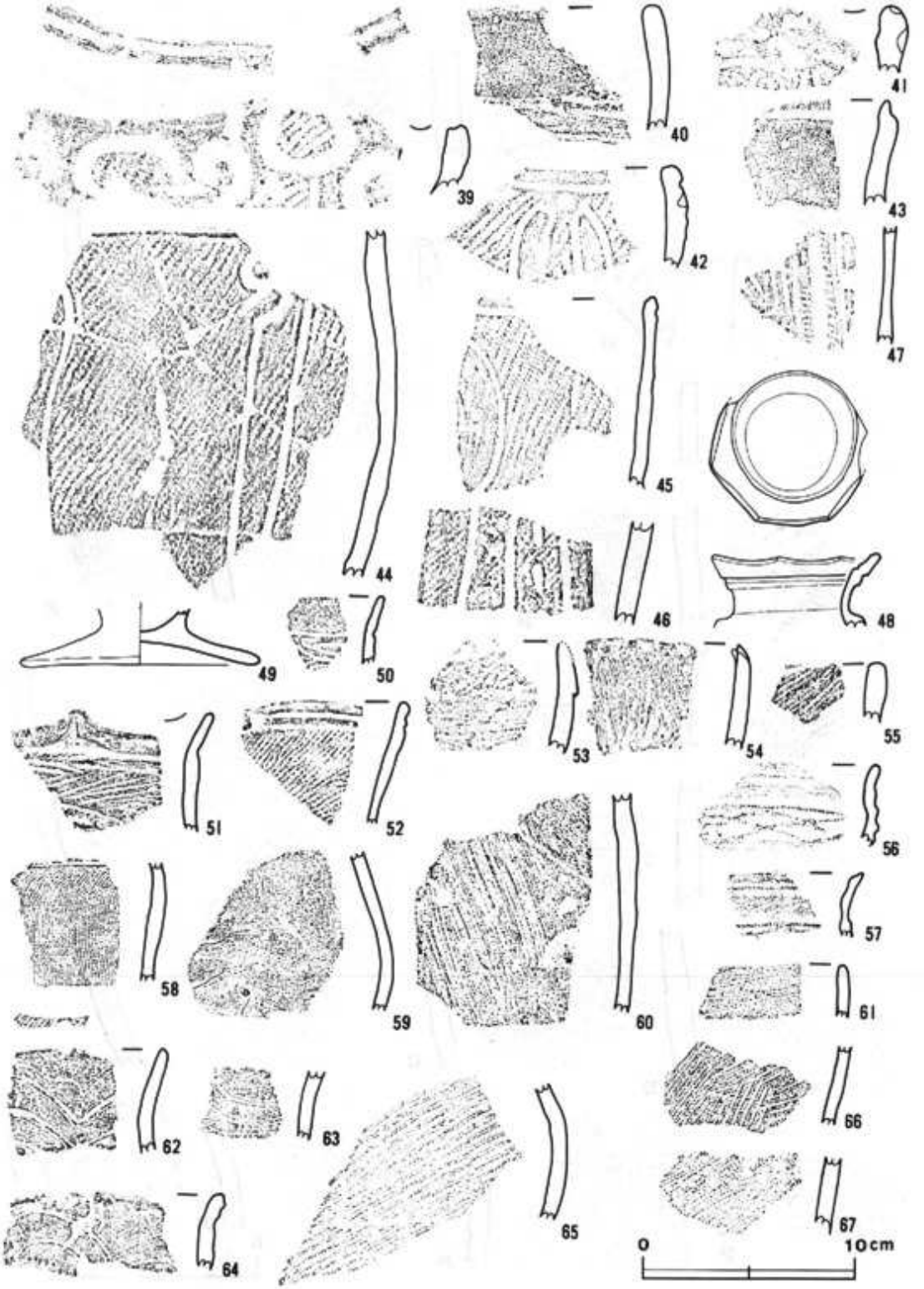
図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号	図版番号	台帳番号
〈第16図〉		11-TP	38	22-TP	57	2-TP	212	13-TP	219	23-TP	40	34-TP	246	44-TP	239	55-TP	93	66-TP	238
1-TP	1	12-P	1	23-TP	58	3-TP	144	14-TP	141	24-TP	222	35-TP	194	45-TP	209	56-TP	109	67-TP	234
2-TP	3	13-TP	46	24-TP	61	4-TP	192	15-TP	13	25-TP	223	36-TP	191	46-TP	167	57-TP	110		
3-TP	2	14-TP	47	25-TP	60	5-TP	97	16-TP	18	26-TP	226	37-TP	244	47-TP	183	58-TP	83		
4-TP	6	15-TP	50	26-P	2	6-TP	262	17-TP	26	27-TP	213	38-TP	125	48-P	7	59-TP	73		
5-TP	4	16-TP	48	27-TP	63	7-TP	179	〈第18図〉		28-TP	254	〈第19図〉		49-P	27	60-TP	123		
6-TP	7	17-TP	49	28-TP	69	8-TP	214	18-TP	30	29-TP	202	39-TP	65	50-TP	142	61-TP	231		
7-TP	5	18-TP	52	29-TP	70	9-TP	200	19-TP	197	30-TP	235	40-TP	193	51-TP	140	62-TP	186		
8-TP	41	19-TP	51	30-DP	1	10-TP	101	20-TP	20	31-TP	155	41-TP	164	52-TP	80	63-TP	187		
9-TP	43	20-TP	53	〈第17図〉		11-TP	14	21-TP	208	32-TP	124	42-TP	181	53-TP	84	64-TP	189		
10-TP	25	21-TP	55	1-TP	195	12-TP	161	22-TP	147	33-TP	241	43-TP	266	54-TP	82	65-TP	232		



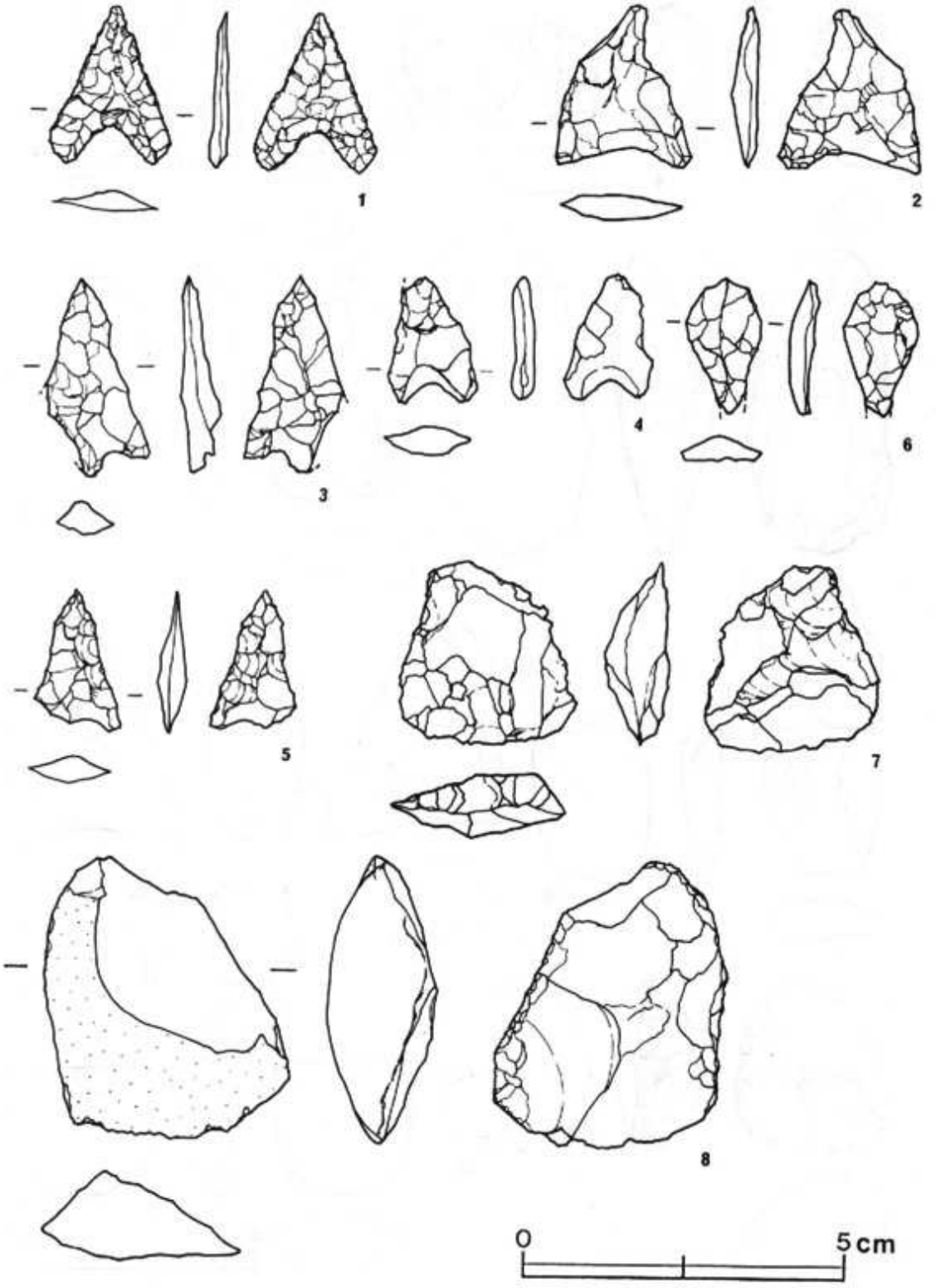
第18図　グリット出土遺物拓影図 (1)



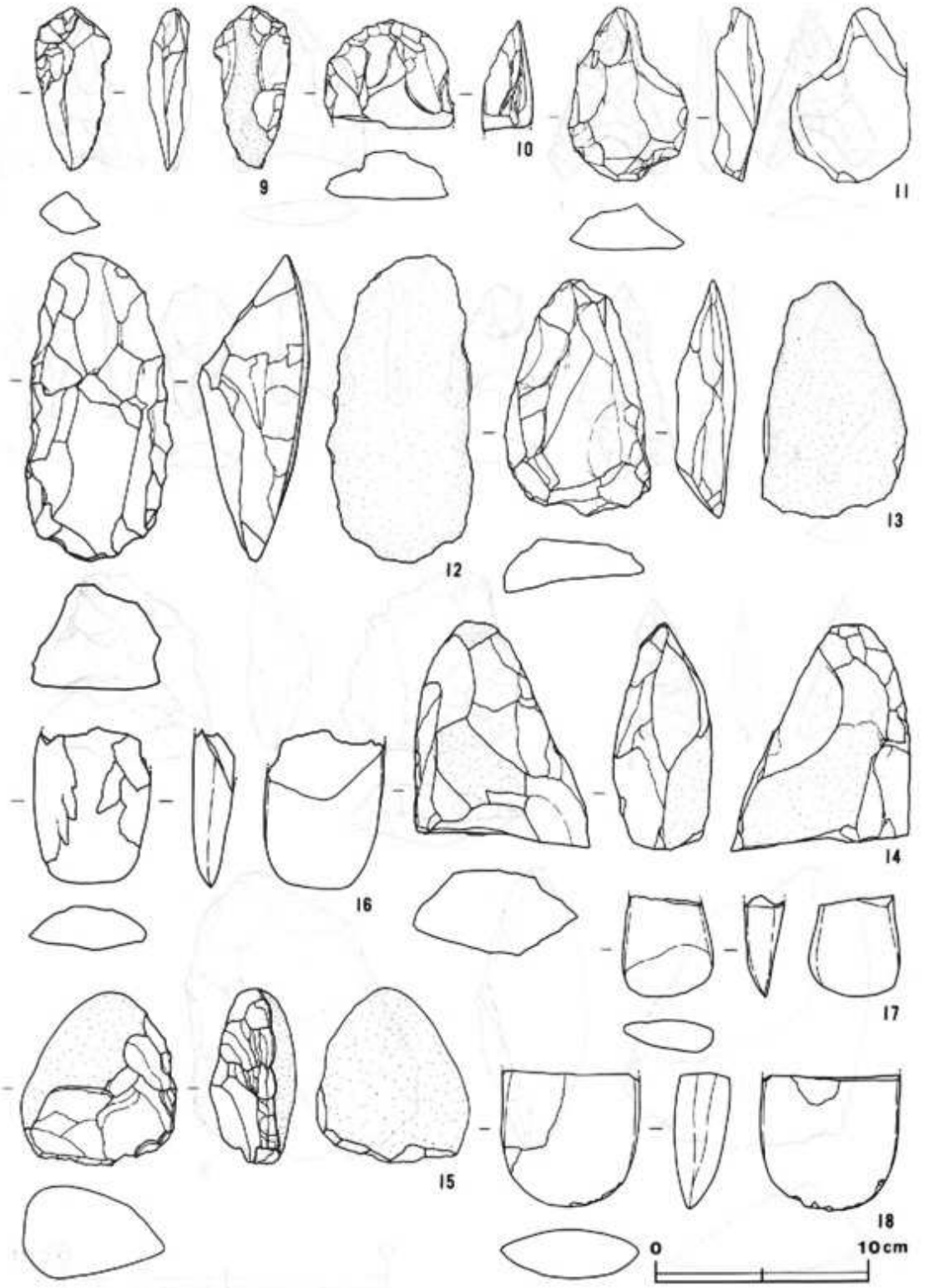
第19図　グリット出土遺物拓影図　(2)



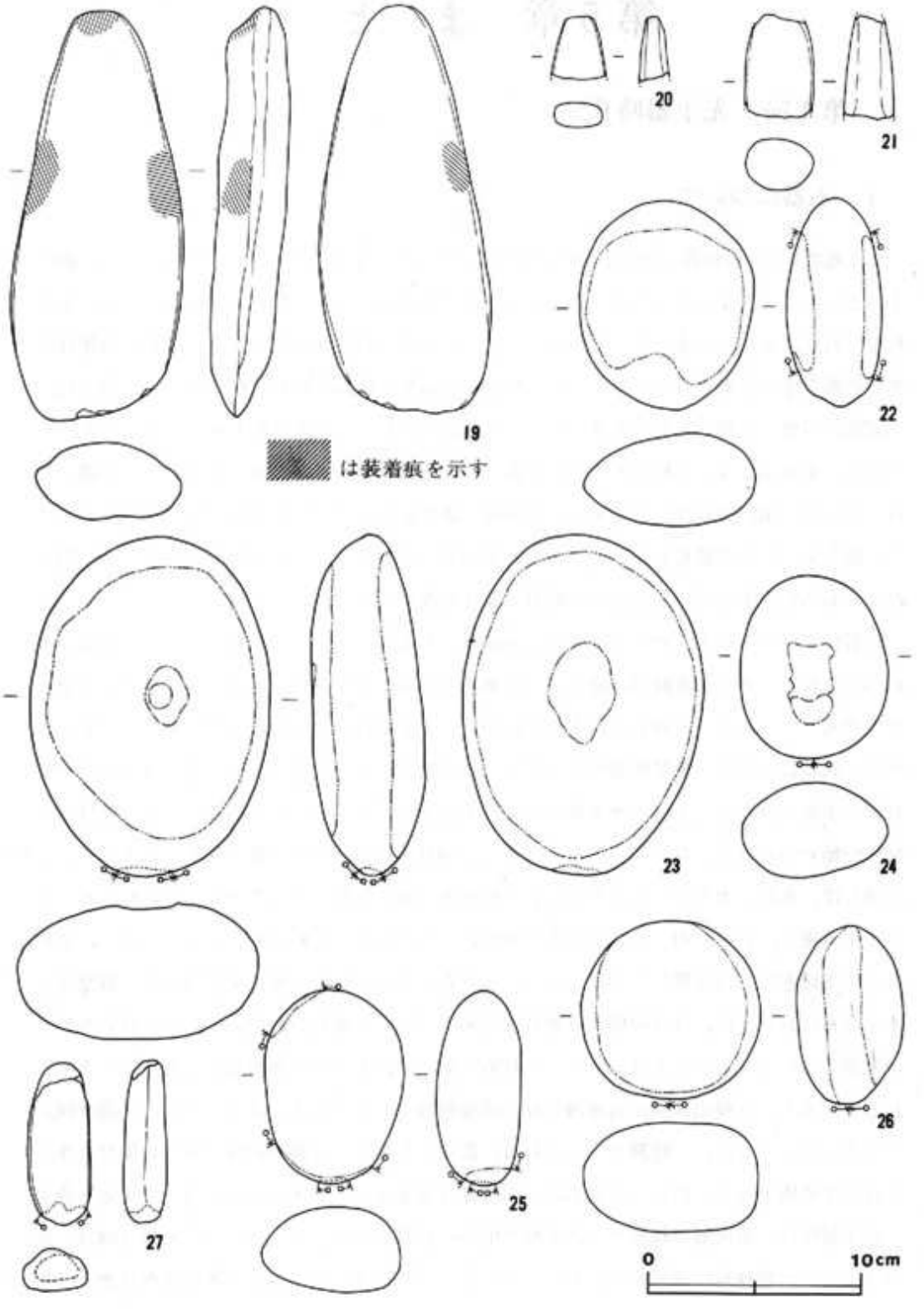
第20図　グリッド出土遺物拓影図 (3)



第21図　縄文時代石器実測図　(1)



第22図　縄文時代石器実測図　(2)



第23図　縄文時代石器実測図　(3)

第5章　ま　と　め

第1節　先土器時代

1　石器について

出土総数162点の石器，剥片，細片が出土した。先土器時代ユニットの石器，剥片，細片の出土数としては，少ないものであった。主な石器の組成は，ナイフ形石器，掻器，削器，尖頭器，石刃，石核，敲石から成り立っている。しかし，石器の総数が26点と少なく，石器製作技術も一部の石器を除いて劣るものが多かった。特に，頁岩製の掻器や削器に粗雑なものが目立ち，石器の識別に戸惑いを感じるものも多かった。比較的ていねいに作出されているのは，ナイフ形石器である。第8図2は，小形のナイフ形石器で，右側縁の全体と左側縁の基部近くに刃潰し加工を行っている。第13図31は，長い刃部と，側縁の調整痕からナイフ形石器に分類されたものであるが，鋭く尖った先頭部を有することから，尖頭器に分類することも可能である。また，削片と思われるものが出土していることから彫器の製作も推測される。

石質についてみると，めのう，頁岩，流紋岩，花崗岩，チャートが使用されているが，主体は，めのうと頁岩である。流紋岩は敲石に，花崗岩は台石に使用され，チャートは，細片で出土するだけであった。めのうと頁岩の比率は，めのうが出土総数の74%を占めている。しかし，この比率は，両石質の正しい数量的関係を示すものとは思われない。なぜならば，長さ巾とも3cm以下の頁岩の小剥片は3点しか出土せず細片は1点も出土していないからである。このことは，頁岩の細片が始めから存在しなかったためではなく，同質の石器，剥片の風化状態から考えて，小剥片や細片は，風化によりローム土と同化して検出不可能の状態にあったためと思われれる。以上のことを考慮し，長さ，巾とも3cm以上の剥片について改めて比較すると，めのう59%，頁岩41%で，出土比率は，ほぼ等しくなる。めのうと頁岩，それぞれの分布状況を第7図で観察すると，水平分布においては，ほぼ同様の分布状況を呈している。垂直分布においては，頁岩がやや上位に位置している。このことは，めのうと頁岩の間には，若干の時間的な差を有することも考えられるが，ユニット検出地域が台地縁辺部の緩傾斜地であることや，Aユニットの一部が攪乱されていること，さらに，一時期を一つの石質に限定した場合，石器の組成に著しい偏りを生じることなどを考慮すると，めのうと頁岩は，同時期に使用されたと考えるのが妥当であると思われる。

出土層位は，第Ⅲ層の軟質ローム下部を中心に石器が出土した。ユニット検出地域は，前述したように，台地縁辺の緩傾斜地にあたっている。ここでは，ローム土の堆積状況は悪く，Ⅲ，Ⅳ層とも台地上よりは10cmほどずつ薄めであった。また，軟質ローム上部は，縄文明代早期末葉の

土器と先土器時代の剥片とが上下して出土することなどから，自然の変動により堆積上層に乱れがあったものと思われる。

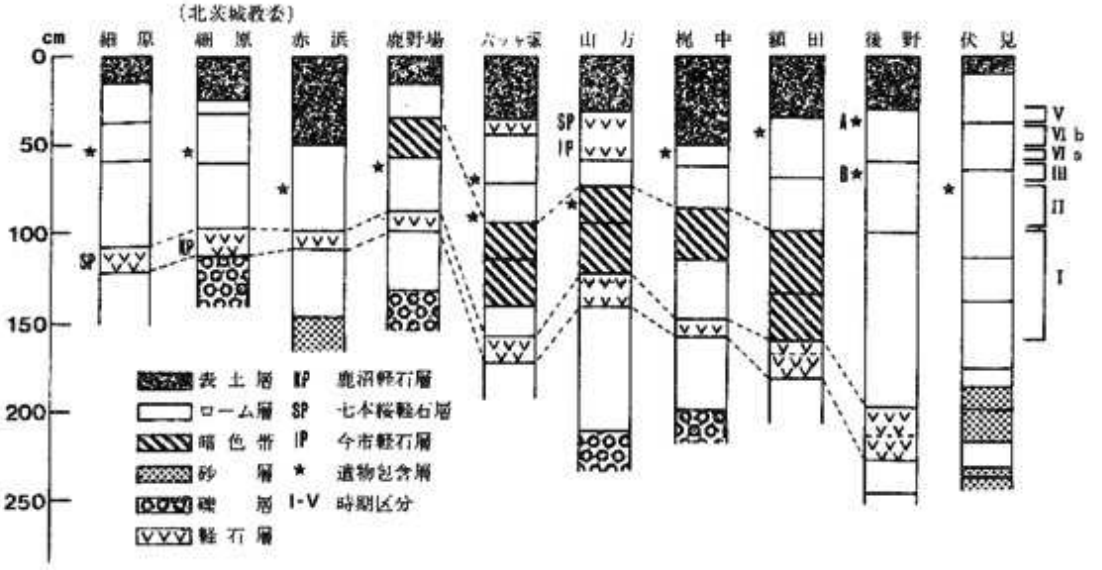
2　細原遺跡の編年

細原遺跡では，定形的な石器の出土量が少なかった。また，ローム土の堆積状況にも不十分な点があった。このようなことから，細原遺跡出土の石器群を，茨城県の先土器時代の編年に位置付けることは困難である。しかし，石器組成に小形のナイフ形石器，尖頭状のナイフ形石器，木葉形の尖頭器などを有することや，出土層位が，第三層軟質ローム下部であることなどから，表6「茨城県における先土器時代石器群の時期区分」における第III期の終末あたりに位置づけされるものと思われる。

表6　茨城県における先土器時代石器群の時期区分

時期		遺跡名	石器組成	主な石質	層位
第I期		山方宿遺跡 鹿野場遺跡	掻器・削器・打製石斧・石核・石礫・石刃	頁岩・石英・凝灰岩	黒色帯とその下位に存在する褐色の火山灰層
第II期		六ッケ塚遺跡 伏見遺跡 西原遺跡 梶巾遺跡	ナイフ形石器・掻器・削器・石核・木葉形尖頭器	黒曜岩・頁岩・めのう石英	IV層の硬質火山灰層
第III期		赤塚西団地 赤浜 細原(北茨城市史)	木葉形の槍先形尖頭器・掻器・彫刻刀形石器 削器・石核・ナイフ形石器・石刃 （東内野形尖頭器の伴出）	黒曜岩・頁岩・めのう 安山岩・流紋岩	IV層の硬質火山灰層上部～軟質火山灰層下部
第IV期	a	後野遺跡B地区	細石核・細石刃・尖刃器・掻器・礫器・彫器 削器・尖頭器	頁岩・砂岩・安山岩	第III層中位～上位
	b	新田大宮遺跡	木葉形の大形槍先形尖頭器・打製石斧・掻器 削器・細石刃・細石核		
第V期		後野遺跡A地区 豊喰遺跡	打製石斧・有舌尖頭器・掻器・削器・石刃 （縄文草創期の土器を伴出）	頁岩	第II層上位

（北茨城市史編さん委員会編『細原遺跡』（1982）をもとに作表した。）

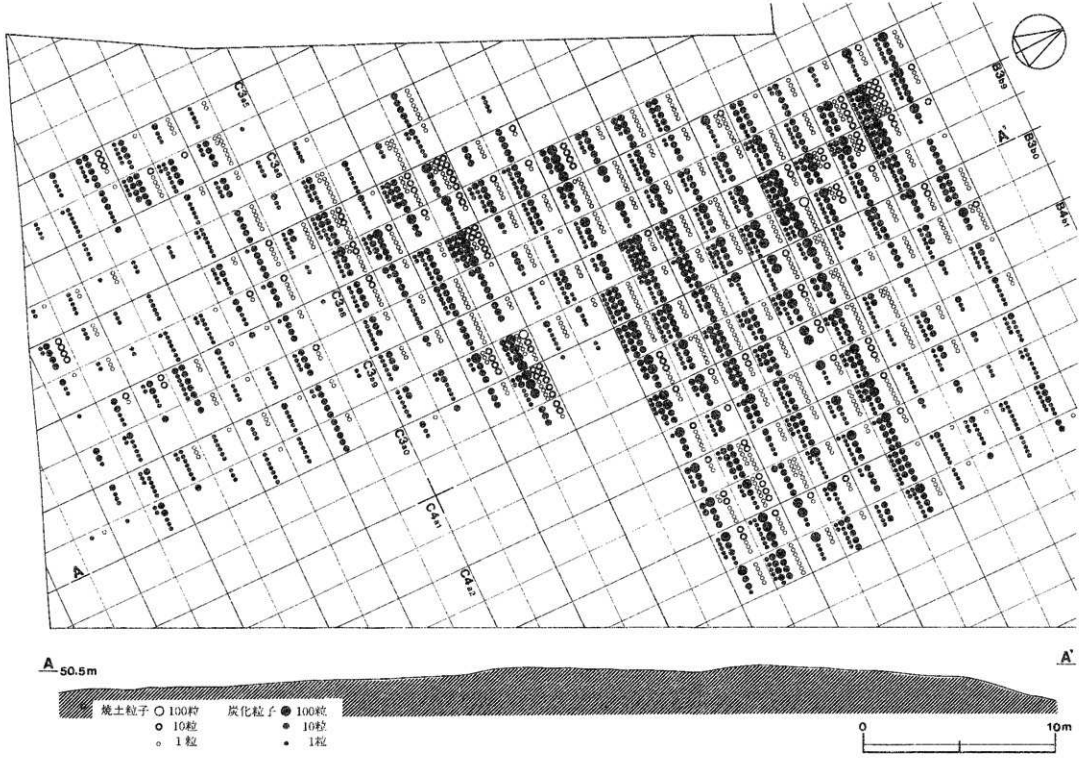


第24図　茨城県における先土器時代石器群の出土層位と時期区分
（北茨市史編さん委員会編「細原遺跡」をもとに作成）

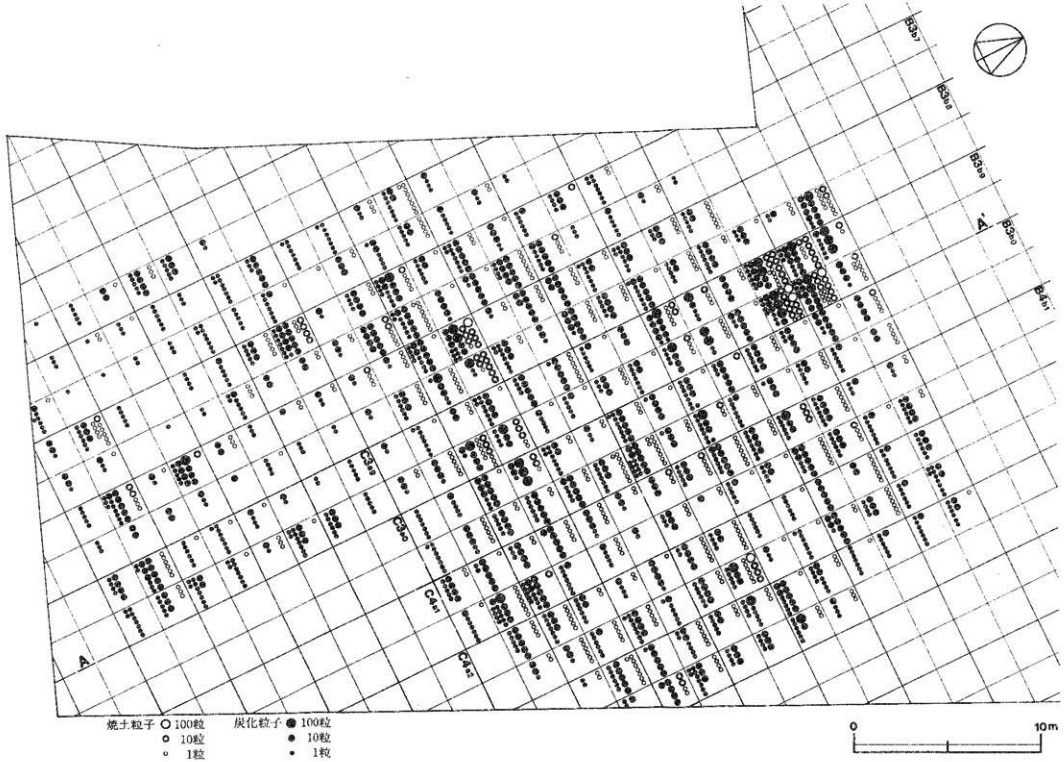
3　焼土粒子・炭化粒子の広がり

グリッド発掘による試掘の段階で，調査区南半分の平坦部から先土器時代の石器が数点出土した。出土層位は，第3層のソフトローム中・下層であり，焼土粒子や炭化粒子がかなり含まれていることが確認された。このことにより，調査区南半分の第2層まで，約30～40cmを取り除いて焼土粒子・炭化粒子の分布状態を調査した。調査は，約20cmのソフトローム層を10cmづつ，ジョレンで削平しながら掘り下げ，水糸を張って2m四方の小グリッドを設定し，焼土粒子は赤い竹串，炭化粒子は白い竹串を立て，その数を記録する方法で行った。第25図はソフトローム層を10cmほど削平し，ソフトローム中層の焼土粒子・炭化粒子の分布状態を記録したものである。第25図によると，焼土粒子が多量に検出された地域は，平坦部から北側へ緩やかに傾斜をしている小調査区$B3c_8$・$B3d_8$付近に集中している。もう一か所は，調査区南側の平坦な$B3i_7$・$B3i_8$・$B3i_9$付近に集中して検出された。また，炭化粒子については，上記の焼土粒子の集中している地域と同一地域から特に多量に検出されたが，2か所の中間に位置する平坦部に，平均して多量に分布していることが第25図から確認できる。なおB4の北側地域と，調査区南側のC3地区は比較的希薄であった。調査区南東側の$C4a_1$付近が空白となっているが，この地域は先土器のユニットが4か所検出された地域であり，ユニットの調査の関係で，焼土粒子・炭化粒子の分布を記録することができなかった。表面の観察では，C3地区と同じように希薄であった。

次に第26図は，ソフトロームをさらに10cmほど削平し，第4層のハードローム上面における焼土粒子・炭化粒子の分布状態を記録したものである。第26図によると，焼土粒子が多量に検出さ



第25図　焼土粒子・炭化粒子の分布状態（第一次面）



第26図　焼土粒子・炭化粒子の分布状態（第二次面）

れた地域は，第25図と同様に，平坦部から北側へ緩やかに傾斜をしている小調査区B3d₉・B3e₉付近に集中している。あと一か所は，やはり調査区南側の平坦なB3i₈区に集中していることが確認できた。炭化粒子は，ローム中層の調査と同様に焼土粒子の集中している地域と一致して検出された。

なお，南東側が空白となっているが，この地域は先土器ユニットの調査後，さらにハードロームを10～15cmほど掘り下げたために焼土粒子・炭化粒子の分布を記録できなかった。

一次面，二次面の調査により，焼土粒子・炭化粒子の分布状態は，調査区中央部の台地平坦部に集中していることが判明した。台地平坦部を中心にして，その周辺は外に向って次第に薄くなっていく状態が確認できる。焼土粒子・炭化粒子の分布状態を調査した層位と同じ層位から先土器時代の石器のユニットが検出されていることから考えて，この時期の生活の中心舞台が台地平坦部を中心に存在したものと考えられる。

第2節　縄文時代

1　土坑について

当遺跡において調査された土坑は，集石土坑を含めて24基を数える。これらの土坑は，底面からの出土遺物によって時期の判断出来るものもあるが，時期不明のものも多い。これらの土坑について，下記のように形態分類し，さらに時期別にまとめたものが表7である。

(1)　平面形による分類

A類　平面形が円形か不整円形のもの。

B類　平面形が楕円形か不整楕円形のもの。

C類　平面形が不定形のもの。

D類　集石土坑

(2)　深さによる分類

a　深さが50cm未満のもの

b　深さが50cm以上のもの

時期別にみると早期に比定される土坑が集石土坑を含めて10基を数える。後期は主に堀之内式土器を出土する土坑が4基確認されている。不明の土坑は遺物を出土しなかったり，出土したとしても小破片で時期判定の困難なものも含まれていることから，この中には早期に区分できるものもあるものと考えられる。したがって，当遺跡の土坑は，大部分が早期のものとも考えられる。ここでは，時期判定のされた土坑について，その分布状態を第27図でみることにする。

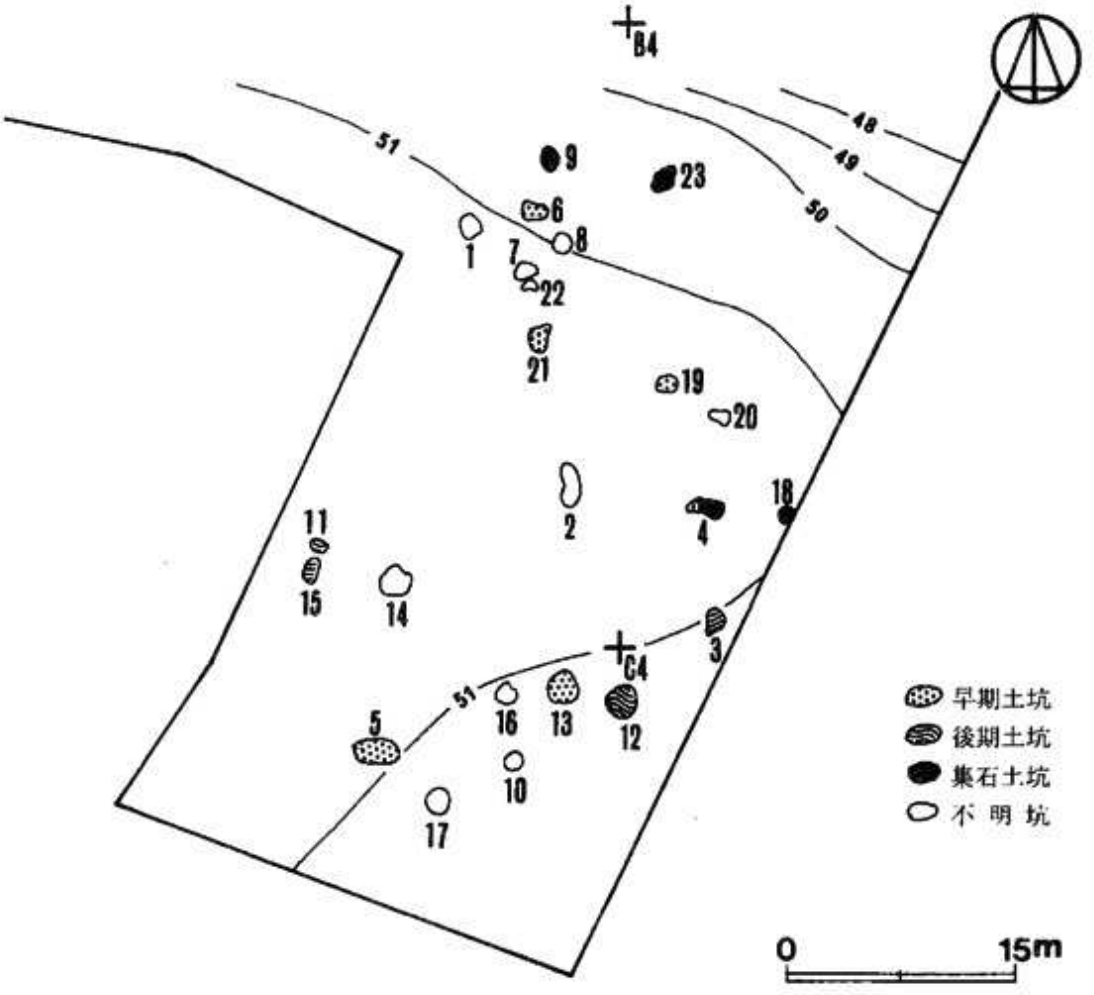
早期の土坑についてみると，10基が確認されているが，そのうち4基が集石土坑である。4基の中で4－B号・18号集石土坑は台地平坦部に，9号・23号集石土坑は北側の傾斜地に位置している。残りの6基のうち2基は，南東側の緩斜面に，1基は北側の緩斜面に，残り3基は平坦部

に位置している。これらの土坑を分布図でみると，標高51mの等高線近くに弧を描いて位置していることがわかる。出土遺物についてみると，茅山式土器片が大部分を占めているが，出土量はいずれも少量である。特に19号土坑は，底部から尖底土器の底部と，手捏ねの土製品が出土していることから貯蔵以外の目的に使用されたとも考えられる。

表7　土坑形態分類表

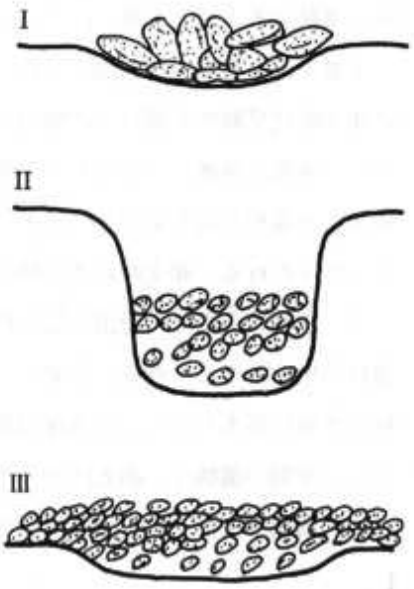
		A	B	C	D	計	
早期	a	1	2	1	3	7	10
	b	1		1	1	3	
後期	a	2		1		3	4
	b		1			1	
不明	a	5	3	1		9	10
	b	1				1	
計		10	6	4	4	24	

集石土坑については，4基の集石土坑を集石の形態から第28図のように3種類に分類することができる。Ⅰの集石土坑は4－B・18号土坑であるが，両土坑とも約20cm掘りくぼめ，卵大から人頭大の石や平坦な石を数十個集石してあっ



第27図　土坑配置図

た。石の下には炭化粒子を含む黒色土が堆積していることから，火を燃やした上に石を置き，焼けた石を利用して食物を調理したものと考えられる。この２基は，調査区東側の台地平坦部に約６ｍの距離を置いて位置している。IIの９号集石土坑は，約50cm掘りくぼめ，底部から30cmほどの位置に卵大から人頭大の石約400個がぎっしりと入っていた。石の上部の覆土に炭化粒子，焼土粒子を含む褐色土が堆積していることから，Ｉの場合と逆に，火を燃やして下の石を熱し，焼けた石の上に食物を置き，上から土をかけて蒸し焼き調理に使用したものではないだろうか。この９号集石土坑は，北側の斜面部に位置している。IIIの23号集石土坑は，長径1.91ｍ・短径1.18ｍの楕円形状に約15～20cm掘りくぼめてあり，覆土は炭化粒子を含む褐色土が堆積しているが，覆土から卵大の小礫が約650個出土した。



第28図　集石土坑形態分類図

さらに，覆土の上面からは，卵大の小礫が約350個出土した。その小礫の上面からは焼土粒子が多量に検出されていることから，IIと同様に，石の上で火を燃やし，焼けた石を利用して食物の調理をしたものと思われる。

細原遺跡の集石土坑は，Ｉ・II・IIIとも形態は異なっているが，いずれも火を焚いて焼けた石を食物の調理に使用していたものと考えられる。

縄文時代早期の土坑が検出されているにもかかわらず，当時の住居跡や炉穴などは，検出できなかった。しかし，検出された４基の集石土坑は，いずれも火を使用した痕跡を確認することができたことから，当時の人たちが生活を営んだ跡であると考えられる。

後期の土坑についてみると，４基が確認されているが，いずれも遺跡南側の平坦部に位置している。後期の住居跡が確認できなかったことと，この位置から南東方向は，緩傾斜となっていることを合わせて考えると，後期の生活舞台の中心は，当遺跡の西側に延びているものと思われる。

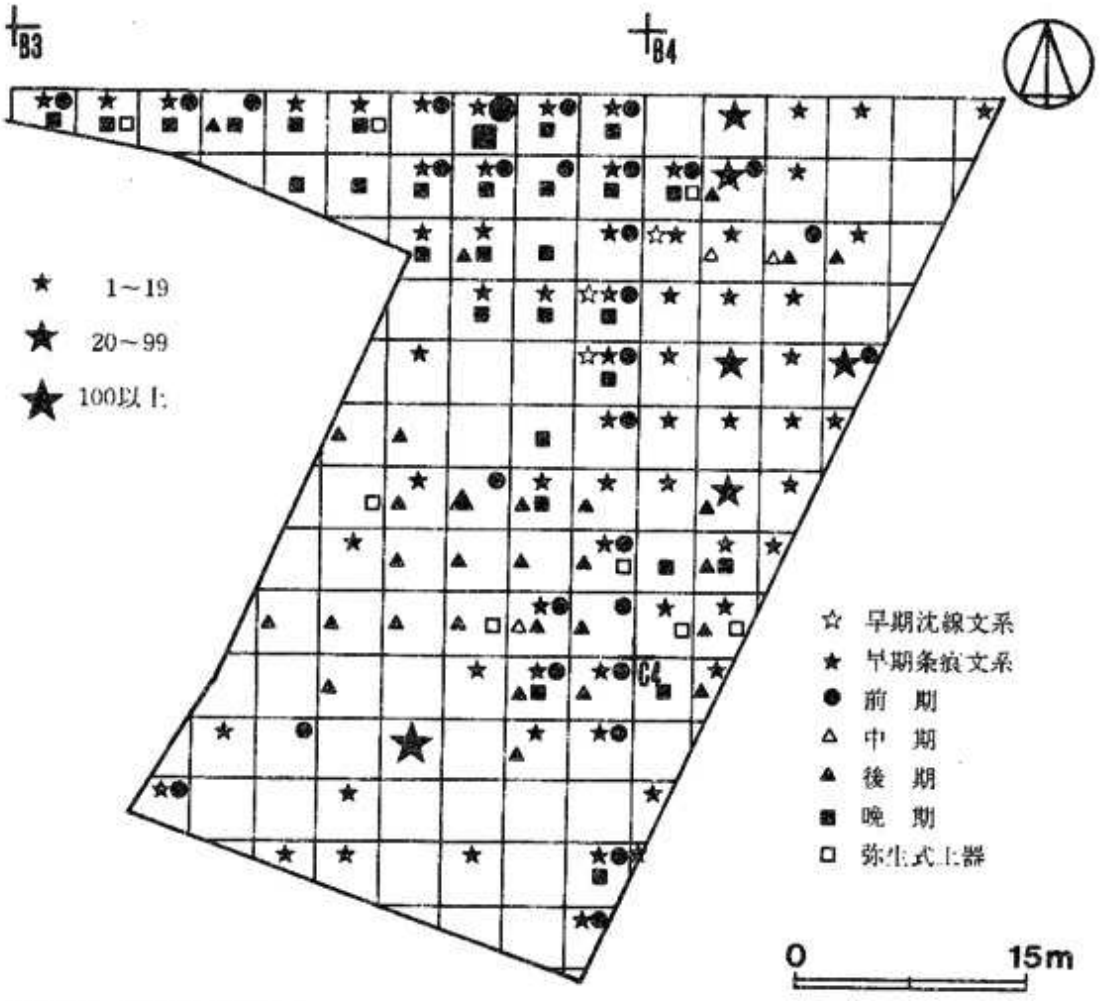
2　遺物について

(1)　土器

当遺跡から出土した土器は，縄文時代から弥生時代に至る長期間にわたるものであった。それらの土器の中で最も多かったのは，縄文時代早期末の土器であった。茅山上層式以降の条痕文系土器や大畑Ｇ式土器に比定されるこれらの土器は，全出土数の約56％を占めている。さらに前期初頭の土器まであわせると全体の約68％を占めることとなり，当遺跡が主に，早期末から前期初

頃の遺跡であることを裏づけている。

土器平面分布図（第29図）から，土器の出土は，台地縁辺部に集中していることがわかる。特に縄文時代早期の土器にその傾向が強い。地形の状態などを考え合わせると，この時期の遺跡は，さらに東部に伸展しているものと思われる。またC3b7小調査区からは，5号土坑を中心として早期末の土器や石器が集中して出土しており，当地区が当時の人々の生活拠点の一つであったことがうかがわれる。縄文時代の土器は，出土量もきわめて少なく，遺跡中央部に散布する程度であった。後期の土器は，総出土量の約10%を占めている。遺跡西側に主に分布しており，同時期の遺構の中心はさらに西部に伸展しているものと推定される。晩期の土器は全出土量の約14%と比較的多量に出土したが，台地縁辺部の西に伸びた調査区内から主に出土している。これらのことから，晩期の遺構は，調査区外の西側にあるものと推定される。弥生時代の土器は，出土量も少なく，遺跡中央部に散布する程度であった。



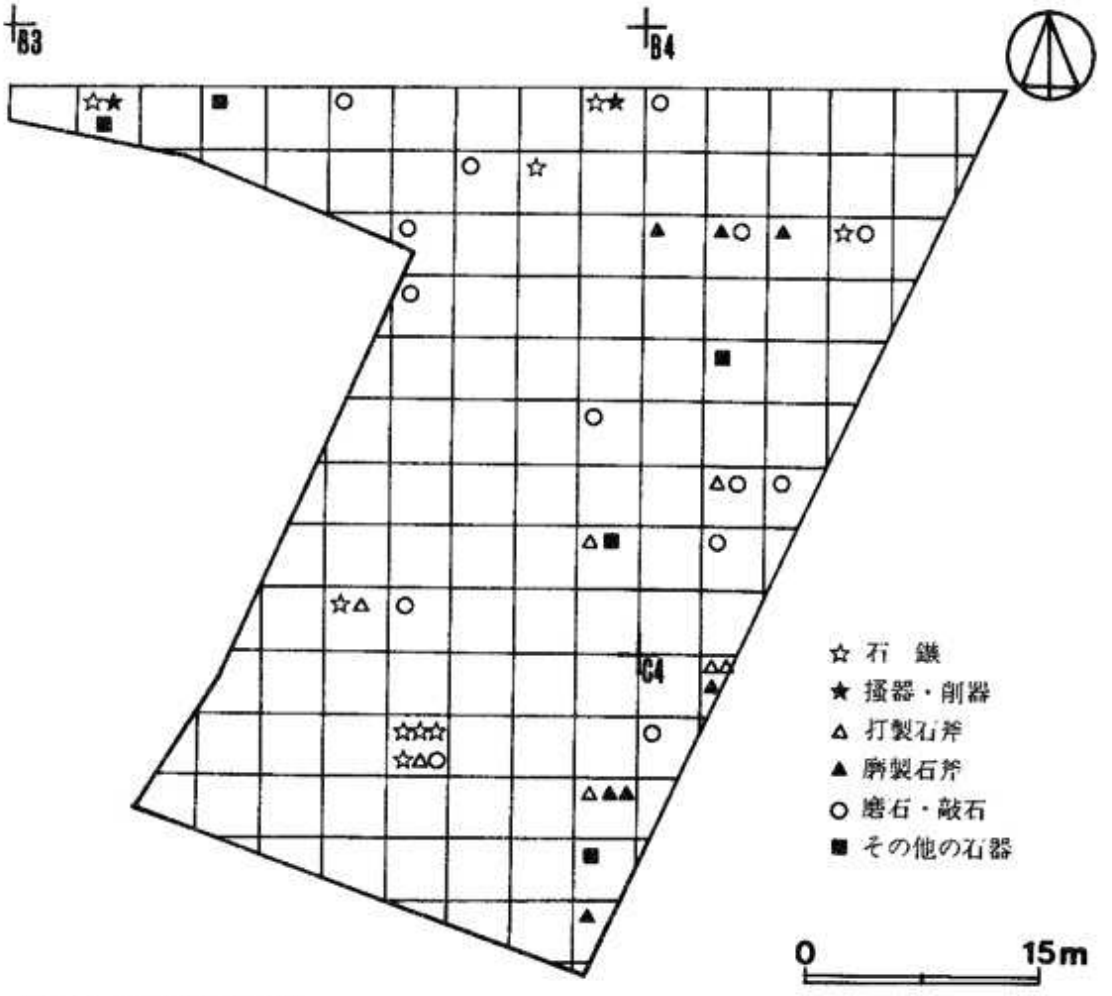
第29図　土器平面分布図

(2) 石器

総数48点の石器が出土している。

石器の種類は，石鏃・掻器・削器・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石錐などである。石鏃は，無茎石鏃が主で，有茎石鏃は1点だけである。無茎石鏃の中には，早期末の土坑に伴って出土したものが多かった。石斧は，比較的多量に出土している。特に第10図13・14のように先土器時代の遺物を出土した調査区より出土し，石斧の形状からも先土器時代の遺物かと思われるものもあった。しかし，出土層位が表土下層又はソフトローム最上部であったため，ここでは縄文の石器として扱った。

石器に使用している石材は，花崗岩・アプライト・閃緑岩・流紋岩・斑糲岩・緑泥片岩・雲母片岩・チャート・頁岩・砂岩など種類は豊富である。これは，背後に阿武隅高地という豊かな原材料供給地を控えていることによるものと思われる。



第30図　石器平面分布図

これらの石器は，ほとんどが遺構外出土であった。石器平面分布図（第30図）から，主な出土地域は，台地縁辺部に集中していることがわかる。この地域は又，土坑が検出され，土器が集中的に出土している所でもある。これらの土坑や土器は，縄文時代早期から前期にかけてのものが多いことから，石器もほとんどが，同時期のものであると推定される。なお，台地北側の低地部からは，掻器１点が出土しただけであった。

参考文献

○ 『茨城県史料・考古資料編，先土器・縄文時代』　茨城県　1979年

○ 『茨城県史　原始古代編』　茨城県　1984年

○ 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書３・沖餅遺跡』　茨城県教育財団　1980年

○ 常総台地研究会『赤浜遺跡発掘調査報告』　高萩市教育委員会　1972年

○ 瓦吹　堅『細原遺跡』　北茨城市史編さん委員会　1982年

○ 後野遺跡調査団　『後野遺跡』　茨城県勝田市教育委員会　1976年

○ 川崎純徳ほか　『額田大宮遺跡』　那珂町史編さん委員会　1978年

○ 伏見遺跡調査団　『常陸伏見』　伏見遺跡調査会　1979年

○ 鈴木忠司著『先土器時代の知識』　東京美術　1984年

○ 『季刊考古学』第４号　雄山閣　1983年

○ 『日本の美術　No.188　旧石器時代』　至文堂　1982年

○ 加藤晋平・鶴丸俊明　『石器の基礎知識Ⅰ　先土器（上）』　柏書房　1980年

終　章　む　す　び

常磐自動車道建設用地内における細原遺跡の発掘調査の結果，主に先土器時代末期から縄文時代早期，前期初頭にかけて古代人が生活を営んだと考えられる跡を確認することができた。

先土器時代末期においては，調査区南東部に4か所の先土器ユニットが検出され，石器と伴に出土した剥片等から石器の製作が行われた場所であることが判明した。この時期の住居跡の存在は確認できなかったが，台地平坦部全域にわたって焼土粒子，炭化粒子が検出されたことから，すでにこの時期において生活が営まれていたものと考えられる。

縄文時代においては，早期から晩期にかけての土器片が出土しているが，特に早期末から前期初頭に比定される茅山式，花積式等の土器片が多く出土している。この時期の住居跡は検出できなかったが，早期の遺物を出土している土坑や集石土坑が検出されたことから，当遺跡は，この時期を中心にして生活が営まれた場所であるということができる。

当遺跡の立地する台地は，北側に里根川が流れ，南側にはその小支谷が複雑に入り込んでいて，生活を営むには恵まれた環境ということができる。今回の調査区域は，舌状台地の先端部分であることから考えると，当遺跡の主体部分は，地形等から判断してむしろ台地西側の平坦部地域に延びているものと考えられる。

いずれにしても，今回の調査結果によって導き出されたものは大きく，本地域における先土器時代末期，縄文時代早期・前期のようすが，より多く解明されたものと思われる。

なお，この成果をまとめるにあたり，調査担当者はもとより，関係各位の御指導や御協力を賜わったことに対し，文末ではあるが，心から感謝の意を表したい。

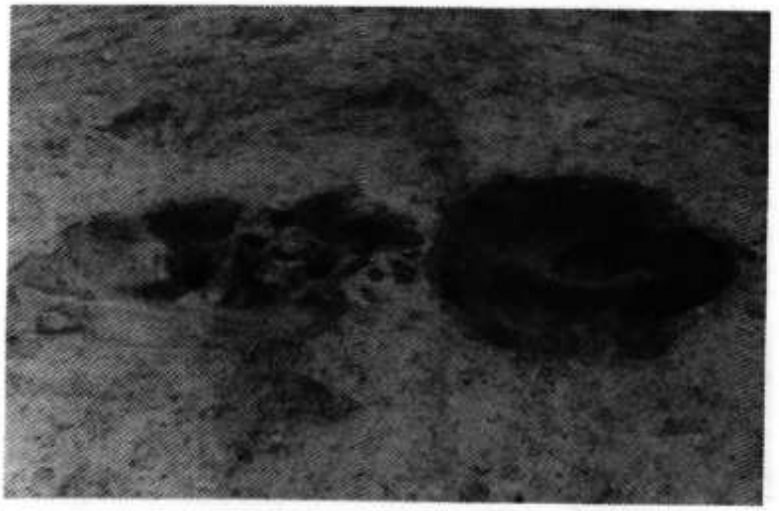
写　真　図　版

遺跡遠景（北から）

遺跡南側土層断面図

作業風景

C3b$_4$ 区テストピット

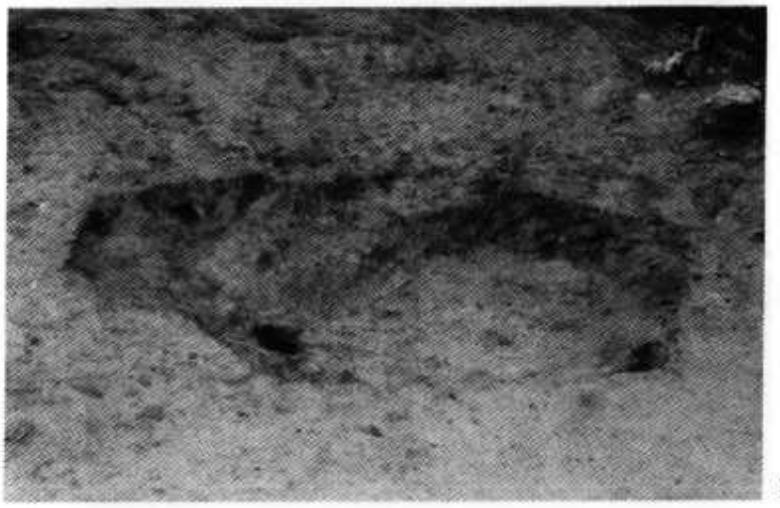


第4－A号土坑
第4－B号集石土坑

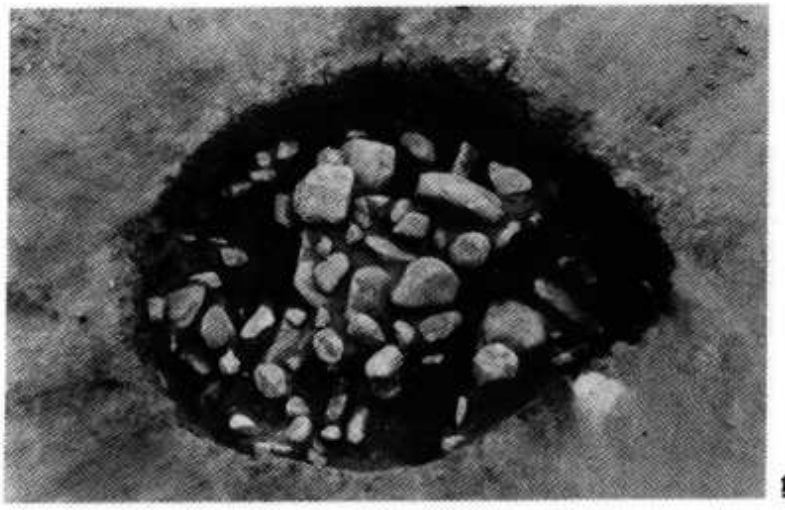
第4－B号集石土坑

第4－B集石土坑

第 5 号土坑
遺物出土状況



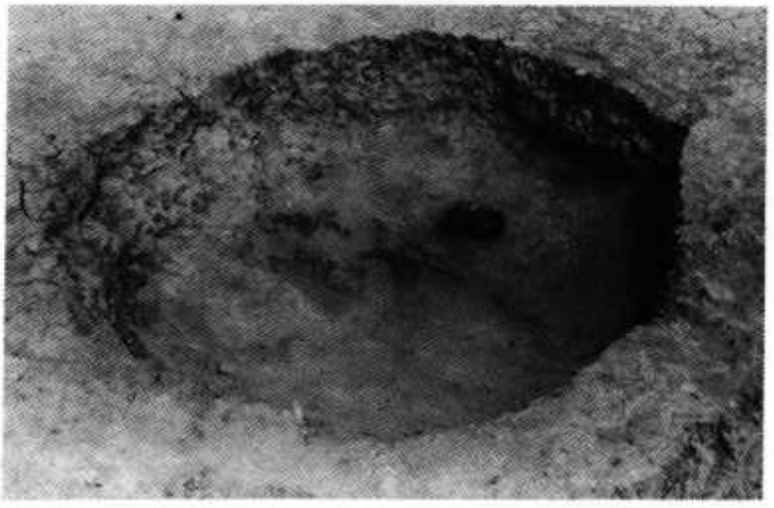
第 5 号土坑



第 9 号集石土坑

第 9 号集石土坑

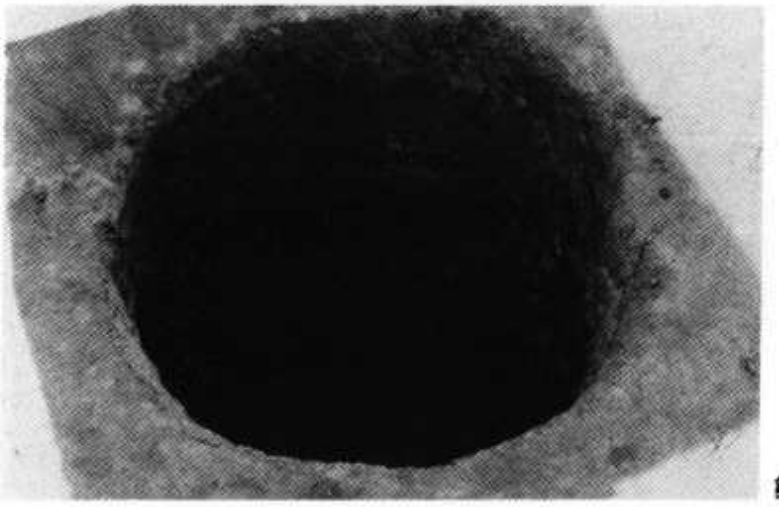
第12号土坑
遺物出土状況



第12号土坑

第13号土坑

第15号土坑
土層断面図

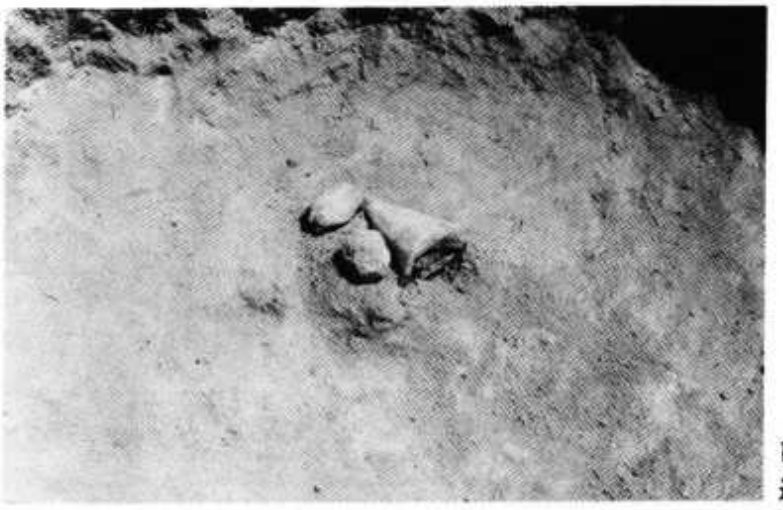


第17号土坑

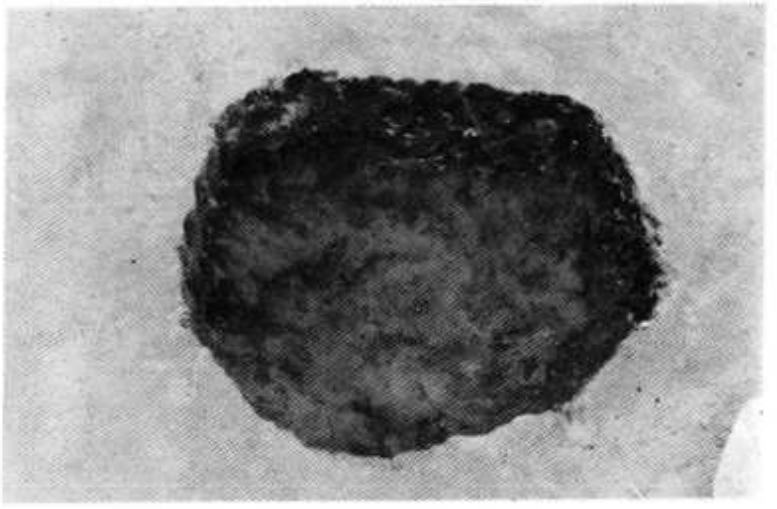
第18号集石土坑

第18号集石土坑
土層断面図

第18号集石土坑



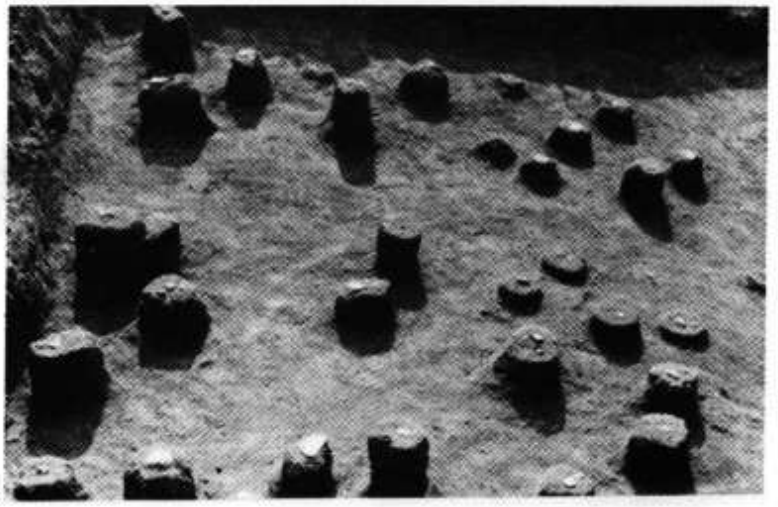
第19号土坑
遺物出土状況



第19号土坑

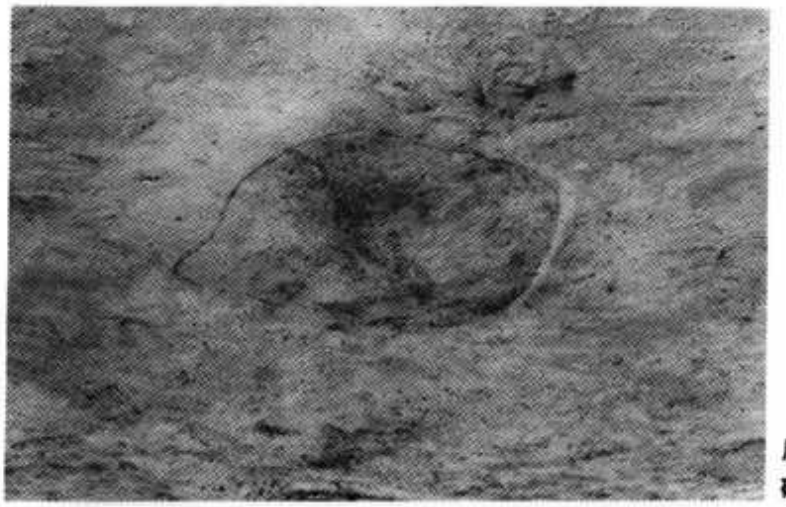
第21号土坑

第23号集石土坑



B4b_2区
遺物出土状況

C3e_0区
遺物出土状況

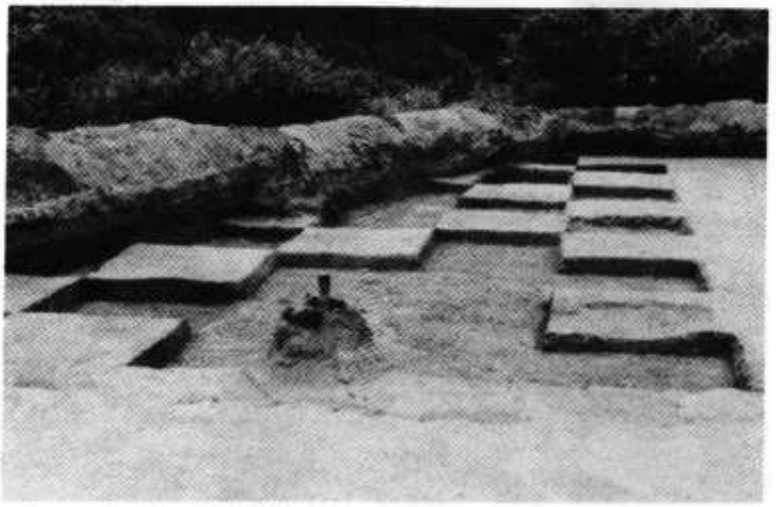


炭化粒子・焼土粒子
確認状況

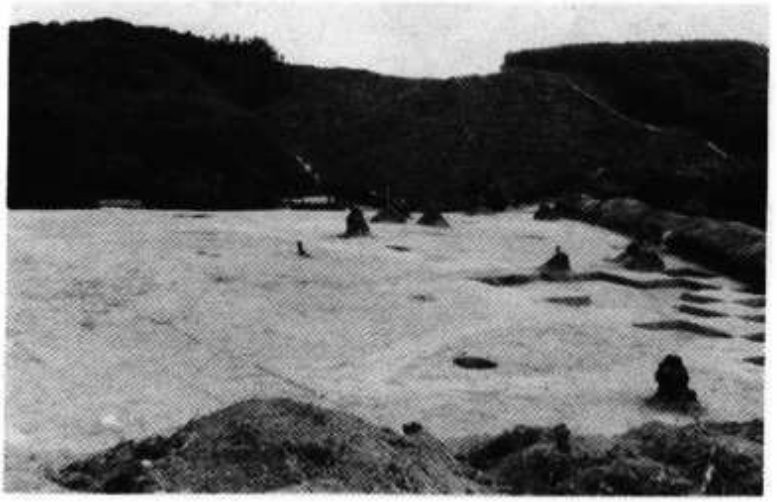
炭化粒子・焼土粒子
確認状況

炭化粒子・焼土粒子
確認状況

水洗用土壌
サンプル採集



南東部先土器
調査状況



調査後全景

A2i_4区
遺物出土状況

B3b_2区
遺物出土状況

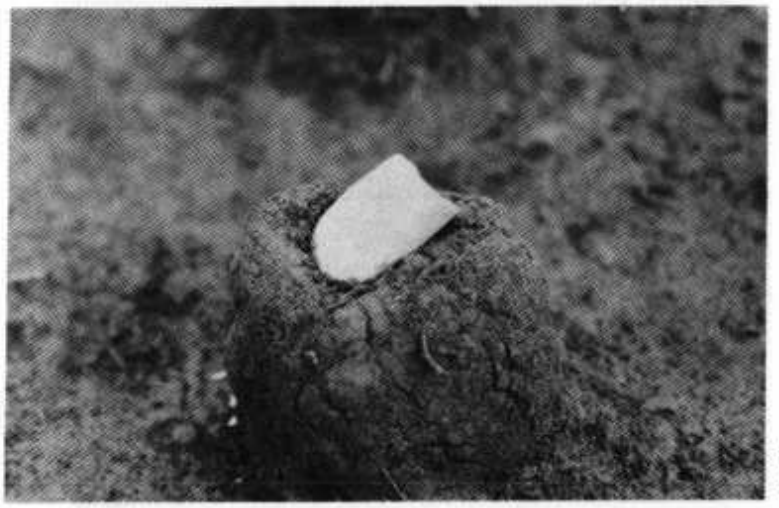
B3b_0区
遺物出土状況

B3b_s区
遺物出土状況

B3b_s区
遺物出土状況

B3f_o区
遺物出土状況

B3j_0区
遺物出土状況



B4d_2区
遺物出土状況

B4d_2区
遺物出土状況

C3a$_0$区
遺物出土状況

C3a$_0$区
遺物出土状況

C3a$_0$区
遺物出土状況

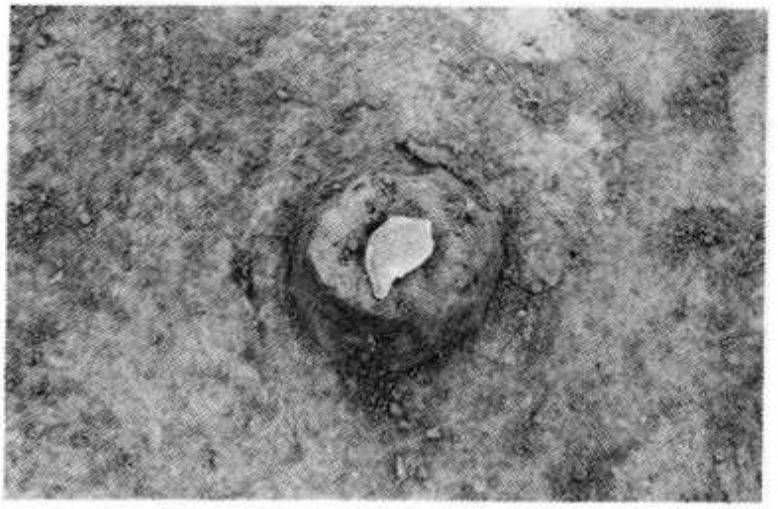
C3a_0区
遺物出土状況

C3b_8区
遺物出土状況

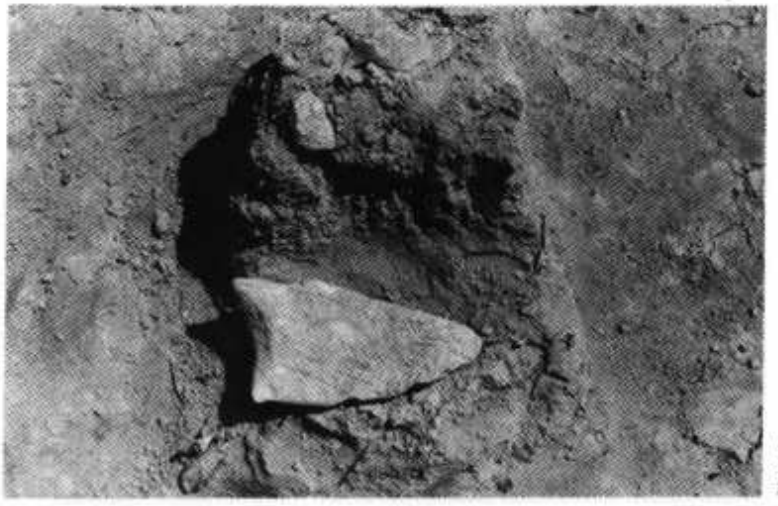
C3b_8区
遺物出土状況

C4b$_1$区
遺物出土状況

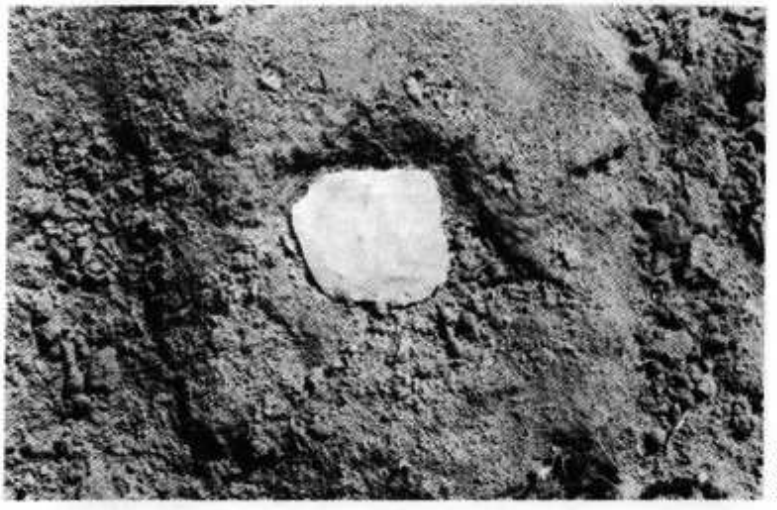
C4b$_2$区
遺物出土状況



C4c$_1$区
遺物出土状況

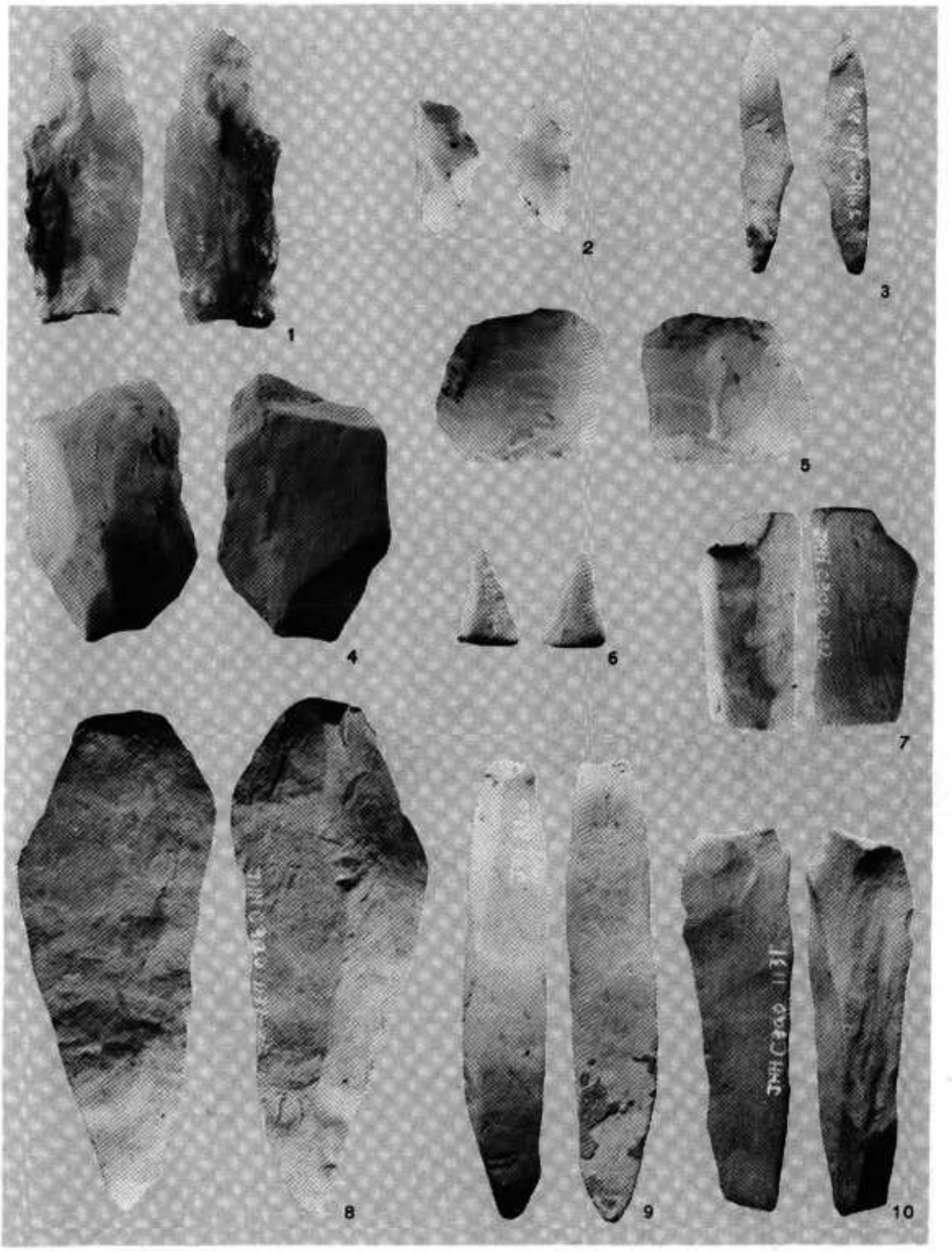


C4c₁区
遺物出土状況



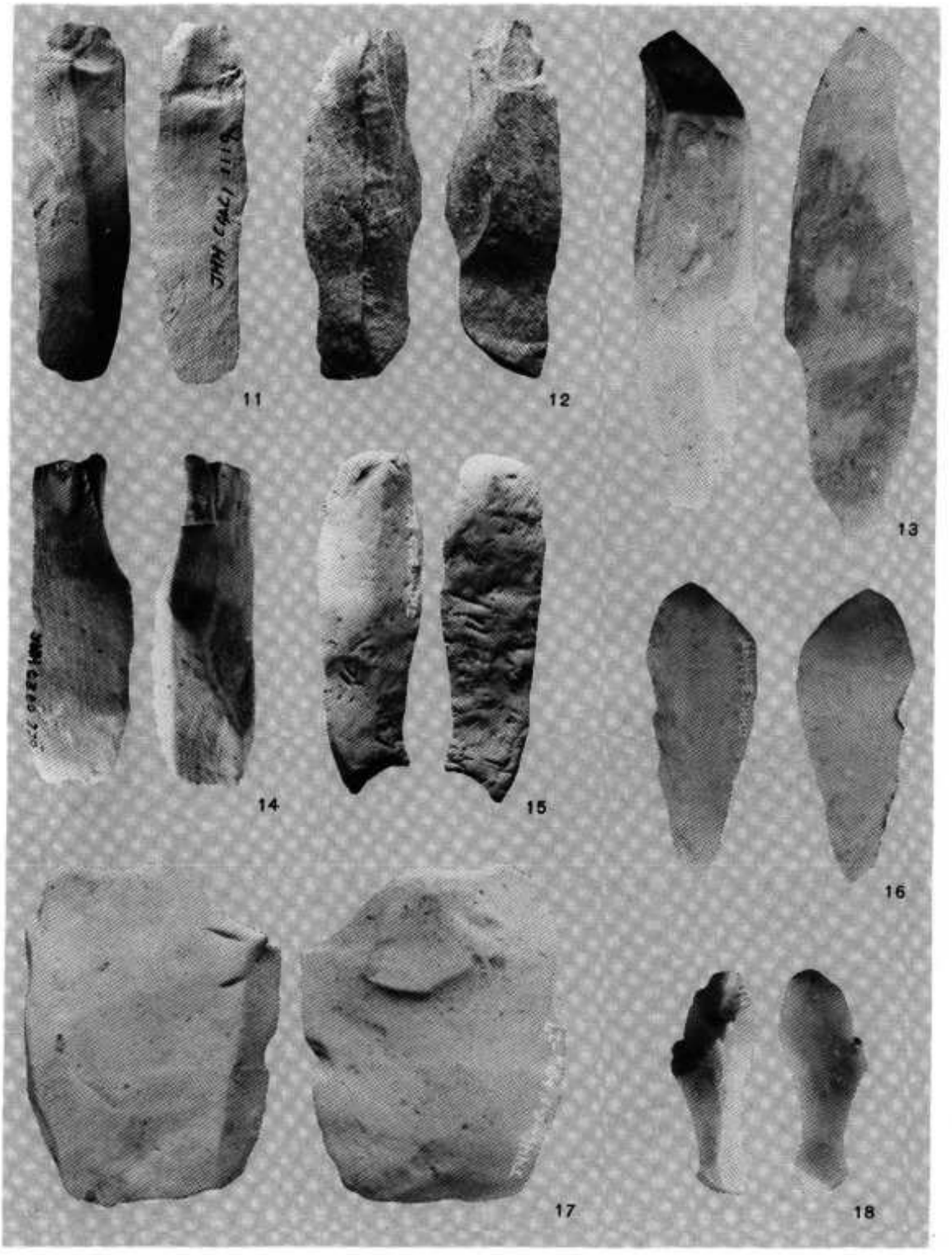
C4c₁区
遺物出土状況

C4c₁区
遺物出土状況



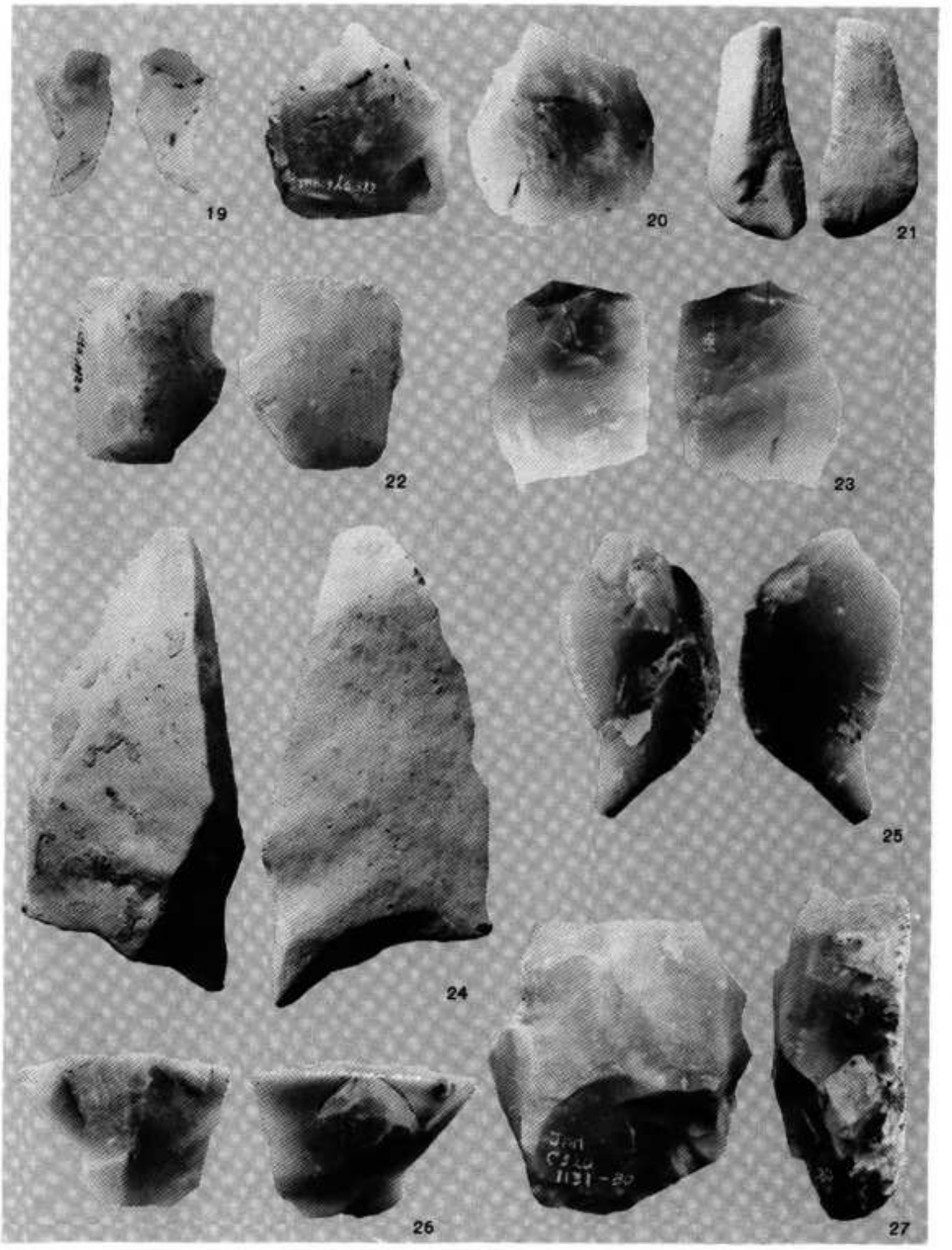
1－Q 9・2－Q10・3－Q34・4－Q14・5－Q26・6－Q80・7－Q21・8－Q 8・9－Q37・10－Q 7

先土器時代石器　ナイフ形石器(1～3),掻器(4・5),尖頭器(6),削器(7・8),石刃(9,10)



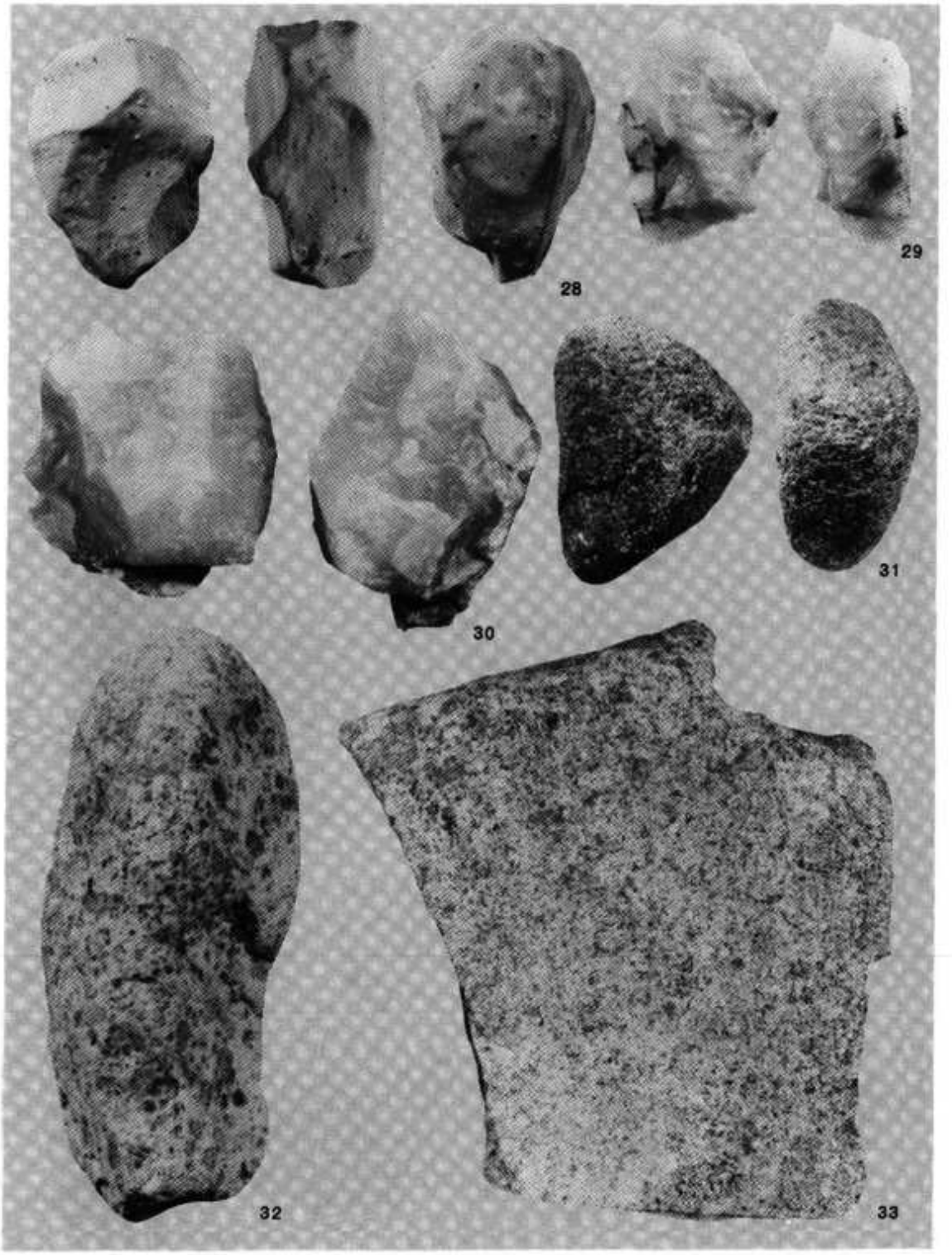
11－Q27・12－Q148・13－Q22・14－Q20・15－Q36・16－Q149・17－Q147・18－Q19

先土器時代石器　石刃（11～15），石刃状剝片（16），剝片石器（17），剝片（18）



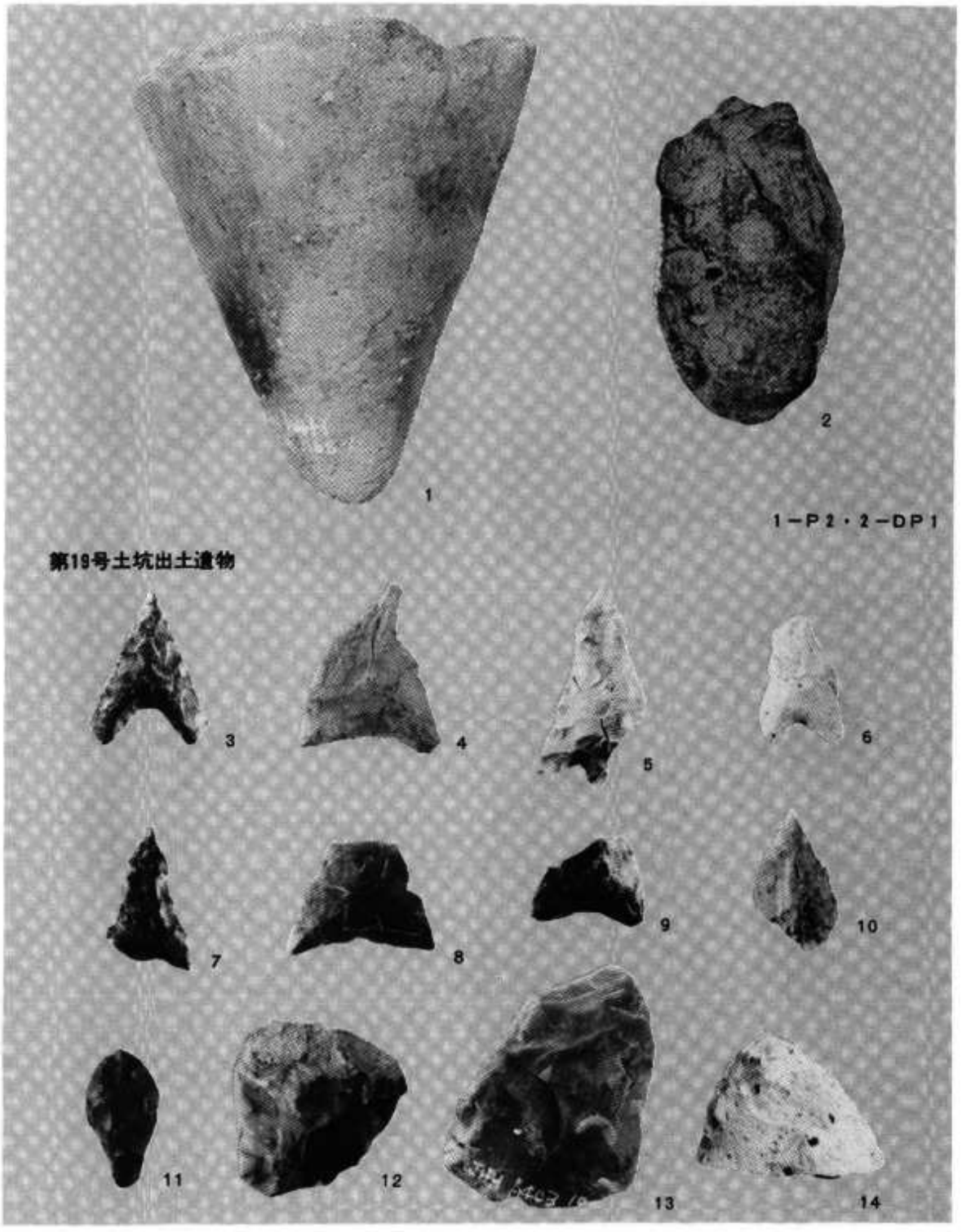
19－Q25・20－Q30・21－Q29・22－Q 6 ・23－Q 2 ・24－Q28・25－Q18・26－Q31・27－Q 4

先土器時代石器　剝片（19，21～26），打面調整剝片（20），石核（27）



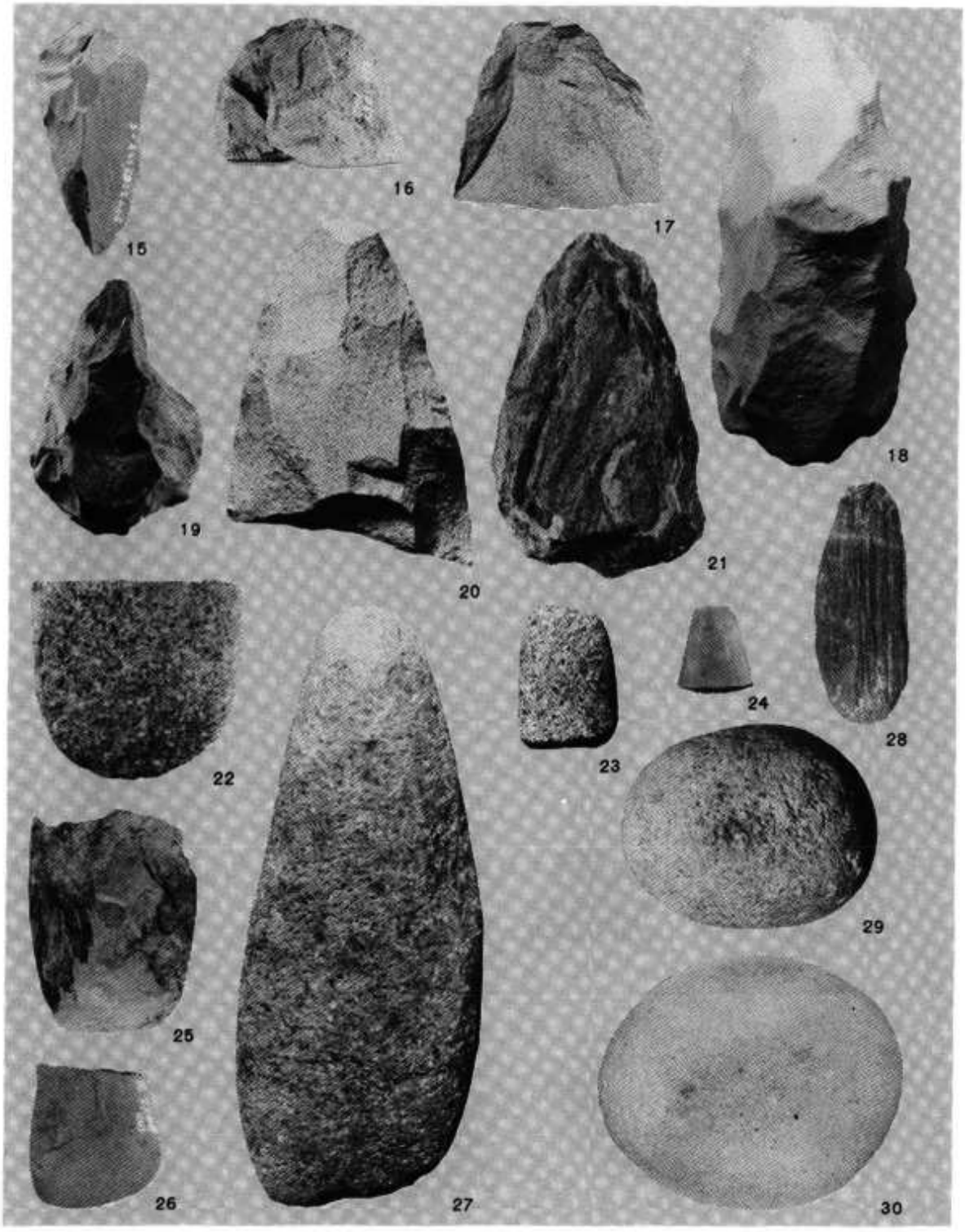
28－Q35・29－Q12・30－Q 1 ・31－Q23・32－Q33・33－Q130

先土器時代石器　石核（28～30），敲石（31，32），台石（33）



3－Q48・4－Q71・5－Q51・6－Q70・7－Q62・8－Q67・9－Q56・10－Q68・11－Q78・12－Q49
13－Q43・14－Q54

縄文時代石器　石鏃（3～10），石錐（11），掻器（12，13），尖頭器（14）



15－Q45・16－Q77・17－Q154・18－Q69・19－Q55・20－Q53・21－Q38・22－Q76・23－Q61・24－Q156
25－Q59・26－Q60・27－Q72・28－Q151・29－Q74・30－Q47

縄文時代石器　削器（15），打製石斧（16～21），磨製石斧（22～27），敲石（28），磨石（29，30）

茨城県教育財団文化財調査報告第36集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

細　原　遺　跡

昭和60年11月18日印刷
昭和61年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　有限会社　川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号